

武庫川女子大学紀要

第七十卷

令和四年度

武庫川女子大学紀要

第70卷

武庫川女子大学

2022

武庫川女子大学紀要

第 70 卷

THE BULLETIN OF MUKOGAWA WOMEN'S UNIVERSITY

LXX

目 次

CONTENTS

- 『新可笑記』巻三の五「取りやりなしに天下徳政」の検討 羽生 紀子
—鎌倉幕府第九代執権北条貞時と永仁の徳政令・霜月騒動・平禅門の乱—
Study of *Shin Kashoki*, volumes 3-5, Hojo Sadatoki, the ninth regent of the bakufu and
the Einin no Tokuseirei, the Shimotsuki Incident, and the Heizenmon Incident
Noriko HANYU (1)
- 小学生新聞の投書特集における結束性 設楽 馨
The cohesion of the special feature on letters to the editor in Newspaper for Children
Kaoru SHITARA (11)
- 高校生における対人ストレスに及ぼすソーシャルサポートの検討
—対人ストレスコーピングを介して— 玉木 健弘・堺 日菜乃
Effects of Social Support on Interpersonal Stress in High School Students
—Through Interpersonal Stress Coping— Takehiro TAMAKI, Hinano SAKAI (21)
- ケステンバークムーブメントプロフィールの自動化に伴う 崎山 ゆかり
入力装置使用時の記譜者の身体的共感に関する検討
A Study of the Notator's Kinesthetic Empathy in using Input Devices
in automating the Kestenberg Movement Profile Yukari SAKIYAMA (31)
- “The Rover” 再考 西山 裕子
—ブランウェル・ブロンテの作品における海賊—
Reevaluating “The Rover” in the Context of the History of Pirates in Branwell Brontë's Angrian Poems
Hiroko NISHIYAMA (39)

特定外来生物発見・通報を支援するアプリケーションの開発

榎並 直子・小林 時嘉

Development of an Application to Support the Detection and
Reporting of Specific Invasive Alien Species

Naoko ENAMI, Tokika KOBAYASHI (49)

都市と農村交流における域学連携教育モデルの可能性
—「あやべ大学」の実践的取組事例より—

藤井 善仁

Possibility of Interdisciplinary Education Models in Urban–Rural Exchanges
From a Practical Case Study of “Ayabe University”

Yoshito FUJII (55)

高校「校則」の「見直し」と地域性に関する一考察
—北海道内公立高校に着目して—

大津 尚志

Current School Rules in High Schools:
Specific Characteristics in Public High Schools in Hokkaido

Takashi OTSU (65)

『新可笑記』巻三の五「取りやりなしに天下徳政」の検討 —鎌倉幕府第九代執権北条貞時と永仁の徳政令・霜月騒動・平禅門の乱—

羽 生 紀 子
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

Study of *Shin Kashoki*, volumes 3-5, Hojo Sadatoki, the ninth regent of the bakufu and the Einin no Tokuseirei, the Shimotsuki Incident, and the Heizenmon Incident

Noriko HANYU

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University*

Abstract

In this paper, I examine the three-layered structure of *Shin Kashoki*, volumes 3-5 in a reconsideration of the conventional views on its sources. Regarding Einin no Tokuseirei, I find that the account comes directly from the Aitai Sumashi Rei (Mutual Settlement Decree), concluded in the first year of Kanbun (1661). Ihara Saikaku repeatedly uses plot reversals in narrating anecdotes about Guo Ju, the subject of the story, as stories about the growth of his son. I also discuss the third layer, the anecdote of Hojo Sadatoki, as a multilayered world. In Volume 3, Saikaku presents an anecdote regarding the regents of the Kamakura Shogunate. Rather than criticizing the regents of Hojo, Saikaku praises them for their excellence as chief retainers of management. This provides an image of the Kamakura period as a beautiful and good time now in the past. Volume 3 constitutes a series of warlord anecdotes of this type.

はじめに：「十五歳」「仁となり」「成人して」

私はこれまで『新可笑記』の三層構造について検討してきた。各章の創作意図は、第一層の素材を駆使して創作された第二層(本話)の換骨奪胎による「虚」の面白さと、その上に重ねられた第三層(重層世界)の「実」の面白さを読み取って笑うという、「二つの笑い」にあることを論じてきた。同時に全巻の構成にも意図があり、「武将逸話列伝」という類聚方針が認められることを明らかにした¹⁾。

巻3では、西鶴の鎌倉幕府への熱い視線が感じられた。巻頭章から巻3の4までの4章についての検討からは、鎌倉幕府の執権たちの国の平穏を願う知略と強い志に、西鶴が武士としてのあるべき姿を見ていたことがわかる。それぞれの重層世界として第5代執権北条時頼、第3代執権北条泰時、第4代執権北条経時、第8代執権北条時宗の逸話が重ねられていた。巻3の第三層である重層世界は、鎌倉幕府の代々の執権の逸話であり、続く巻3の5も、鎌倉幕府の執権の逸話が重ねられていると考えられる。西鶴が巻3の1から4で取りあげたのは、北条氏の中でも嫡流である得宗家の執権たちであった。第9代執権貞時は、弘安7年(1284)4月に父時宗が34歳で病死したことにより、13歳(満12歳)の若さで執権に就任する。鎌倉幕府の執権継承が北条氏得宗家の独占的なものとなっていたことについては、前章の検討の際に触れたが²⁾、時宗の急死によるとはいへ、13歳という若年での継承はさまざまな問題を孕んでいたと考えられる。本話で殊更に「十五歳」「仁となり」「成人して」と繰り返されているのは、貞時の若年での執権就任が関連しているのである。

本稿では従来指摘されている素材を改めて検証し、本話への換骨奪胎の具体相を吟味すると共に、その上に重ねられた重層世界および主題について検討する。

あらすじ：生まれた子を相手に押し付け合う話

本章は後述する三つの素材を取り込んでいる。それを踏まえて、内容を①から③の三つに分ける³⁾。

- ①「古代、万氏の商売薄く、里人はなほ困窮して、おのづと道を背き、人の心虚になつて実を失ひ、都さへ借錢公事の外はなく、有徳なるは世を渡り、貧者は渴命に及べり」。夜盗も白昼から横行するといふので京都の奉行が奏聞し「もろともに僉議」の後、「古例に任せ天下徳政になして、皆免の時改めて掟を正せ」という「勅命」、その日のうちに「平安城の八つ口」に「徳政の世」と触れ出した。「八月下旬」のことであるのに、大晦日の気持ちになり、収支決算をしたり大福帳を焼いたり、証文を取り乱して泣く者、喜ぶ者。金持ちの金は人のものに、貧乏人は借り得となって、格別な世の有様である。
- ②その頃、三条の蒔絵細工師何某は臨月の妻を離縁した。生まれた男子をめぐって、女房は「この子は母親の腹を貸し物」だから、徳政の通りにこちらの損にして、子は父親のもとへとと言う。夫は「父親の種こそ貸し物」だから、こちらの損にして女のものと云って譲らないため、仲人は奉行所に訴えた。奉行は「汝らは我が物を人の物にして、損を顧みぬ所」は殊勝、どちらの言い分ももっともである。「その子十五歳になるまで、仲人に預け置くなり。自分の知恵付きて」、どちらを選ぶかで決めよ。それまでは仲人に預けて養育は双方が「受け持つように、と裁いた。」
- ③両親は「公儀は違背ならず」と、「難儀ながら毎日毎夜仲人のところへ通って育てたが、「世上見る所もうるさく女は悲しく」、夫は「渡世欠けて次第に迷惑して」、奉行の許しを得、以前とは変わって仲睦まじい夫婦になった。「その子仁となり、世渡りに賢く」、金銀を儲けて親に孝を尽くした。

ある時、息子は祇園祭りの山車の運行を見物。釜掘り山は二十四孝の「郭巨が我が子を埋みぬる鍬の勢ひ」、見事なものである。人々が「いかに親の孝なればとて、わが子を埋む事やあらん」、黄金の釜が出なければ子を殺すところだったのだ。「これなる人も」天下徳政の時、両親が互いに子はいらないと押し付け合ったが、天は人を殺さず、「今成人してかへつて二親に孝ある人や」と昔を語って聞かせた。「この一子、これより父母に恨み起こりて、蓄へし金銀取つて」、どこかへ身を隠してしまった。

素材：相対済し令、「黄覇叱奴」、郭巨の説話

広嶋進氏は①の素材として貞享2年(1685)の相対済し令(『徳川実記』7月19日の条)を指摘し、『新可笑記』出版時に近い時点で施行された実際の政策を取り上げたもので、そこに政道批判がみられるとしている⁴⁾。また、同氏校注の「新編日本古典文学全集」では、「八月下旬なるに」の注(561頁頭注34)に、寛文元年(1661)閏8月27日の相対済し令を踏まえるか、としている。

本話に「八月下旬なるに」とあることから、ここは貞享2年のものではなく、寛文元年に出されたものが直接の素材であると考えられるが、今少し吟味する必要がある。大石慎三郎氏の論考を参考に、江戸時代初期の相対済し令に関連する事項について整理すると、次のようになる⁵⁾。

元和8年(1622)8月「京都町中可令触知条々」、慶安4年(1651)5月「江戸市中への町触」、万治2年(1659)11月「江戸市中への町触」(万治3年10月にも同じ内容の町触)、寛文元年(1661)6月「江戸市中への町触」において、幕府は借金銀や売り掛け等、商業拡大の必須条件である信用供与行為に対して、訴権を認めないということはなく、商業の保護育成の方針をとっていた。

ところが、寛文元年閏8月27日に出された「町触」はそれまでとは様相を異にし、相対済し令とみるべきものである。明暦3年(1657)正月のいわゆる振袖火事を受けたものである。その後の復興工事は江戸の復興景気をもたらしたが、同時に経済活動の混乱が生じていた。それが落ち着いた寛文3年6月の「町触」では、江戸市域における売り掛け訴訟受理の拒否が撤回される。

次に相対済し令が出されたのは、貞享2年(1685)である。元禄15年(1702)の相対済し令に「拾八年以前丑年之通」(『御触書寛保集成』2560号)、とあることからその存在は知られているものの、本体は未発見であるが、石井良助氏は「評定所出座定書并永年季」の記事を根拠に、その内容を推定

している⁶⁾。天和2年(1682)12月28日の大火(八百屋お七の火事)の事後処理のため、一時的に支払い猶予令が出されていたが、それを停止して貞享2年7月18日までのものは相対済しとする。復興景気の結果、金銭貸借が頻繁に行われて金公事に支障をきたすようになったための措置だという。なお、7月19日以後のものについては、訴訟受け付けは再開されている。

本章に関わる「相対済し令」関連の事項は以上の通りである。寛文元年、貞享2年の相対済し令のいずれが素材となっているのだろうか。本話①には「古例に任せ天下徳政になして、皆免の時改めて掟を正せ」「八月下旬」とあった。もし貞享の相対済し令を素材とするなら、寛文の相対済し令については「古例」ではなく「先例」と表現しそうである。「皆免の時改めて掟を正せ」は、諸注に「期限をかぎって貸借関係を停止した上で、改めて規律を正せ」と現代語訳されているが、「皆免」によってすべてを免ずる「掟」にせよと読むべきものではないだろうか。本章は寛文元年閏8月27日の相対済し令を直接の素材としていえると考えべきである。後述するが、西鶴が「古例に任せ天下徳政」としているのは、章題にも「天下徳政」とあることを含めて、本話の重層世界、北条貞時の「永仁の徳政令」を示すシグナルなのである。大火(振袖火事)には、蒙古軍の襲来という、未曾有の出来事が重ねられている。

②の素材として、広嶋氏は『塵塚物語』巻4の10「徳政の事」(『醒睡笑』巻4「聞えた批判」、『籠耳』巻3「借傍屋取表家」は類話)を指摘する⁷⁾。仲沙織氏は、『棠陰比事』「黄覇叱奴」の説話を指摘し、『醒睡笑』巻4「聞えた批判」収録の一話との関連に注目している⁸⁾。西鶴がいずれを直接的な素材としたか検証しなければならない。

『塵塚物語』巻4の10「徳政の事」について、広嶋氏は次のように要約している。

旅館の主人が客から所持品を借り、徳政を理由にまき上げようとするが、客も対抗して、借りた宿を奪おうとする。奉行所の裁きによって、主人は旅館から追放された、というものである。

『塵塚物語』の話はお互いがそれぞれ借りたものを返さずに自分のものにするという話で、一つのものの所有権を争うというものではない。旅館の主人と客ということで、他人同士の争いである。所有権に関わるということでは共通しても、本話②の夫婦の話とは異質であり、素材とすることはできない。

『棠陰比事』「黄覇叱奴」の説話は、次のようなものである⁹⁾。

前漢の黄覇と云し人、潁川といふ所に太守たりし時に福人あり。兄弟同じ家に住みけり。兄弟の女房、ともに同じく懐妊せり。兄嫁の子は、体内にて損ねて死したり。此子の死したる事、深く隠して言ふ事なし。弟嫁、男を産めり。兄嫁これを奪ひ取りて、己が子とす。これを論ずる事三年に及べり。すでに黄覇に訴えけり。黄覇、此子を人に抱かせて、庭中にをいて二人の女房に奪はせけり。両方ともに奪ひけるが、兄嫁は猛く勇みかゝりて、子の手足も切るばかりに奪ひける。弟嫁は、その子の手足の損ぜん事を悲しむと見えて、その心ばへ、甚だ労はれり。黄覇の曰く、汝兄嫁家財を貪りて、此子を盗まんと思ふ。又子の手足を、損なはん事を悲しむは、俄かに作り出せる心にあらず。此事明らかなりと宣ひて、兄嫁を科に落しける。

「黄覇叱奴」では、子どもの親権を兄嫁と弟嫁(母親)が争う。3年の間解決できなかったが、兄嫁と弟嫁の子への愛の深さの違いを見抜く、黄覇の見事な裁きによって決着する。

この話を逆転させるとどのようなことになるのであろうか。まず子どもを取り合うのではなく、押し付け合うことになる。両者が自分の子でないと主張し、養育を放棄する正当な道理を設定しなければならない。それには夫婦の離婚の問題だけでは不十分で、子への愛がない功利的な対応ということではなければならないだろう。「黄覇叱奴」では、子どもがどちらかを選ぶという子の判断に頼ることはまったくないが、②で付加された要素は、15歳まで仲人に預け、子の成長を待って判断させようとするものである。新しい要素が付加されているが、巻3の他の章と同様に、逆転の趣向を用いているとすべきであろう。そのように逆転させて子を押し付け合うことは、重層世界を示すシグナルである。

『醒睡笑』巻4「聞えた批判」の一話(「下京にちと有徳なる…」)は、次のような話である¹⁰⁾。

下京の有徳者の息子は2歳の時に母親を亡くし、父親は後妻を娶る。6歳の時、父親が病になり、兄に「我子幼稚也」、成人するまで養育して、その後、自分の家を継がせてほしいと亡くなる。しかし継母は自分が育てると主張し、伯父との間で親権争いとなる。訴え出ると、伊賀守(板倉勝重)は

「いふ所、いつれも理あり」と両者の主張を認め、息子に選ばせることにする。息子が伯父の膝に座ったので、「後はともかくもあらん」と、伯父に預けた。

これは6歳の子どもが自分で親権者を選んだように見えるが、判断力のない子どもがいずれに懷いていたかを明らかにしたに過ぎない。「後はともかくもあらん」とあることから、子どもに将来の判断を託したといえる。その意味では、本話②の15歳まで仲人に預け、その上で判断させるという裁きと似通っている。父が「我子幼稚也」と言った6歳の子に選ばせたのは、頓智のようなものである。また継母を嫌い、伯父になつくという必然性も描かれていない。世間一般の継母譚を用いているようにもみえる。

この話は裁判話として不十分で、出来の悪い継母譚となってしまうている。この「聞えた批判」は写本『醒睡笑』に見えるのみで寛永版の版本には採られておらず、また板倉勝重の裁判話を収録した『板倉政要』にも見えないことは、裁判話として不十分とされたことを示すものではないだろうか。西鶴は『新可笑記』の第一層の素材として、一般に周知されていない特別なものは取り上げていない。

③の素材が『二十四孝』の郭巨の説話であることは、本文に示されている。郭巨の説話を殊更に明らかな形で取り上げている意図が問題なのである。郭巨の説話は次のようなものである¹¹⁾。

貧乏思^{びんぱくにしてきう} 供^{せんことをおもふ} 給^{こをうづんではいの} 埋^{そんせるをねがふ} 児^こ 願^{をねがふ} 母^{はは} 存^{ぞく}
黄金天所^{わうごんてんたまふ} 賜^{とく} 光彩^{くわうさいかんもんを} 照^{てらす} 寒門^{かんもん}

郭巨は家貧しくて母を養ひけり。三歳の子を持ちけり。しかるに郭巨が母、此孫をかはやがり、我食を分けて与へけり。あるとき郭巨、妻に語るやう、母の食さへ思ふやうになきを、又そのうちを分けて孫に与へ給へば、さぞ乏しかるらん。所詮我子の有ゆへなり。汝と夫婦の縁朽ちせずは、又も子はあるべし。母は二度有べからずとて、夫婦諸共に此子を埋に行けり。郭巨さすがふびんにて、泪ながらに掘りければ、金の釜を掘り出しけり。扱釜に、天孝子郭巨に給ふ。官うばふ事を得ざれ。民取事を得ざれと書て有。其故に児をば助けて帰けり。不思議成事也。

解釈：愛のある話から愛のない話へ

第一層の素材をAからC、本話のあらすじ①から③をA ii からC ii として、対比する。

A 振袖火事と江戸大改造という経済界の大混乱を受けて、寛文元年閏8月27日、江戸の町触において相対済し令が出される。

A ii 「万氏の商売薄く、里人はなほ困窮」、京都の奉行は奏聞・僉議の後、「古例に任せ天下徳政になして、皆免の時改めて掟を正せ」の「勅命」。「平安城の八つ口」に触れ出された。「八月下旬」なのに、大晦日のような慌ただしさ、貧乏人は借り得となって、格別の世の有様である。

B 前漢の黄覇は、潁川の金持ちの兄嫁と弟嫁の親権争いを裁く。子の奪い合いをさせ、子を傷つけることを悲しんで手を離れた弟嫁の愛情を見極め、弟嫁の子と認めて兄嫁を罰する。

B ii 蒔絵細工師の何某は臨月の妻を離縁したが、徳政だからと、生まれた男子を相手に押し付け合う。奉行は子を仲人に預け夫婦に養育を命じる。15歳になったら子にどちらか選ばせることにする。

C 郭巨は、母を養うために、泣く泣く我が子を埋めようとする。天は郭巨の孝と愛情に应えて、黄金の釜を掘り出させる。郭巨は子を失わずに、母に孝を尽くした。

C ii 蒔絵師夫婦の息子は成人し、世渡りに賢く、両親に孝を尽くす。祇園の山鉾巡行で郭巨の釜掘り山を見物していると、徳政の時、この人の両親は互いに子を押し付け合ったと評判するのを聞く。両親に恨みが起こり、稼いだ金銀を持って姿を消した。

Aの相対済し令は、基本的には当事者同士の相対で解決することを命じた示談促進法である。後に寛政元年(1789)に出された棄捐令とは異なる。相対済し令は経済の大混乱を受けてやむを得ず出されたものであっても、貧乏人の借り得の傾向はあり、貧者救済という意味合いはある。A ii は、何らかの経済の停滞・混乱を受けて、「皆免の時」として「掟」が正されたのである。やはり天下徳政として、庶民救済、世の安寧を目的としているのである。A、A ii は、天下徳政という意味合いでは共通している。

B 黄覇の裁きは、弱者である弟嫁の子への愛を基本にしたもので、一種の徳政であった。B ii は徳政(相対済し令)にこじつけて、子を押し付け合う、愛情のない話に逆転させている。B では福人の兄嫁と弟嫁、

B ii では蒔絵細工の夫婦が取り上げられているが、両方とも裕福な人物である。蒔絵師を登場人物としたことには西鶴の作意があり、重層世界に関連する。その裕福な人物が子を争い、素材 B は奪い合い、本話 B ii では押し付け合うのである。B ii で養育が不可能な貧乏であればともかく、裕福な蒔絵師が養育を拒むということで、愛情のなさを強調しているのである。B ii で B と大きく異なるのは、押し付けるという逆転のみでなく、15 歳まで仲人に預け、息子の成長を待って、選択させるというところである。それは C ii に展開する。

C 郭巨は我が子を愛していないわけではない。母への孝を尽くすために、泣く泣く我が子を埋めようとする。子への愛情を抑えて母を選ぶという、耐えがたい犠牲を払って孝を尽くすという通念を強調して、孝の究極の形を標榜しているのであって、それを実践せよということではない。その意味で C ii の孝行息子が両親を捨てるということは、よほどのことだと思わせるのである。B ii で奉行は、15 歳になればどちらかを選ばせよと命じていた。成人した息子は父母のどちらを選ぶのかと、その展開が期待されていたはずである。息子は郭巨とは違って、両親を捨てたのである。両親が子を押し付け合ったという逆転よりも、子が両親を捨てるという逆転の方がより強烈である。

西鶴に孝を否定する意識がなかったことは明らかで、本話に見える『二十四孝』郭巨に対する批判は、それを観念の上でとらえず、実践的行為と結び付ける解釈を示しているに過ぎないのである。息子は「世渡りに賢く」金銀を稼いで両親に孝を尽くしていた。稼いだ金銀は、郭巨に授けられた黄金の釜にあたるのであろう。郭巨と違って愛のなかったことに気付いた息子は、一家を幸せにした釜を持って姿を消したということになる。残された蒔絵師夫婦は裕福なのだから、金銀そのものではなく、その釜に象徴される天の恵みに見放されたのである。蒔絵師夫婦の破滅的な運命を暗示しているのである。

重層世界：北条貞時と安達泰盛・平頼綱

巻 3 の 5 の第二層である本話は、素材を自在に駆使し逆転させた面白い話となっている。「黄覇叱奴」と郭巨説話の逆転にみられる西鶴の作意を、仲沙織氏は、「偽郭巨物語」の創作であったとしている¹²⁾。

作り物の郭巨によって、郭巨のように暮らす両親達の非を暴き出す、つまり《偽物》の「郭巨」物語が崩壊する―巻三の五はこのような構成となっている。風景や事物を写しとる蒔絵のように「郭巨」となった蒔絵細工職人夫婦も、真実が明らかになると金粉装飾がはがれ、偽物であることが露呈してしまうのである。

蒔絵師夫婦を偽郭巨に見立てることは正しいのだろうか。蒔絵師夫婦は「公儀は違背ならず」と仲人の所へ養育に通い、「世上見る所もうるさく女は悲しく、夫は渡世欠けて次第に迷惑して」と、息子を引取る。本話中に「夫婦の語らひ親しく」と描かれるが、息子への愛情についてはまったく触れられていない。捨てようとして引取るというのが郭巨と似通うので、偽郭巨とすることは基本的には間違っていない。しかし成長していく息子に何の対処もしていない。夫婦のあり方に孝や愛が少しでも描かれていれば、「偽郭巨物語」を演じているとすることも可能であるが、描かれているのは功利と打算のみである。自分たち夫婦の事しか考えていないようなあり方は、本話の中心的な話題とは位置づけることはできず、蒔絵師夫婦の「偽郭巨物語」の創作が目的であるとはいえないのである。

それに対して、息子が郭巨の息子の成長物語を演じているのである。郭巨の説話では息子は埋められそうになるだけであり、「黄覇叱奴」でもまったく描かれなかった。本話では「十五歳になるまで」として息子を成長させ、その息子が「仁となり、世渡りに賢く」孝を尽くし、「今成人して」真実を知ることになる。子どもの成長は、「黄覇叱奴」と郭巨説話に付加された重要な要素なのである。

以上のように、蒔絵師夫婦の息子の成長物語として本話を読むと、そこに重ねられているのは、第 9 代執権北条貞時であることに思い至る。北条貞時の逸話で著名なものは、13 歳という若年で執権を継承したことであろう。その貞時が 14 歳の時、弘安 8 年(1285)に霜月騒動、22 歳の時、正応 6 年(1293)に平禅門の乱が起る。貞時は 26 歳になった永仁 5 年(1297) 3 月に徳政令を發布する。

本話の舞台は京都である。京都には鎌倉幕府の六波羅探題が置かれていた。①「もろともに僉議」というのは、六波羅探題と朝廷の関係を踏まえてのものであろう。「古例に任せ天下徳政になして」は、奈良

時代からの朝廷の徳政・仁政を匂わすものである。「徳政」とあえて表現することで、貞時の徳政令を想起させている。京都には「七つ口」しかないが、それをあえて「平安城八つ口」とすることで、本当は鎌倉のことだと気付かせる。鎌倉も七口(七切通し)と言われるが、その認識は江戸時代に入ってからのもので(『新編鎌倉志』〈水戸光圀の命による編纂、貞享2年刊)などにみえる)、実際には主要な切通しは釈迦堂口を加えて八つ存在した。

以上のように、本話には北条貞時の逸話が重ねられていると考えられる。素材のAからC、本話のA ii からC ii に対応させて、重層世界をA iii からC iii として対比してみる。

A iii 蒙古軍の襲来という大事件を契機として、永仁の徳政令発布の中心的課題は、御家人の売却・質入れした所領、非御家人・凡下の買い取った所領を、元の領主の領有に戻すところにあった。

B iii (1) 平頼綱は、安達泰盛の嫡男宗景(秋田城介)が源氏の正統であると称して謀反を起こし将軍になろうとしていると、貞時に告げたという。

B iii (2) 平頼綱の嫡男宗綱は、頼綱が次男の資宗を将軍にしようとしていると貞時に告げたという。

C iii (1) 霜月騒動。北条貞時得宗家の御内人によって、安達泰盛とその一族が滅ばされる。安達一族に与した御家人を巻き込む大騒動であった。

C iii (2) 平禅門の乱。平頼綱が北条貞時によって討たれる。

A iii 永仁の徳政令は日本最初の徳政令とされる。後に触れるように最初であるかどうかは疑問で、正確な条文は不明であるものの、「関東事書案」(『東寺百合文書』)によって「一、可停止越訴事／一、質券売買地事／一、利銭出挙事」の三か条が知られる¹³⁾。

「可停止越訴事」の内容は再審請求の停止である。「質券売買地事」は債権債務の訴訟を受理しないという内容で、具体的には、御家人の所領の売買・質入れを禁止し、既に売却・質流れした所領は元の領主の所有にすることを命じている。ただし幕府が認めたもの、20年を経過したものはこの限りではない。また非御家人や凡下の輩(武士以外の庶民・農民・商工業者)の買得地は年限に関係なく、元の領主のものとしている。

再審請求の停止や訴訟の不受理は、寛文元年の相対済し令に類似する。「質券売買地事」は、所領の無償返却を命じるもので棄捐令に等しい。鎌倉幕府は「御成敗式目」を制定し、次々と追加法を出して、法による全国の統治を目指していた。それは巻3の2「国の掟は知恵の海山」にみた通りである¹⁴⁾。徳政令は、「非御家人・凡下の輩」の權益を無視し、御家人の救済・保護を目的としていることは明白である。そのような大きな統治のあり方の転換は、何ゆえ起こったのであろうか。

鎌倉幕府は将軍を頂点にして、それを支える御家人によって成り立っている。将軍は名目的な権力者で、執権の得宗家が実権を握っていたが、御家人制度は幕府の根幹であった。御家人が所領を十分に所有し、そこから年貢を得て御家人役を務めることによって成立していた。そのために「御成敗式目」では、第3条から第8条まで、さらに第43・44・46・47・48条にも所領の問題を取り上げている。徳政令の所領の無償返却の問題は、その所領の相続に関わっている。鎌倉幕府における惣領制・分割相続制は、驚くほど公正なものであるといえる。女子を含めて子どもに平等に分割相続させるというのが基本であった。その分割相続制の上になって、惣領のもとに結束するというものである。惣領制・分割制は、一門の結束を図るという点で有効であったが、代を重ねると徐々に一門意識が薄れると共に、所領の分割が進み零細化する御家人が増加してくる。御家人が零細化し、所領を質入れしたり売却したりし、ついには得宗家の御内人となるものが増えてきていた。新しい御内人層が形成されていたのである。また、「悪党」とよばれる非御家人層も実力をつけてきていた。

貨幣経済の進展もあるが、この傾向に拍車をかけたのが、文永11年(1274)、弘安4年(1281)の蒙古襲来であったとされる。しかし蒙古襲来以前からこの傾向は顕著であった。本郷和人氏は、永仁の徳政令に先立って、文永4年12月、文永7年5月に徳政令とみなされる追加法が出されていることを指摘している¹⁵⁾。

文永4年の追加法「以所領入質券令売買事」は文永7年5月の追加法で破棄されるが、再び文永10年7月に追加法「質券所領事」として徳政令が出されたのである。文永4年の執権は第7代北条政村、文永

10年の執権は第8代北条時宗であるが、この徳政令は、具体的には誰の手によって出されていたのだろうか。

安達泰盛は北条貞時の外祖父として幕政を主導していたが、弘安7年(1284)4月の北条時宗死去の直後、5月には「(弘安)新式目」と呼ばれる38か条の追加法を制定した。さらに貞時の執権就任までに100か条余りの追加法を制定しており、弘安7年5月27日評定の追加法で徳政令を撤回している。

一 沽却質券地ならびに他人和与所領の事、

御家人等、所領をもつて或は沽却し質券に入れ流し、或は他人に和与するの時、子細を証文に載するといへども、限りある公事は、本領主の跡に相加はりて、その沙汰を致さるべし。年貢等に至つては、分限に随ひ進済すべし。¹⁶⁾

安達泰盛は、追加法で徳政令を撤廃しようとしていたのであるが、その動きは翌8年、得宗家の内管領平頼綱による霜月騒動で頓挫することになる。永仁の徳政令は、泰盛の法による統治とは、その方向性を逆にするものであった。

この徳政令が出されたり廃止されたりしたことについて、本郷氏は、次のように論じている。

モンゴルの来襲に日本が揺れていた頃、鎌倉幕府には異なる指向性を有する二つのグループがあった。そのうちの一つは御家人の利益を重視し、他方は「統治」行為を重視した。後者は社会の流動性を直視すると同時に、御家人社会の拡大を企図していたのだが、その代表者こそが安達泰盛であった。(中略)

頼綱と彼を嗣ぐ者たちは幕府の利益を第一に考え、徳政令を出し、朝廷を遠隔操作し、特権化していく。在地の非御家人たちは御家人に認定されることなく、「悪党」として排除されていく。

本郷氏は霜月騒動について、泰盛を代表とする御家人勢力と平頼綱ら御内人の激突とする説、両者のどちらが真の得宗の輔弼勢力かを決するための衝突とする説、泰盛は全国の武士たちを幕府勢力に組み込む努力をし、その政策に反対する頼綱ら既存勢力に打倒されたとする説を踏まえた上で、安達泰盛と平頼綱の二派の衝突を、統治派と御家人擁護派の覇権争いとして分析している。徳政令の発布と廃止は、この二つのグループの間での政争の結果であるとするのである。

徳政令や霜月騒動についての史的位置づけについては、本郷氏の所説に従うとして、本稿では、西鶴の徳政令や霜月騒動への把握がどのようなものであったかということが重要である。西鶴は、現代の歴史的な分析結果を知る由もなく、当時の世俗的な徳政令や霜月騒動に対する理解に基づいていたはずで、徳政令には所領分割と蒙古軍の襲来が関わり、安達泰盛と平頼綱の二派の衝突は、同質の邪な悪の衝突として捉えていたのではないだろうか。蒙古襲来に相当するものは、Aでは振袖火事であった。

西鶴は、本話Bii蒔絵細工師の何某が互いに子押し付け合ったことに、貸した、または支払った金銀が相手のものとなり、質に取った、または買った土地が取り上げられるという徳政令を嵌め込み、さらに分割相続を避けようとするあり方を重ねている。というよりも、徳政令と分割相続制を想起させるために、子押し付け合わせたのである。子がいなければ所領を分割する必要はないのだから、そのような展開は、零細な御家人の場合には、ある意味でありうることもかもしれない。しかし、西鶴は零細な御家人ではなく、逆転させて、裕福な蒔絵細工師の夫婦の行為にしている。そこに西鶴の作意がある。第二層の本話のみを解釈すれば愛情の無さを強調するものとするだけで十分だろうが、第三層の重層世界に関わると気付けば、西鶴が他の職業ではなく蒔絵師としたことについて、もう少し突っ込んで考えることが可能になる。

①で「古代、万氏の商売薄く、里人はなほ困窮して、おのづと道を背き、人の心虚になつて実を失ひ、都さへ借錢公事の外はなく、有徳なるは世を渡り、貧者は渴命に及べり」とあった。「道を背き、人の心虚になつて実を失ひ」は、子押し付け合うような愛のない行為をいうのであろう。また「有徳なるは世を渡り」は蒔絵師夫婦の裕福さに相当する。蒔絵は庶民とは無縁の贅沢なもので、天皇即位の際の調度品、あるいは公家の調度品のほか、婚礼調度品として用いられるものである。蒔絵師は、代々將軍家などのお抱えの御用蒔絵師として仕えていたのである。御用蒔絵師の二大流派には、幸阿弥派、五十嵐派がある。この二派を、本話の蒔絵師夫婦に取り込んだと考えられる。蒔絵の調度品として著名なものの一つ

に、豊臣秀頼に嫁いだ千姫の鏡台「初音蒔絵調度」がある。千姫は秀頼の娘(天秀尼)を養女にしているが、前章巻3の4では、天秀尼に関連する東慶寺が取り上げられていた。現在東慶寺には重要文化財「初音蒔絵火取母」など60点余りの蒔絵調度品が伝えられている。西鶴の当時でも東慶寺の蒔絵は著名なものであったであろう。西鶴はそのようなことも関連させ、蒔絵師夫婦を登場させたのである。

將軍あるいは執権に近く出入りする蒔絵師に、幕政に深く関与した安達泰盛と、得宗家の執事、内管領である平頼綱を重ねたのであろう。安達泰盛が夫に、平頼綱が妻に重ねられたのであろうか。泰盛は、北条貞時の外祖父である。貞時の母覚山尼は、1歳の時父義景が死に、21歳年の離れた異母兄泰盛の猶子として養育され、11歳で時宗に嫁いでいる。頼綱は、貞時の乳母の父である。鎌倉幕府の幕政を左右する二つの勢力に加えて、御用蒔絵師の二大流派をも踏まえられているのである。

Biii重層世界では、霜月騒動と平禅門の乱を合わせているが、二つの同じような讒言ともいえるものを合わせることで、執権である貞時を排除して、それぞれが將軍を擁立して、執権の立場に取って代わろうとしている一連の出来事として描いているのである。そのように考えると、Biii(1)、Biii(2)の、どこか似通った讒言が、子を押し付ける争いに重ねられていることに気付く。

Biii(1)、Biii(2)は、『保暦間記』では次のような記事である¹⁷⁾。

Biii(1)其比貞時ガ内管領平左衛門尉頼綱不_レ知_二先祖人_一。／法名果因圓イ。ト申有リ。又権政ノ者ニテ有ケル上ニ。僞ヲ健クスル事泰盛ニモ不_レ劣。同八年四月十八日貞時任_二相模守_一。爰ニ泰盛。頼綱。中惡シテ互ニ失ハントス。共ニ種々ノ讒言ヲ成程ニ。泰盛ガ嫡男秋田城介宗景ト申ケルガ。僞ノ極ニヤ。曾祖父景盛入道ハ右大将頼朝ノ子成ケレバトテ。俄ニ源氏ニ成ケリ。其時頼綱入道折ヲ得テ。宗景ガ謀反ヲ起シテ。將軍ニ成ラント企テ源氏ニ成由訴フ。誠ニ左様ノ気モ有ケルニヤ。終ニ泰盛法師法名／覺真。子息安景宗イ。弘安八年十一月誅セラレケリ。兄弟一族【之數】天_外刑部卿相範。三浦対馬守。隠岐入道。伴野出羽守等志有ル去ルベキ侍ドモ。彼ノ方人トシテ亡ニケリ。是ヲ霜月騒動ト申ケリ。

Biii(2)其後平左衛門入道果圓僞ノ余ニ子息廷尉ニ成タリシガ。安房守ニ成テ飯沼殿トゾ申ケル。今ハ更ニ貞時ハ代ニ無キガ如クニ成テ。果圓父子天下ノ事ハ安房守ヲ將軍ニセント議シケリ。彼入道嫡子平左衛門宗綱ハ忠アル仁ニテ。父ガ悪行ヲ歎テ此事ヲ貞時ニ忍ヤカニ申タリ。此上ハトテ平左衛門入道果圓父子ヲバ。正応六年永仁／元年。四月廿二日被_レ誅畢。

泰盛と頼綱の行為は、「曾祖父景盛入道ハ右大将頼朝ノ子成ケレバトテ。俄ニ源氏ニ成ケリ」と「天下ノ事ハ安房守ヲ將軍ニセント議シケリ」とあって、極めて似ている。その行為を「宗景ガ謀反ヲ起シテ。將軍ニ成ラント企テ源氏ニ成由訴フ」「父ガ悪行ヲ歎テ此事ヲ貞時ニ忍ヤカニ申タリ」と訴えられるのも同様である。釜掘り山を見物していた人が、郭巨が子を埋めようとしたことを、蒔絵師夫婦が子を押付け合った行為として非難したのと、同じ構図である。この泰盛と頼綱の行為は、貞時の執権を不要として、それに取って代わろうとするもので、そのことを訴えられた貞時が、Ciii(1)霜月騒動、Ciii(2)平禅門の乱で、それぞれ安達泰盛とその一族、平頼綱の父子を誅殺することになるのである。

おわりに

本章は、AからCの素材を踏まえて、逆転の趣向を繰り返し用いながら、第二層の本話「郭巨の息子の成長物語」を創作するものであった。さらに第三層の重層世界として、北条貞時の逸話を重ねていた。

章題「取りやりなしに天下徳政」の「取りやりなし」は、金銭のやりとりなしに、金銭の貸借関係を白紙にして、と解釈されている。しかし「取りやり」と「やりとり」は同一ではなく、語句が逆転している。相対済し令に関連させれば、「やりとりなし」は「やることなし」で金銭を手放さない、支払わないということになり、返さない方に重点がある。それに対して「取りやりなし」は、「取ることなし」で、手に入れない、請求しない、相手に押し付ける方に重点があるように感じられる。第二層本話の蒔絵師夫婦の子を押し付け合う行為を嵌め込み、第三層の貞時を排除しようとする泰盛や頼綱の行為を重ねたのである。本話冒頭文の「おのづと道を背き、人の心虚になつて実を失ひ」は、「取りやりなし」を受けて、蒔絵師夫婦や泰盛や頼綱の、そのような邪なあり方を匂わす表現であろう。ただし、本話の奉行が子を15歳まで仲人に預けさせたことを、「取りやりなし」と考えることもできそうである。しかし奉行は「黄覇叱奴」

の黄覇にあたり、話の展開には大切な働きをするが、「天下徳政」を行ったとするには不十分である。子を仲人に預けることを「取りやりなし」とすることには、いささか無理がある。

目録副題「武士は善悪の二道を知る事」の「善悪の二道」とは、具体的には何だろうか。またそれを「知る」のは誰なのか。善の道を行ったのは、「黄覇叱奴」の弟嫁と郭巨夫婦、蒔絵師の息子、北条貞時であり、愛のある道であった。それに対して悪の道を行ったのは、「黄覇叱奴」の兄嫁、蒔絵師夫婦、安達泰盛と平頼綱ということになり、愛のない道であった。その上で、その「善悪二道」を知って正しく行動したのは、蒔絵師の息子であり、徳政を施したのは第9代執権北条貞時ということになる。

巻3の各章は、鎌倉幕府の執権たちの逸話を通して、執権たちの天下の仕置者としての知略のあり方を取り上げるものであった。巻3は鎌倉幕府の執権たちの逸話を類聚しているわけだが、西鶴はその北条の執権たちを批判することはない。というよりも、天下の仕置者として優れていることを讃美するような視線が感じられる。西鶴にとって鎌倉幕府はどのような存在であったのだろうか。おそらく鎌倉時代を題材にした『吾妻鏡』『保暦間記』や謡曲などによって、過去の美しき良き時代としてのイメージがあったのではないだろうか。そのようなことを感じさせる、巻3の「武将逸話列伝」である。

注

- 1) 羽生紀子「『新可笑記』の重層性—巻頭章と草薙の剣盗難事件—」（『日本語日本文学論叢』第14号、2019年3月）ほか14編の論考において、巻1から巻3の4について論じた。ご参照願いたい。
- 2) 羽生紀子「『新可笑記』巻三の四「中にふらりと俄年寄」の検討—鎌倉幕府第八代執権北条時宗と元寇・二月騒動—」（『武庫川女子大学紀要』第69巻、2022年3月）
- 3) 以下『新可笑記』本文は、『井原西鶴集④』（広嶋進校注・訳「新編日本古典文学全集」小学館、2000年）による。
- 4) 広嶋進「『新可笑記』の「道理」と政道批判—『可笑記』『太平記』との関わり」（『西鶴新解』ペリかん社、2009年。初出・『江戸文学』第23号、2001年6月）
- 5) 大石慎三郎「『相対済し令』の成立と展開—その1—」（『学習院大学経済論集』第7巻第2号、1971年3月）
- 6) 石井良助「目安紇、相対済令および仲間事—近世債権権法と民事訴訟法の接点—」（『裁判と法』有斐閣、1967年）
- 7) 「新編日本古典文学全集」562頁頭注。
- 8) 仲沙織「偽物の「郭巨」物語—『新可笑記』巻三の五「取りやりなしに天下徳政」考—」（『上方文藝研究』第13号、2016年6月）
- 9) 『棠陰比事』は、『棠陰比事』の翻訳本である『棠陰比事物語』（朝倉治彦編校「未刊仮名草子集と研究(二)」未刊国文資料刊行会、1966年）による。ただし表記等は適宜改めた。
- 10) 『醒睡笑』は『醒睡笑 静嘉堂文庫蔵 本文篇』（岩淵匡他編「笠間叢書」132、1982年）による。ただし表記等は適宜改めた。
- 11) 『二十四孝』は天和2年刊本による（国立国会図書館蔵）。ただし表記等は適宜改めた。
- 12) 仲氏前掲論文（注8）
- 13) 当該文書は発令された3月のものではなく7月22日付で、南方宗宣、北方宗方宛である。「関東事書案」は京都府立京都学・歴彩館 Web『東寺百合文書』（京函/48/2）による。
- 14) 羽生紀子「『新可笑記』巻三の二「国の掟は知恵の海山」の検討—鎌倉幕府第三代執権北条泰時と「御成敗式目」制定—」（『武庫川国文』第91号、2021年11月）
- 15) 本郷和人「霜月騒動再考」（『史学雑誌』第112編第12号、2003年12月）
- 16) 「追加法」530（笠松宏至校注『中世政治社会思想』上「日本思想大系」岩波書店、1972年）による。
- 17) 『保暦間記』は「群書類従」第26輯雑部（続群書類従完成会、1932年）による。

受理日 2022年12月5日

小学生新聞の投書特集における結束性

設 樂 馨
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

The cohesion of the special feature on letters to the editor in Newspaper for Children

Kaoru SHITARA

*Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University*

Abstract

How can one describe the cohesion among special features in letters to the editor in newspapers for children? Those texts are from different authors and therefore cannot provide consistent themes. Hence, these were verified by systemic functional linguistics. The analysis from the viewpoint of cohesion, even from both sides of fictitious textuality and cohesive elements, revealed that each is fragmented and is a “Yudai-kun’s letter,” which is the point at which the special features start. Instead, of speaking “together,” everyone simply spoke about their own subject matter. However, the suggestion feature showed a repetition of subject matter and stylization of structure. This structure foreshadowed a cohesiveness of writing that converged on the reader. The editorial team made disparate sentences appear as if they were one coherent sentence. Furthermore, as the days went by, opinions deepened. Consequently, readers ended up “discussing” them all together throughout the paper.

1. はじめに

2011 年「毎日小学生新聞」に投書による特集記事が掲載され、書籍化し、話題になったことがある。一連の特集タイトルは『ゆうだい君の手紙』（ゆうだい君の手紙そのものを区別するため、特集に『』を付す）、副題は「東電と原発 キミはどう思う？」であった。また、書籍化したもののタイトルは、手紙冒頭を引用して『僕のお父さんは東電の社員です』¹⁾であった。投書群の文体的な特徴や各々の投書の主張については拙稿²⁾で論じた。この投書群の締めくくりの言葉として、新聞編集部は次のように述べる。

「ゆうだい君の手紙」を読んだみなさんがたくさんの手紙を送ってくれたため、ゆうだい君が望んでいた「みんなで話し合う」ことが紙面を通してできました。(第 26109 号)

しかし、投書の書き手は何を読んで意見を書き、その投書とその後の投書は、本当に互いの主張を踏まえて「話し合う」ということができたのだろうか。「話し合う」というのは、一つの談話としてまとまりを持つと考えられる。とすると、後述する選択系機能言語学(SFL)の立場から言えば、投書群がひとまとまりの「テキスト」である、と考えられる。果たして、書き手の異なる文章を束ねただけで「話し合う」ことになったのか、本稿では、選択体系機能言語学(Systemic Functional Linguistics=SFL)に従って分析し、架空のテキスト性を生成する「新聞」という一つの文章構造のパターンについて考察する。

2. 選択体系機能言語学(SFL)について

談話研究の一つとして、Halliday の SFL は、機能主義(functionalism)の立場から言語使用におけるコンテキスト(状況、context)を理論化することを目指したものである。その結果、談話を3通りの視点から分析するメタ機能(metafunction)という概念が提起された。この概念に従うと、本稿の投書は次のように整理される³⁾。

活動領域(field)：何について話しているかという話題、あるいは目的

紙面で東電の原発事故責任について意見を述べる。(各々の投書の話題や目的は拙稿²⁾を参照されたい。)

役割関係(tenor)：会話に関わる人たちの関係

「毎日小学生新聞」の読者と編集部。

伝達様式(mode)：どのようなやり方で伝えるのか

投書による特集記事。大きな見出し、リード文、投書ごとの小さな見出しの元に意見文を配置。日刊新聞として読者あるいは小学校へ配布される。

これら3つの要素によって、言語使用域(register)と呼ばれる状況のコンテキスト(context of situation)、つまり、投書による特集が具現する。仮に、活動領域(話題や目的)が同様でも、教室で討論するとなれば、役割関係や伝達様式が変わる。しかし、ここで特に問題とするのは、書き手の異なる、投書の特集記事であること、つまり、SFLにおける伝達様式(mode)である。この伝達様式とは、「表現形式の選択に関わる」ものであり、伝達様式が表れるテキスト形成的機能(textual metafunction)とは次のように説明される⁴⁾。

私たちが自分の経験などを人に話すとき、どこから始めればよいか、どのように話を続ければよいか、どこで盛り上げてどこにオチを持ってくるかなど、いろいろ考えて話を進めますが、そこで働いているのがこのテキスト形成的機能なのです。

このテキスト形成的機能は、結束性(cohesion)として観察できる。結束性(cohesion)は、ハリデイ・ハサン(1997)の定義では、テキスト内に存在し、テキストをテキストとして定義する意味の諸関係である。意味の諸関係とは、典型的には先行文(普通は直前に先行する文)と逆行照応なつながりを有する句や節の諸関係で、テキストに観察される⁵⁾。また、意味の諸関係ということは、文法的構造によって具現されるものではない。M.A.K. ハリデー (2001)より例を引くと次の通り。「例えば、John と he のように1つの語彙項目がテキストにおいて互いに異なる2つの形で生じた場合、その間に構造的な関係はない。それらはいかなる構造パターンによっても結び付けられていないのである。」⁶⁾

では、新聞というテキストにおいて、先行するとか、逆行するといったことは、どのように捉えるのが妥当だろう。通常、縦書きの紙面構成(文字の大きさや配置)では、右上から左下が読むべき順序になるが、見出しの文字の大きさや配置は、この順序を変えてしまう可能性がある。小学生新聞ではない、一般紙の新聞報道記事のジャンル構造を分析した鷲嶽(2009)は、見出し(Headline)を3つに細分すること、White (1997)⁷⁾を援用した核(見出しやリード文)と衛星(本文)の関係などにより、通常のテキスト性とは異なる、日本語の新聞ならではの特徴をいくつも指摘している⁸⁾。本稿ではハリデイ・ハサン(1997)が指摘する「架空のテキスト性」から順に検討しよう。

3. 分析

(1) 架空のテキスト性

架空のテキスト性とは、「読み手や聞き手に予想を設定することによって、架空のテキスト性を押しつけるタイプの結束性」である。「しかし、その予想は、過去にかかわるものなので、どうしても満たされることはない」とし、新聞の特徴として「多くのニュース報道では、それを理解するには、前日の新聞は同じテキストの一部であるという想定が必要である」としている⁹⁾。

架空のテキスト性は、ニュース報道でない、投書特集のテキストにも観察されるだろうか。新聞というジャンルにおいて、最初に読むものは見出しであり、この見出しに関して鷺嶽(2009)では、通常の見出し(Headline:以降 HL)と下位の見出し(Sub-Headline:以降 SHL)と先立つ見出し(Pre-Headline:以降 PHL)に細分した。試みに、本調査対象の特集初日の見出しも細分して、分析してみよう。

(見出し1・HL)批判されても プロとしての力発揮を(第26088号1面)

(見出し2・PHL)全国の読者からの反響(第26088号1面)

(見出し3・SHL)大変なのは東電だけじゃない(第26088号1面)

(見出し4・HL)東電だけが悪いんじゃない(第26088号1面)

(見出し5・HL)まずは、謝るべきだ(第26088号1面)

(見出し6・HL)電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL)電気にたよらない生活を(第26088号2面)

1面は見出し1が、2面は見出し6が通常の見出し(HL)となる。最も分量の多い投書の見出しであり、いわば、記事の核と考えられる。ただし、意味的に見出し1は見出し3と同じ投書Aに、見出し6は見出し7と同じ投書Bを要約する。つまり、当該のAとBの投書には2つずつ、見出しが存在する。そこで、HLより小さい見出し3や見出し7は下位の見出し(SHL)と位置付けられる。

ここでSHLとHLの検討はひとまず後に回し、HLの見出しの次に目立つ配色、配置となっている、先立つ見出し(PHL)として、見出し2に注目しよう。これはリード文(後述のリード1で見る通り、投書特集の経緯)に付いた見出しであり、鷺嶽(2009)によれば、「PHLは典型的には当該記事が読者にとって既知の情報(あるいは既知であるという前提の情報)の追加情報であることを示す」に当てはまる。

リード1に先行する見出し2の「反響」は、リード1に含まれる、過去のううだい君の意見に対する反応を指す。よって、過去を設定して読者に予想させる、架空のテキスト性を有する。

2面は、1面のようなリード文がないが、特集の表題『ううだい君の手紙』の元に「＝1面からつづく」とあり、前ページから読む想定が設定される。前ページが過去の新聞の設定をしていたので、引き続き2面も「架空のテキスト性」が保持されることになる。

これらのリード文や見出しは、特集初日となる5月30日(第26088号)1日分の1面と2面である。同様に、他日の特集にも1面リード文に過去の設定、2面の付言に「＝1面からつづく」という定型が認められ、架空のテキスト性が認められた。1面のリード文を抜粋し、過去の設定に下線を引く。(「＝1面からつづく」は各日とも同一であるため、引用しない。)

(リード1) 5月18日の毎小で、東京電力につとめる父親を持つううだい君(東京都・小6)の手紙を紹介しました。(第26088号1面)

(リード2) 昨日に引き続き、毎小編集部に届いたううだい君(東京都・小6)の手紙を読んだ全国の読者の意見を紹介します。(第26089号1面)

(リード3) 5月18日の毎小で紹介したううだい君(東京都・小6)の手紙を読んだ全国の読者が、さまざまな意見を編集部に寄せてくれています。(第26090号1面)

(リード4) 5月18日の毎小で、父親が東京電力(東電)に勤めるゆうだい君(東京都・小6)の手紙を紹介し、全国の読者からたくさんの意見が編集部に届きました。(第26108号1面)

(リード5) ゆうだい君(東京都・小6)の手紙をクラス全員で読み、学級で意見をまとめてくれた学校もあります。(第26109号1面)

(リード6) 父親が東京電力に勤めるゆうだい君(東京都・小6)の手紙(5月掲載)を読み、福島県郡山市立赤木小4年2組のみんなが意見を送ってくれました。(第26144号1面)

リード3は、月初めとなる6月1日で、リード4は中盤の特集、リード6は特集最後の掲載である。この3つのリード文は、昨日と連続した特集記事ではないため、読者が連続する日刊紙として読まない場合も想定される。そのためか、日付や経緯が述べられ、ほかのリード文よりも丁寧に、過去の新聞と同じテキストである想定を解説する。

反して、上中下と連続するうちの「中」に相当するリード2は説明が粗雑である。日付も具体的な数字で示すのではなく「昨日」という、今日を基準に読者が減算して日付を特定する単語である。また、特集の中盤で、前日に続いて発行されたリード5は、日付に類する語句がなく「ゆうだい君(東京都・小6)の手紙」という句が、読者に過去の新聞と同じテキストの一部であるという、架空のテキスト性を押し付ける。

架空のテキスト性は、各日、あるいはそれぞれの投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性であることが確認できた。この関係を図1にまとめておく。5月30日と5月31日の投書、あるいは、6月1日と6月20日の特集記事に結束性はない。常に、5月18日の「ゆうだい君の手紙」と、各々の投書との結束性である。

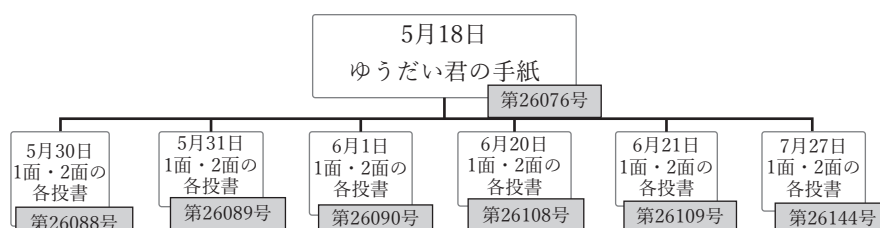


図1 見出しによる架空のテキスト性から示された結束の諸関係

(2) 逆行照応なつながり

前節でみた架空のテキスト性は、新聞ならではの見出しやリード文における事情であり、ハリデイ・ハサン(1997)では、読者に押し付けられたテキスト性であって「偽りの(または未決定の)結束性」とされる¹⁰⁾。いわば、結束性として特異なものである。典型的には、先行文と逆行照応なつながりを有する句や節の諸関係が存在するのであり、その諸関係は結束的要素を観察することで分析できる。

結束的要素とは、英語では指示(人称詞、指示詞、比較語)、代用(one、the same、do、節)、省略、接続である。本稿は日本語のテキストであるので、英語と同じ分析ができるわけではないが、結束的要素となりそうな語句の意味を観察してみよう。まずは、人称詞である。(検討する語句に下線を引く。)

(投書C) 君がお父さんの仕事をかばう気持ちはわかります。でも、君の意見の進め方には少し無理があると思いました。(第26088号)

この投書の書き手は「3児の母 K・Nさん」で、小学6年生のゆうだい君と世代が異なる。文頭で「ゆうだい君」を「君」と呼称し、子どもと話し合う大人の発話者としての役割(発話役割 SPEECH ROLES)を区別し、「ゆうだい君」に受信者(ADDRESSEE)の役割を当てる。2文目も同じく「君」を用いる。

次に指示詞の例を挙げる。投書D「そんなこと」とは、「ゆうだい君」の意見「みんなで話し合うこと」

を指す。

(投書 D) ゆうだい君の言いたいことは、ものすごく伝わる。しかし、今はそんなことを言わないで、日本全体が力を合わせて、なしとげるべきではないか。(第 26090 号)

投書 C と D は、架空のテキスト性により確認した結束の諸関係と同じく、ある書き手による投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性を示すことが分かった。

ほかに、書き手の異なる投書どうしに結束性はあるだろうか。といっても、特集記事が掲載された初回の 5 月 30 日から 6 月 1 日は、特集開始前に送られた投書が掲載されたものであり、特集を読んで書かれた投書とは考えられない。また、6 月 21 日と最後の 7 月 27 日は、リード文に、小学校のクラスで「ゆうだい君の手紙」を読んで送った意見だと書かれている。こうした掲載日とリード文から判断すると、「ゆうだい君の手紙」そのものだけでなく、特集『ゆうだい君の手紙』を読んでから投書を送ったと推定されるものは、6 月 20 日(計 6 本)に絞られる。その 6 本より、人称詞「みなさん」を取り上げる。

(投書 E) 私の友達にお父さんが、東電で働いている子がいます。その子は今、いじめられています。(中略) どうして、何も悪くない彼女がいじめられるのでしょうか。それは、新聞やテレビでたくさんの偉い人たちが、東電を批判しているからです。そして、みんながそれを信じてしまうからです。(中略) 東電を批判しているみなさんは、この先こういう生活(筆者注・すべての原発がなくなり電力不足が起こり不便になった生活)でよいのですか。(第 26108 号)

投書 E の書き手は、東電で働く父を持つ子に対するいじめが、「東電を批判している」報道を背景とし、その報道を信じる波線部「みんな」に原因がある、と考えている。この「みんな」は、恐らく、いじめる側の級友たちを指し、投書間の逆行照応なつながりとは無関係であろう。報道を信じて東電を悪とする級友が、東電で働く父を持つ友達をも悪とみなし、いじめが発生する。そう考えて、「たくさんの偉い人たちが」「みなさん」に信じさせた原子力発電の全廃は、それによって電力不足を招き不便な生活を強いる事実を訴え、それを是とするのか、と「みなさん」に抗議する。

この「みなさん」に投書 E 以前の投書との結束性を見いだせるのか。6 月 20 日以前の、東京電力への批判は、下記の見出しに代表させる通り複数の投書が存在する。上から順に、被害者対応(見出し 5 と見出し 8)、辞任ではない問題解決(見出し 9)、安全よりもうけを取って危険な原子力発電を続けたことへの非難(見出し 10)であり、原子力発電を全廃しない東京電力を批判するわけではない。つまり、投書 E が抗議する「みなさん」と、それ以前の投書との結束性を明言することは困難である。

(見出し 5) まずは、謝るべきだ(第 26088 号)

(見出し 8) 被災者の気持ちを(第 26089 号)

(見出し 9) 東電や政府は逃げずに問題解決を(第 26090 号)

(見出し 10) 東電はもうけを重視した(第 26090 号)

以上のとおり、結束的要素から逆行照応なつながりを観察しても、それぞれの投書と「ゆうだい君の手紙」との結束性であることしか認められなかった。この関係を図 2 にまとめておく。5 月 30 日 1 面の 3 本の投書は、各々が 5 月 18 日の「ゆうだい君の手紙」との結束性しか認められない。投書特集を読んだ後に投書を書いた可能性のある、6 月 20 日 1 面の投書も 3 本とも、各々が 5 月 18 日の「ゆうだい君の手紙」との結束性しか認められない。

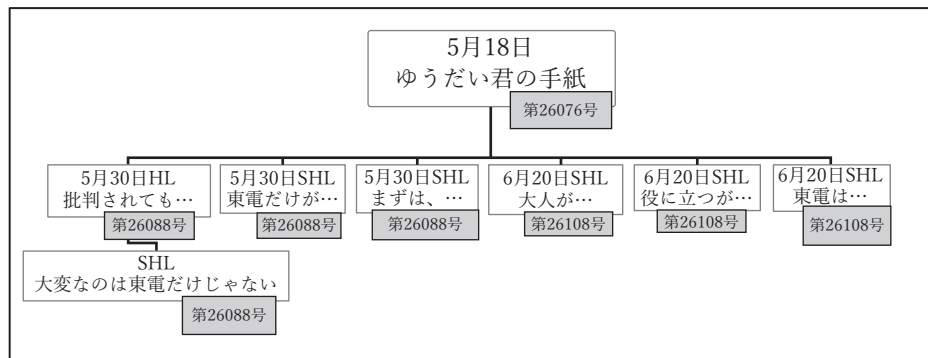


図2 逆行照応なつながりから示された結束の諸関係

(3) 節複合関係

鷲嶽(2009)によれば「SHL と HL は節複合関係における拡充の概念を適応させることができる。すなわち、概略、SHL は HL の内容を詳しく述べたり(敷衍)、HL に情報を追加したり(拡張)、HL を時系列や因果関係などで修飾したり(増強)することにより拡充する」とある。ここで、後回しにした SHL と HL に注目しよう。実は投書特集では、鷲嶽(2009)の分析した一般紙の時事情報と大きな違いがある。

そもそも、時事情報は見出しの元に記事がある、という考え方である。鷲嶽(2009)では、「必須の」要素となる HL に対し、「任意の」見出しの PHL と SHL は相対的に小さいものとされる(「」は筆者が付す)。よって、大きさに「大」となる見出し6を HL とすれば、相対的に「小」となる見出し7の SHL が、意味的にはより拡充されていなければならない。しかし、見出し7がかえって省略され、拡充されているとはいえないのだ(下記、再掲)。

(見出し6・HL) 電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL) 電気にたよらない生活を(第26088号2面)

では、ここまでの分析は、HL と PHL や SHL の区分を誤ったのだろうか。意味による見出しの上位・下位を見直すならば、文字の大小によって上位・下位を細分してみてもどうか。再度、見出しを細分し直して、節複合関係が認められるのか、確認したい。HL を最大の見出しで必須の要素とし、それより小さい文字で、同じサイズを全て、下位の見出し(SHL)として一括すれば次のようになる。

(見出し1・HL) 批判されても プロとしての力発揮を(第26088号1面)

(見出し2・PHL) 全国の読者からの反響(第26088号1面)

(見出し3・SHL) 大変なのは東電だけじゃない(第26088号1面)

(見出し4・SHL) 東電だけが悪いんじゃない(第26088号1面)

(見出し5・SHL) まずは、謝るべきだ(第26088号1面)

(見出し6・HL) 電気にたよらない生活を心がけてみる(第26088号2面)

(見出し7・SHL) 電気にたよらない生活を(第26088号2面)

これでは、見出し1が3本の投書(見出し3、4、5を冠した投書)を統合する内容でなければならない。しかし、意味的には1面に1本のみ、HL と SHL の見出しが付いていて、どちらの見出しも1本の投書にのみ、付いている。こうした違いは、投書の特集記事である本調査対象に特異な事情であろう。投書特集は、見出しの元に書かれる、とは考えにくい。投書がそのまま掲載されない(編集部による修正が施される)とはいえ、最初に投書者による意見があり、その意見から見出しが生成されると考えられるからだ。よって、SHL と HL は節複合関係における拡充の概念を適応することができないし、White (1997)

の核(the Hedline / lead nucleus)や衛星(satellites)の考え方を当てはめることもできない。

表 1

テキスト	紙面構成	節複合関係
批判されても プロとしての力発揮を	HL	主題
大変なのは東電だけじゃない	SHL	理由
僕の父は国家公務員です。東電だけでなく、仙台空港、福島空港などの航空局、海上保安庁などで働く国家公務員も命がけで職務を全うしているのです。父は自分の仕事に誇りを持っています。	投書	※主題展開の事例
ゆうだい君のお父さんもそうでしょう。少しくらいマスコミや評論家に批判されても(その人たちの仕事はそういうものです)、自信をもって、持てる力を発揮してほしいです。	投書	※主題の展開
大変なのは東電の人ばかりではないのです。	投書	※理由の展開

表 1 に、見出し 1 と見出し 3 と投書 F の節複合関係を分析した(※印をつけたものは、節複合関係とは言えないが、見出しと投書の関係について、意味的に説明したもの)。表 1 より、HL は投書の一部から任意の要素を抜き出し、SHL も投書の一部から任意の要素を抜き出していることが分かる。投書を読むと、HL と SHL が、主張とその理由の関係にあることも見て取れる。

では、こういった主張と理由のような、HL と SHL の関係性は、常に生成されるのか。また、HL はどのように「必須の」要素として付されるのか。別日で HL と SHL の関係を確認してみる。1 本の投書に見出しが 2 つ付く、5 月 31 日(第 26089 号)を例示する。

表 2

テキスト	紙面構成	節複合関係
具体例をあげて反対・賛成を	HL	主題 1
日本人がまとまるチャンス	SHL	主題 2
個人的な意見を言うと、「原発はやめるべきだ」という意見は、原発をひていしているだけで、これからどうやって電気をつくるのかなど、もし原発をすべて止めたときの具体的な方法などありません。私は、それがなっとくいかないのです。	投書	※主題 1 展開の理由
政治でも(中略)「〇〇を中止にしたあとに、□□を代わりに使ったほうがよい」、こちらのほうが「うーん」となりませんか? 「なるほど!」と思いませんか? 私は具体的な例をあげたうえで反対・賛成をしてもらいたいです。	投書	※主題 1 の展開
今、日本は最大の危機におちいっています。私はプラスに考えました。今は、日本人同しが、世界がつながる、まとまるチャンスです!	投書	※主題 2 の展開

表 2 に示すとおり、HL と SHL は異なる主題であり、関係性を認めることは難しい。ただし、表 1 と表 2 の節複合関係に※を付して意味的に説明したとおり、HL のほうが事例(表 1)や理由(表 2)があって詳しいことは、SHL より重要であると考えて差し支えないだろう。加えて、本項(3)では最大の文字を HL と仮定したため、新聞一面で、読み手に訴求すると選別された投書の中でも、第一に重要な主題が「必須の」見出しに選定されるものと考えられる。

4. 考察

投書特集は、内容から見ると多人数の意見が集合し、互いの意見をぶつけ合っているかのように見える。しかし、結束性からみると架空のテキスト性と結束的要素、両面から分析しても、一本ずつが分断

されていて、首尾一貫性(coherence)があるとは言えない。ただし、一本ずつ、それぞれが「ゆうだい君の手紙」という、特集の起点となる意見文との結束性を持つ。

各投書には、編集部による見出しや、各日のリード文が付く。このうち、見出しの検討に際して、報道記事と比べて投書特集は、見出しと記事のどちらが先行するかによって、大きな違いがあった。報道記事は、見出しの元に記事があり、節複合関係における拡充の概念を適応できるが、投書特集では、SHL と HL がともに主題を有し、任意の意見を切り取っていることがある。よって、節複合関係における拡充の概念を適応させることができるとは限らない。

では、投書特集というテキストに首尾一貫性(coherence)がないにも関わらず、何をもって投書特集というまとまりを生成しているのか。一つは、架空のテキスト性を生成する見出しやリード文であった。新聞が有する構造的な特性が、それぞれ分断したテキストを一か所に集約することで、首尾一貫性らしきものを生成する。

構造的な特性としてもう一つ、パタン化したものが存在した。それは、1面においてリード文とPHL、2面では定型句「＝1面からつづく」であり、各日の投書特集において、定位置に定型のテキストを配置している。この定型にした文章構造により、投書特集という集合体を形成し、各々のテキストに意味的な結束性がなくとも、構造的な結束性を架空に見せかけることとなる。

5. 結束性が生み出す、談話としての意味

投書とは、書き手の意見を主張する文章である。それに付される見出し HL あるいは SHL は、投書の一部の語句であった。本論の投書は、特集として複数、存在した。それぞれの投書の書き手は別人であり、主張は異なる。その主張は、直前の投書を踏まえたものではないため、投書同士、互いに意味的な結束性は認められない。ただ、「何について話しているか」あるいは「現在伝えたいのはこれである」という要素が「ゆうだい君の手紙」に端を発している、つまり、全ての投書において意見の起点(SFLの用語ではテキスト形成的主题)が「ゆうだい君の手紙」である、という構造的な一貫性があった。また、定型化した新聞という文章構造において、『ゆうだい君の手紙』という投書特集を形成し、架空のテキスト性は度々繰り返されていた。

このように、同一のテキスト形成的主题の投書を、定型化した紙面によって他日に及んで反復して読むことは、テキスト形成的主题である「ゆうだい君の手紙」が、多くの小学生新聞読者に拡散した、ということであり、みんな「で」話し合うのではなく、みんな「が」話したに過ぎない。ところが、テキスト形成的主题の反復と構造の定型化は、本来、ひとまとまりの文章に備わるはずの意味的な結束性が欠落していても、構造的に収斂していくようなテキスト性を生み出し、読者に首尾一貫性を予見させる。あたかも、日を追うごとに意見が深まっているようだ。そして、編集部は紙面を通して読者同士、「みんなで話し合う」ことができた、と述べてオチをつける。各投書を束ねる編集部は、投書特集という構造的なパタンを生じさせることで、意味関係に基づかない文章構造から、談話としての新たな意味を具現させたのだ。

本稿は SFL を用いることで、談話のメタ機能として伝達様式の一つ、新聞の特徴と、その構造的な結束性から生じる談話の意味を確かめた。小学生新聞では、刊行の方法やレイアウトなどにおいて、長く踏襲されたことによる定型の構造や定型の句が存在する。先行研究にある一般紙の時事報道と異なり、小学生新聞の投書特集を対象にした本研究においても、架空のテキスト性、加えて、パタン化した定型句の繰り返しが、この構造的な結束性から「みんなで話し合う」のように、個々の投書に存在しない、談話としての意味が具現するのだ。

資料

毎日小学生新聞 第26076号、第26088号、第26089号、第26090号、第26108号、第26109号、第

26144 号(いずれも 2011)より。引用では掲載時の振り仮名を省く。

引用文献

- 1) 森達也. 僕のお父さんは東電の社員です. 現代書館, 2011.
- 2) 設楽馨. 3.11 原発事故をめぐる小学生新聞の投書. 武庫川女子大学紀要. 2019, 第 67 巻, pp.11-20.
- 3) 龍城正明. ことばは生きている 選択体系機能言語学序説. くろしお出版, 2006, pp.14-15.
- 4) 龍城正明. ことばは生きている 選択体系機能言語学序説. くろしお出版, 2006, p.16.
- 5) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか一言語の結束性一. ひつじ書房, 1997, p.5 および p.385.
- 6) M.A.K. ハリデー, 山口登・笈壽雄訳. 機能文法概説—ハリデー理論への誘い—. くろしお出版, 2001, p.532
- 7) White, P.R.P. “News as history: Your daily gossip”. In Martin, J. R. & Ruth Wodak (eds.), *Re/reading the past: Critical and functional perspectives on time and value*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 2003, pp.61-90.
- 8) 鷲嶽正道. 日本語の新聞報道記事のジャンル構造. 機能言語学研究. 2009, No.5, pp.33-45.
- 9) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか一言語の結束性一. ひつじ書房, 1997, pp.390-391.
- 10) M.A.K. ハリデイ・ルカイヤ ハサン, 安藤貞雄ほか訳. テクストはどのように構成されるか一言語の結束性一. ひつじ書房, 1997, p.391.

受理日 2022 年 12 月 5 日

高校生における対人ストレスに及ぼすソーシャルサポートの検討 —対人ストレスコーピングを介して—

玉木健弘¹・堺日菜乃²

(武庫川女子大学 文学部 心理・社会福祉学科¹・ライズプランニング²)

Effects of Social Support on Interpersonal Stress in High School Students —Through Interpersonal Stress Coping—

Takehiro TAMAKI¹ and Hinano SAKAI²

*Department of Psychology and Social Welfare, School of Teachers
Mukogawa Women's University¹・Rise Planning Inc.²*

Abstract

This study was conducted with high school students to determine the effects of social support on interpersonal stress. First, an analysis of variance was performed to examine differences by grade and gender. In interpersonal stress coping, main effects of grade and gender were found in positive relationship coping. An interaction effect between grade and gender was also found. Since a main effect of grade was observed, multiple comparison was conducted, and significant differences between first and second graders were found. Since an interaction effect was also observed, a simple main effect test was conducted, and differences were found between first and second grade boys and between first grade boys and girls. Next, stress levels were categorized into high and low groups, and the differences in cognitive evaluation and interpersonal stress coping in each group were examined. The results showed significant differences in coping efficacy and threat. A path analysis was also conducted. The analysis revealed that there were differences in interpersonal stress coping in the high and low stress groups. In addition, the analysis of differences in social support in the high and low stress groups indicated that there were differences between the groups.

問 題

中学生や高校生は、入試や就職など人生の選択を迫られることが多い時期である。特に高校生は進学か就職の選択、進学する場合は進学先について悩むことが多い。また、学校生活でも様々なことで悩むことが考えられる。石隈は、高校生の悩みを学習面、心理・社会面、進路面で問題を持っていることを明らかにした¹⁾。さらに、学校生活に適応できないと欠席日数が増え、場合によっては不登校になる可能性もある。

文部科学省の調査によると、高校生の不登校要因として最も多いのは本人に係る状況で、次に学校に係る状況であった²⁾。学校生活に関連が深い学校に係る状況について見てみると、いじめを除く友人関係をめぐる問題、入学・転編入学・進級時の不適応、学業の不振、進路に係る不安、の順であった²⁾。このように、不登校になる理由として対人関係が関連していることから、対人関係で問題が生じると学校生活に悪影響を及ぼすことが考えられる。さらに、学校生活に関連する要因である学業不振や進路についての悩みも多いことから、高校生の多くが対人関係および学校生活での悩みがストレスになっていると思われる。

学校生活では、様々なストレスを感じる可能性が高い。このストレスを感じた時にすぐに身体症状等が生じるわけではない。人はストレスを感じた出来事に対して、認知的評価を行い、対処可能と評価されたときコーピングが選択され、コーピングが上手く行かないときに心理ストレス反応が見られる。このコーピング研究は、これまで Lazarus らが数多く研究している³⁾⁴⁾。その中で、加藤は、対人ストレスに対する認知的評価として、3 因子あることを明らかにした⁵⁾。この3 因子とは、コーピングに対する自己効力感である対処効力感因子、イベントの遭遇による予測された害・喪失に関連する評価として脅威因子、自分にとって重要だと評価する重要性因子である。

また、加藤は、対人ストレスコーピングについても研究し、ポジティブ関係コーピング、解決先送りコーピング、ネガティブ関係コーピングの3 因子を明らかにした⁶⁾。ポジティブ関係コーピングは人間関係で生じたストレスフルなイベントに対して、積極的にその関係を改善し、より良い関係を築こうと努力する因子である。また、ネガティブ関係コーピングは、「無視をする」や「友達付き合いをやめる」といった、人間関係を放棄・崩壊するような行動をとる因子である。さらに、解決先送りコーピングは、ストレスフルなイベントを問題とせず、無視をするような行動をとる因子で、自然に任せるなどといった行動をとる因子である。多くの高校生は、中学の時期より対人関係が広がり、学習面でも難易度が増し、そして、人生の選択を迫られる時期である。この時期の進路選択が、今後の人生において大きな意味を持つこともある。もし選択した進路が、本人にとって満足できないものであった場合、社会との関係を絶ち、ひきこもる可能性も考えられる。蔵本の調査では、ひきこもり開始年齢の平均は18.5 歳と報告しており、高校生の時期は今後の人生を左右する可能性も高い⁷⁾。そのため、本研究では高校生を対象に研究を行うことにした。

高校生は学校生活で様々なストレスに晒されているが、このようなストレスの1 つに、避けることが難しい対人関係に起因したストレスイベント、すなわち、対人ストレスイベントがある⁸⁾。この対人ストレスイベントは学校生活をしていくうえで避けられないことである。高等学校の不登校理由としても、対人関係に関連するいじめを除く友人関係をめぐる問題が4 番目に多い事が報告されている²⁾。また、内閣府の調査でも、学校における人間関係の中で、いじめを除く友人関係をめぐる問題として、学校、家庭に係る要因が70.9%、本人に関わる要因は46.2% と高い割合をであった⁹⁾。このことから、高校生の多くが対人関係について何らかの悩みを抱えていると考えられる。

このような悩みなどのストレスを緩和する要因として、ソーシャルサポートがある¹⁰⁾。ソーシャルサポートは、ストレスに対して精神的健康を維持し、促進する要因がある¹¹⁾。片受・大貫は、情報・道具的サポートや情緒・所属的サポートよりも、評価的サポートのほうが自尊感情や援助要請スキルとの間に強い相関が見られたと報告している¹²⁾。これは、他人から自分の評価をポジティブにされると精神的健康を保つことに影響を与えていることが考えられる。このことから、ソーシャルサポートがストレスを緩和させ、精神的健康を保つ役割をしていると推測される。そのため、ソーシャルサポートは、人間のストレス緩和に重要なものだと考えられる。

また、人間関係に悩みを持っている高校生は多いが、その悩みの対処方法は人と関わる相談を手段として解決しようとする割合が最も高い¹³⁾。しかし、相談をしようと考えても相談ができない場合がある。そのため、高校生が対人ストレスに対して、どのようにコーピングを行うか、また、どのようなことで悩み、その悩みに対して、誰にサポートを受けるかを明らかにすることは、高校生のストレスを低減させることに有効であると考えられる。以上のことから、高校生が感じる対人ストレスに対して、どのように認知的評価を行いストレスコーピングするのか、そして、悩みに対して、誰からのソーシャルサポートを考えているかを明らかにすることは、学校生活で生じる様々な問題を予防するために重要なことであると思われる。また、最近感じたストレスが高い低い、つまり、ストレスレベルの違いから、認知的評価、ストレスコーピング、ソーシャルサポートについての研究はされていない。そこで本研究では、高校生における対人ストレスに対する認知的評価、およびコーピングを検討し、さらに、ストレスレベルの違いによる悩みならびにソーシャルサポートの相手を明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 調査手続きおよび調査協力者 兵庫県の高등학교の1年生から3年260名を対象に調査を実施した。調査用紙の回答に不備があったものを削除し、また、性別でその他と回答した者が2名いたが、回答人数が少ないため、今回の分析からは削除した。そのため、最終的に181名を分析調査対象とした。内訳は、男子78名、女子103名であった。各学年の人数は、1年生64名、2年生58名、3年生59名であった。本研究は、武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号2021060)。

2. 調査期間 2021年8月中旬に実施した。

3. 調査用紙の内容

(1)学年、性別について回答を求めた。

(2)ストレスレベルの測定

調査協力者に、今から過去1カ月以内の対人関係のストレスレベルについて尋ねた。対人関係については、友人や親といった対象は決めず、対象者を各自が自由に設定し、思い浮かべた人に対するストレス度合いについて「全くストレスだと感じていない(1点)」から「かなりストレスだと感じている(4点)」の4件法で回答を求めた。

(3)ストレスの認知的評価

ストレスの認知的評価は、加藤の認知的評価尺度9項目を用いて測定を行った⁵⁾。この尺度は、対処効力感因子4項目、脅威因子3項目、重要性因子2項目の3因子から構成されている。各因子の α 係数は、それぞれ、.78、.77、.70であった。(2)で質問した「ストレスレベル」で思い浮かべたストレスに対して、普段、どのように評価をしているのかについて、「あてはまらない(1点)」から「よくあてはまる(4点)」の4件法で回答を求めた。

(4)対人ストレスコーピング

対人ストレスコーピングの測定には、加藤の短縮版対人ストレスコーピング尺度15項目を使用した⁶⁾。この尺度は、ネガティブ関係コーピング因子5項目、解決先送りコーピング因子5項目、ポジティブ関係コーピング因子5項目の3因子で構成されている。回答方法は「あてはまらない(0点)」から「よくあてはまる(3点)」の4件法で回答を求めた。なお、 α 係数は、それぞれ、.88、.78、.80であった。

(5)ソーシャルサポート

ソーシャルサポートの測定は、片受・大貫を参考に「困った時」、「誰に」といった設問をし、自由記述式で回答を求めた¹²⁾。教示文として、「高校生になって困った時、周りの人に手伝ってもらって嬉しかったことや、問題を解決できたことを教えてください」として、回答を求めた。なお、自由記述の回答率をあげるため、回答例を提示した。回答例は、次の通りである。「勉強に困っている時、友人に放課後勉強を教えてもらった」、「部活で上手いかなかった時、顧問の先生にアドバイスをもらって上手くいくようになった」、「成績が良くない時に、友人に勉強に教えてもらい成績が良くなった」といった文章を提示した。

結 果

各尺度の信頼性の検討

各尺度の因子構造の信頼性を検討するために α 係数を算出した。認知的評価尺度では対処効力感因子は.88、脅威因子は.92、重要性因子は.87であった。これは加藤の調査結果、 $\alpha = .78$ (対処効力因子)、 $\alpha = .77$ (脅威因子)、 $\alpha = .70$ (重要性因子)と比較し、すべての因子において先行研究より高い信頼性が得られた⁵⁾。対人ストレスコーピング尺度のネガティブ関係コーピング因子では.81、解決先送りコーピング因子では.87、ポジティブ関係コーピング因子.86であった。加藤の先行研究結果では、ネガティブ関係コーピング因子が $\alpha = .88$ 、解決先送りコーピング因子は $\alpha = .78$ 、ポジティブ関係コーピング因

子では $\alpha = .84$ 、であった⁶⁾。これらの尺度の信頼性も本研究と先行研究とほぼ差異がないことが明らかとなった。

学年および性別における各変数の差異についての検討

ストレスの認知的評価ならびに対人ストレスコーピングにおける学年と性別の違いを検討するため、2要因分散分析を行った。その結果、ストレスの認知的評価では、重要性で学年の主効果がみられ、対処効力感で性別の主効果が認められたが、交互作用は有意ではなかった(それぞれ、($F(2, 175) = 3.05, p = 0.50, \eta^2 = .03$); ($F(1, 175) = 28.476, p = .00, \eta^2 = .14$))。重要性で学年の主効果が認められたため、多重比較(Bonferroni)を行ったところ、有意差は見られなかった。

対人ストレスコーピングでは、ポジティブ関係コーピングで学年と性別の主効果、学生と性別の交互作用が見られた(それぞれ、($F(2, 175) = 3.09, p = .04, \eta^2 = .03$; ($F(1, 175) = 5.07, p = .03, \eta^2 = .03$; ($F(2, 175) = 6.59, p = .00, \eta^2 = .07$))。ポジティブ関係コーピングで学年の主効果が認められたため、多重比較(Bonferroni)を行ったところ、1年と2年で有意差が見られた。また、学年と性別の交互作用が見られたため単純主効果の検定を行った。その結果、男子の1年生と2年生、1年生の男女で差が見られた。このことから、一部の変数で学年差および性差が認められた。しかし、すべての変数において学年ならびに性差は認められなかった。このことから、今後の分析は学年、性差を考慮せずに分析を実施することとした。なお Table 1 に、各変数の平均値と標準偏差を示している。

ストレス高低群における認知的評価および対人ストレスコーピングの差異についての検討

まず、ストレスレベルを高群と低群に分類するため、ストレスレベルについて尋ねた質問に対して4と3に回答した者をストレス高群、2と1に回答した者をストレス低群とした。ストレスレベルを分類した結果、ストレス高群が58名、ストレス低群が123名であった。次に、ストレス高低群における各変数間の違いについて検討するため、1要因分散分析を実施した。その結果、ストレスの認知的評価の対処効力感および脅威で有意差が認められた(それぞれ、($F(1, 179) = 48.56, p = .00, \eta^2 = .21$; ($F(1, 179) = 6.71, p = .01, \eta^2 = .04$))。次に対人ストレスコーピングについて分析を行った結果、全ての変数で有意差は認められなかった。なお、Table 2 には、ストレス高低群ごとの各変数の平均値と標準偏差を示している。

ストレス高低群における認知的評価が対人ストレスコーピングにおよぼす影響の検討

ストレスの高低群の差異によって、認知的評価が対人ストレスコーピングに及ぼす影響に違いがあるかを検討するため、仮説モデルを作成した。仮説モデルは、対処効力感、脅威、重要性は、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピング、ポジティブ関係コーピングにそれぞれ正の影響があると考えたモデルを作成した。ストレス高低群それぞれで分析を行った結果、ストレス高群のモデル適合度は、 $\chi^2(3) = 0.85 (p = .84)$ 、GFI=.100、AGFI=.97、RMSEA=.00 となり、ストレス低群のモデル適合度は、 $\chi^2(3) = 9.86 (p = .02)$ 、GFI=.98、AGFI=.84、RMSEA=.14 となった。この結果から各モデルで高いモデル適合度を示したことから、本モデルで分析を実施した。まず、ストレス高群では、脅威から解決先送りコーピングにのみ正の有意な影響が認められた。このことから、ストレスを脅威に感じると解決先送りコーピングをすることが明らかとなった。次にストレス低群では、対処効力感から解決先送りコーピングとポジティブ関係コーピングに正の有意な影響が認められた。このことから、ストレスを対処できると評価した場合は、問題を解決先送りし、ポジティブな関係を築こうとするコーピングを選択することが明らかとなった。Figure 1 には、有意な影響が見られた変数間のみ示している。

ソーシャルサポートに関する自由記述の検討

ソーシャルサポートについて自由記述で回答を求めた。悩みと相談者の2つが記載されている者を分析対象者としたところ、147名であった。そのため、ソーシャルサポートの分析は147名を対象に実施した。次に、悩みについては「勉強」、「友人関係」、「部活」、「自分に関すること」、「進路」、「恋愛」、「その他」の7つに分類した。そして、相談者は「友人」、「先生」、「親」、「家族」、「先輩」、「自分」、「その他」の7つに分類して分析を行った。

ストレス高低群ごとの違いを検討するため、各ストレス群で悩みと相談者について件数および割合を

Table1
学年および性別における各変数の平均値ならびに標準偏差

	1年生			2年生			3年生			合計		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子
	N=64	N=30	N=34	N=58	N=21	N=37	N=59	N=27	N=32	N=181	N=78	N=103
	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)
ストレスの認知的評価												
①対処効力感	10.44 (3.49)	12.17 (3.36)	8.91 (2.85)	9.95 (3.16)	10.87 (2.94)	9.43 (3.20)	9.86 (2.92)	11.22 (2.58)	8.72 (2.73)	10.10 (3.20)	11.49 (3.01)	9.04 (2.93)
②脅威	6.45 (2.75)	6.50 (3.01)	6.41 (2.55)	6.45 (2.85)	6.52 (2.48)	6.41 (3.07)	7.46 (2.91)	6.78 (2.64)	8.03 (3.05)	6.78 (2.86)	6.60 (2.72)	6.91 (2.97)
③重要性	4.14 (2.00)	4.53 (2.22)	3.79 (1.75)	4.93 (1.67)	5.00 (1.79)	4.89 (1.63)	4.69 (1.62)	4.96 (1.65)	4.47 (1.59)	4.57 (1.81)	4.81 (1.91)	4.40 (1.71)
対人ストレスコーピング												
④ネガティブ関係コーピング	9.52 (3.70)	8.90 (3.73)	10.06 (3.63)	9.88 (3.61)	10.00 (3.44)	9.81 (3.76)	10.32 (3.23)	10.30 (3.37)	10.34 (3.16)	9.90 (3.52)	9.68 (3.54)	10.06 (3.51)
⑤解決先送りコーピング	12.77 (4.42)	12.77 (4.58)	12.76 (4.34)	12.62 (3.78)	12.86 (3.67)	12.49 (3.89)	13.44 (3.77)	15.04 (3.54)	12.09 (3.46)	12.94 (4.01)	13.58 (4.09)	12.46 (3.89)
⑥ポジティブ関係コーピング	11.06 (4.38)	13.20 (4.55)	9.18 (3.24)	9.60 (3.41)	9.10 (3.69)	9.89 (3.26)	10.64 (3.82)	10.98 (3.98)	10.38 (3.72)	10.46 (3.93)	11.32 (4.41)	9.81 (3.41)

Table2
ストレス高低群における各変数の平均値、標準偏差および分散分析の結果

	ストレス群			F値
	全体	高群	低群	
	N=181 M(SD)	N=58 M(SD)	N=123 M(SD)	
ストレスの認知的評価				
①対処効力感	10.09 (3.20)	7.95 (2.47)	11.11 (3.00)	48.56***
②脅威	6.78 (2.87)	7.57 (2.64)	6.41 (2.90)	6.71**
③重要性	4.57 (1.81)	4.74 (1.78)	4.50 (1.82)	0.73
対人ストレスコーピング				
④ネガティブ関係コーピング	9.90 (3.52)	10.22 (3.85)	9.74 (3.36)	0.75
⑤解決先送りコーピング	12.94 (4.01)	12.28 (3.81)	13.25 (4.08)	2.36
⑥ポジティブ関係コーピング	10.46 (3.93)	9.64 (3.44)	10.85 (4.10)	3.78†

*** $p < .001$, ** $p < .01$, † $p < .10$

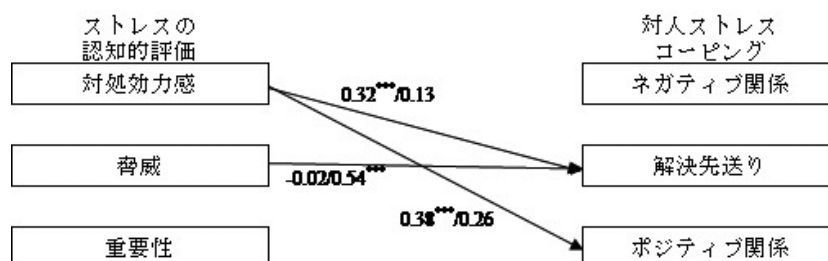


Figure 1. ストレスの認知的評価から対人ストレスコーピングへの影響

*** $p < .05$

注1) 誤差変数は省略した。

注2) 対処効力感、脅威、重要性それぞれに共分散を設定しているが、表記は省略した。

注3) 左側がストレス低群、右側がストレス高群を示す。

Table 3
ストレス高低群における悩みごとの人数

	ストレス群	
	高群	低群
	N = 41	N = 106
悩みごと		
勉強	14(34.1)	45(42.5)
友人関係	13(31.7)	15(14.2)
部活	7(17.1)	15(14.2)
自分のこと	4(9.8)	17(16.0)
進路	1(2.4)	9(8.5)
恋愛	0(0.0)	3(2.8)
その他	2(4.9)	2(1.9)

注) カッコ内の数値は各項目の%を示す。

Table 4
ストレス高低群における相談者の人数

	ストレス群	
	高群	低群
相談者		
友人	27 (65.9)	89 (84.0)
先生	10 (24.4)	10 (9.4)
親	6 (14.6)	10 (9.4)
家族	2 (4.9)	6 (5.7)
先輩	3 (7.3)	4 (3.8)
自分	0 (0.0)	3 (2.8)
その他	1 (2.4)	0 (0.0)

注1) カッコ内の数値は各項目の%を示す。
注2) 相談者は複数回答あり。
注3) 家族は親以外の親族を示す。

算出した。まず、ストレス高群の悩みについては、勉強、友人関係、部活動の順に悩みが多いことが明らかとなった。ストレス低群では、勉強、自分のこと、友人関係と部活動の順となった。このことから、各群とも勉強について悩む割合が多いことが明らかとなった。内容について見てみると、ストレス高群では、友人関係も勉強と同じくらい悩んでいることが示された。一方、ストレス低群では、自分に関することで悩むことが多いことが示された。両群とも友人関係について悩んでいることが伺えるが、割合を見ると、ストレス高群がストレス低群より高い割合をして示している。このことから、ストレス高群は、友人関係での悩みがストレス低群より多いと考えられる。また、自分に関することについては、ストレス低群で多い悩みとして示されたが、ストレス高群ではそれほど高い悩みではないことが明らかとなった。次に、ストレス高低群で悩みの数で統計的違いがあるかを検討するため、 χ^2 検定を実施した。分析の結果、友人関係において有意差が認められた($\chi^2(1) = 5.92, p < .05$)。このことから、ストレス高群が低群より友人関係で悩んでいることが件数だけでなく、統計的にも多いことが明らかとなった。

さらに、悩みを相談する相談者の違いについて検討したところ、ストレス高群では、友人、先生、親、という順で相談する割合が高いことが示された。ストレス低群では、友人、先生と親、家族の順であった。高低群とも友人に相談することが多いことが示されたが、先生と親への相談について各群で違いが見られた。ストレス高群は、ストレス低群に比べて、先生と親に相談するとの割合が高いことが示された。ストレス高群の生徒は、友人にも相談する可能性が高いが、先生や親に対しても困ったときに頼りにしたい、という思いを持っていることが明らかとなった。次に各群による相談者の数の統計的な違いを検討するため、 χ^2 検定を行った。その結果、友人($\chi^2(1) = 4.85, p < .05$)および先生($\chi^2(1) = 4.86, p < .05$)で有意差が認められた。このことから、友人に相談するのは、ストレス低群が高群より多く、先生に相談するのは、ストレス高群がストレス低群より多いことが明らかになった。以上のことから、ストレスレベルの違いによって、ソーシャルサポートに差異があることが明らかとなった。

考 察

本研究の目的は、高校生における対人ストレスに対する認知的評価、およびコーピングを検討し、さらに、ストレスレベルの違いによる認知的評価、対人ストレスコーピング、悩みならびにソーシャルサポートの相手を明らかにすることであった。

対人ストレスにおける認知的評価とコーピングを検討したところ、認知的評価では、重要性で学年の主効果が見られ、対処効力感で性別の主効果が認められた。重要性で学年の主効果が見られたため、多重比較を行ったが、有意差は認められなかった。対処効力感では、男子が女子より高いことが示され

た。このことから、男子は、対人ストレスに対して、受け身にならずストレスを改善しようと積極的に行動することが示された。長尾・松永は、男子が女子よりもストレスイベントをコントロール可能だと認知していることを明らかにしている¹⁴⁾。今回の結果も長尾・松永の結果¹⁴⁾と同様となったことから、男子は、ストレスイベントを重要だと感じ、自己効力感も感じていると考えられる。

対人ストレスコーピングでは、ポジティブ関係コーピングで学年と性別の主効果、学生と性別の交互作用が見られた。学年の主効果を検討したところ、1年生が2年生よりポジティブ関係コーピングを用いることが明らかとなった。性別では、男子が女子よりポジティブ関係コーピングを行うことが示された。交互作用も見られたことから、下位検定を行ったところ、男子で1年生が2年生よりポジティブ関係コーピングを用いることが多いことが示され、そして、1年生の男女では、男子が女子よりポジティブ関係コーピングを行うことが多いことが示された。加藤は、ポジティブ関係コーピングは友人関係の満足感を高めることを明らかにしている⁵⁾。このことから、1年生の多くが、高校で新たな友人関係を築く必要があるため、1年生は2、3年生より良好な対人関係を維持したいと思い、ポジティブ関係コーピングを用いやすいのではないと思われる。また、男子が女子より高い値を示したことから、男子は女子より人間関係を積極的に構築しようとする傾向が高い可能性が考えられる。そのため、ポジティブ関係コーピングを選択しやすいのではないかと推測される。

このように、対人ストレスに対する認知的評価と対人ストレスコーピングにおいて、学年と性別に一部ではあるが、違いが示された。しかし、今回の研究では、全ての変数で学年および性別に違いは示されなかった。これは、高校生になると多くの生徒が、これまで何らかの対人ストレスを経験し、その対応をしてきたことが影響していると考えられる。対人ストレスは、場面や内容等によって一概に同じとは言えないが、対応の仕方はある程度決まっている可能性が考えられる。そのため、学年や男女で違いがあまり見られなかったと思われる。このことから、次にストレスレベルによる違いから検討することとした。

ストレスレベルについて回答を求めたところ、ストレス高群が58名、ストレス低群が123名であった。このことから、過去1ヶ月で高い対人ストレスを感じている生徒は、調査協力者の約32%であることが示された。今回の調査は、登校している生徒に回答を求めている。文部科学省の調査で、不登校理由として、対人関係が要因として示されていた²⁾。現在、対人関係でストレスを感じている生徒は、学校生活を送ることがつらくなり、学校に登校できなくなる危険性が高いと思われる。また、不登校になると学習面でも遅れることになり、不登校生徒の気持ちの中に、進級や進路面についても不安が生じる可能性もある。このことから、対人関係でストレスを感じている生徒に対しては、早めに対応することが不登校等の予防には必要だと考える。

次にストレスレベルによる認知的評価と対人ストレスコーピングの違いについて検討した。その結果、対処効力感と脅威で有意差が認められた。対処効力感では、高群より低群で高い値を示し、脅威では、ストレス高群がストレス低群より高い値を示した。対処効力感は、コーピングに対する自己効力感⁵⁾であることから、対人ストレスをあまり感じていないストレス低群は、ストレスにうまく対応できているため、ストレス低群が高い値を示したと思われる。一方、脅威でストレス高群が高い値を示したのは、対人関係で生じるストレスに対して、自分にとって煩わしく、苦痛なことであると考えやすいためだと推測される。

また、ストレス高低群における認知的評価が対人ストレスコーピングにおよぼす影響について検討するため、パス解析を行った。その結果、ストレス高群では、対人ストレスを脅威と認知すると解決先送りコーピングを行うことが示された。ストレス低群では、対人ストレスを対処可能であると考えた対処効力感と認知すると、解決先送りコーピングおよびポジティブ関係コーピングを選択することが明らかとなった。ストレス高群の生徒は、対人ストレスを脅威に感じた場合、そのストレスを解決しようとせず、問題を先送りにする傾向が示唆された。このことから、対人ストレスを感じた場合、ストレスを高く感じている生徒は、ストレスの原因となっている事柄を解決しようとしにくい可能性が考えられる。ストレス低群では、対人ストレスを対処可能と認知すると問題を先送りする、あるいは、ポジティブな関

係を形成しようとするコーピングを用いる事が明らかとなった。

このことから、認知的評価に違いはあるが、コーピングに解決先送りコーピングを選択することがストレス高低群ともに見られた。これは、ストレスレベルにかかわらず、ストレス源に対してすぐに対応しない方がよいと考えることは、対人ストレスへの対応として共通することと考えられる。しかし、ストレス低群では、問題をそのままにせず、他者との関係を構築しようとするポジティブ関係コーピングも選択することが明らかとなった。そのため、ストレスが低い生徒は、問題となっている対人ストレスをそのままにせず、ストレスを対処しようとし、ストレス源を削除あるいは低減させようとする可能性がある。このコーピング選択の違いが、ストレスレベルが異なる要因として考えられる。

次に、ストレス高低群におけるソーシャルサポートに関する自由記述の内容について検討を行った。まず、悩みの割合について見てみると、ストレス高群では、勉強、友人関係、部活動の順に多く、ストレス低群は、勉強、自分のこと、友人関係と部活動の順となった。石隈は、中学生と高校生の悩んだ経験について調査したところ、学習面は中高生ともに悩んでいる割合が高いこと示されたが、友人関係や部活などが含まれている心理・社会面については、中学生より高校生で悩んだ経験が高いと報告している¹⁾。今回の結果から悩みについて、ストレス高低群とも勉強、友人関係、部活が含まれていることから、高校生にとってこれらのことは悩む可能性が高い事柄だと考える。このことから、ストレスの高低に関係なく、高校生は勉強などの学習面だけでなく、友人関係や部活などの悩みが多いことが明らかとなった。

一方、自分のことについての悩みは、ストレス低群にのみ多いことが示された。自分のことについての悩みは、悩みの内容については明確になっていないが、対人関係が比較的良好であるため、自分のことについて悩んでいる可能性が考えられる。しかし、自分についての悩みは、人に言えない場合もあるため、自分のことを悩みとして回答した生徒が、一概に対人関係が良好とは限らない。そのため、今後は、悩みの内容についても検討することが必要だと思われる。また、悩みの件数について χ^2 検定を実施したところ、友人関係においてストレス高群がストレス低群より、友人関係で悩んでいる可能性が高いことが示唆された。このことから、ストレスが高い生徒は、友人関係で悩むことが多く、友人関係を良好に保つことが学校生活では重要な要因であると考えられる。

また、悩んだ時の相談相手について割合を算出したところ、ストレス高群では、友人、先生、親の順になり、ストレス低群は、友人、先生と親、家族の順となった。悩みの内容とは違い、相談者の割合の順位はほぼ一致した。相談者の順位には違いが見られなかったが、回答件数に違いが見られたため、 χ^2 検定を実施した。その結果、友人を相談相手にあげた件数は、ストレス低群がストレス高群より多く、先生を相談相手にあげた件数は、ストレス高群がストレス低群より多くいることが明らかとなった。この中で、ストレス高群の生徒が、先生に相談をする件数が多いことは注目すべき点であると考えられる。相談内容によって相談者は変わる可能性は高いと思われるが、相談相手に先生を選択したストレス高群の生徒にとって、学校生活の中で先生が存在が大きいものと考えられる。ストレス高群とストレス低群の悩みでは、友人関係の悩みについてストレス高群がストレス低群より高いことが明らかになった。このことからストレス高群の生徒は、友人に相談をしたいと思っても、友人間でサポートをしあうような対等な人間関係を構築する力が不足しているため、友人に相談することは難しいと推測される。そのため、先生から生徒に声かけなどを行い、先生と生徒との関わりを増やし、生徒から先生に相談できる雰囲気を作ることが、生徒の悩みの解消に有効ではないかと思われる。以上のことから、高校生の対人ストレスに対する認知的評価、対人ストレスコーピングでは違いがあり、ストレスレベルの違いによっても、ソーシャルサポートに違いがあることが明らかとなった。

本研究の課題として、生徒一人ひとりのパーソナリティ要因などについては今回調査をしていない。また、他者に相談をするためのソーシャルスキルについても扱っていない。そのため、今後は、パーソナリティ要因やソーシャルスキルなどについても調査し、高校生一人ひとりの対人ストレスを低減させる方法について検討していくことが必要だと思われる。

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

付 記

本論文は、第2著者が2022年度に武庫川女子大学文学部に提出した卒業論文用データを第1著者がデータを再分析、再構成したものである。

引用文献

- 1) 石隈利紀. “スクールカウンセラーに求められる役割に関するニーズ調査から”. 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス—. 誠信書房, 1999, pp.160-186.
- 2) 文部科学省. 5 高等学校の長期欠席(不登校等). 令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について. https://www.mext.go.jp/content/20211007-mxt_jidou01-100002753_1.pdf, (accessed 2022-08-20).
- 3) Lazarus, R.S. Coping theory and research: Past, present, and future. *Psychosomatic Medicine*. 1993, 55 (3), pp. 234-247.
- 4) Lazarus, R.S., & Folkman, S. *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. 1984. 445p.
- 5) 加藤司. 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究. 2001, Vol.49, No.3, pp.295-304.
- 6) 加藤司. 短縮版対人ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証. 神戸女学院大学学生相談室紀要. 2002, Vol.7, pp.17-22.
- 7) 蔵本信比古. ひきこもりの3つの時期とその状態. 室蘭工業大学紀要. 2005, Vol.55, pp.43-49.
- 8) 加藤司. 看護学生における対人ストレスコーピングがストレス反応に及ぼす影響. 東洋大学人間科学科総合研究所紀要. 2007, Vol.7, pp.265-275.
- 9) 内閣府. 第3章困難を有する子供・若者やその家族の支援. 平成30年版子供・若者白書. https://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h29honpen/s3_2.html, (accessed 2022-8-20).
- 10) 嶋信宏. 大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究. 教育心理学研究. 1991, Vol.39, No.4, pp.440-447.
- 11) 関口千津子・岡田斉. 対人関係精神的健康に及ぼす影響についての調査研究—ソーシャルサポート, ソーシャルスキルと抑うつとの関連性に着目して—. 日本心理学会大会発表論文集. 2010, Vol.74, p.105.
- 12) 片受靖・大貫尚子. 大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—評価的サポートを含む多因子構造の観点から—. 立正大学心理学研究年報. 2014, Vol.5, pp.37-46.
- 13) 株式会社マクロミル・認定NPO法人. “株式会社マクロミル・認定NPO法人カタリバ協働調査”. 2018年思春期の実態把握調査結果報告書. <https://www.macromill.com/assets/files/pdf/20181220-adolescent-research-report.pdf>, (accessed 2022-08-20).
- 14) 長尾美佐・松永美希. 大学生のストレス状況下における認知的評価とレジリエンスが精神的健康に与える影響. 立教大学臨床心理学研究, 2016, Vol.10, pp.1-13.

受理日 2022年12月14日

ケステンバークムーブメントプロフィールの自動化に伴う 入力装置使用時の記譜者の身体的共感に関する検討

崎 山 ゆかり
(武庫川女子大学教育学部教育学科)

A Study of the Notator's Kinesthetic Empathy in using Input Devices in automating the Kestenberg Movement Profile

Yukari SAKIYAMA

*Department of Education, School of Education
Mukogawa Women's University*

Abstract

Research on automating the Kestenberg Movement Profile (KMP) is now in its fifth year. Three types of input devices for drawing rhythm lines, which are essential for automation, were produced by IT specialists. In studying the specifications of these input devices, the issue of the notator's physical familiarity with the device surfaced, which had not been noticed at first.

In the original method of rhythm line notation, the notator first holds the pen and concentrates on the client on the screen. The notator then uses their own Kinesthetic Empathy to feel the rhythm of the movement and draw the rhythm lines, attuning into the various rhythms in breathing and movement. Comparing the notator's physical sensation among these approaches of drawing rhythm lines with one another, it was quite different. While specifically discussing the differences, the author focused on Kinesthetic Empathy as the underlying concept. The five approaches that lead to Kinesthetic Empathy in a previous study were replaced with the approach used when operating the input devices.

Since this is based solely on the physical sensations of the individual author, further research is needed to target multiple notators in the future. However, as a future vision for the automation research of KMP, the author could find a new theme, such as the construction of a learning system that can quantify and demonstrate the establishment of Kinesthetic Empathy.

はじめに

主に欧米で発達支援に活用されている乳幼児運動分析技法、ケステンバークムーブメントプロフィール(Kestenberg Movement Profile、KMP)¹⁾の自動化研究に取り組み、5年が経過している。この間、リズムラインの記譜とリズム分類に焦点を当て、情報工学の専門家との協働により研究を進めてきた。自動化のための大前提であるリズムラインデータのデジタル化のために、複数の入力装置の開発がなされている。この開発により、従来の手描きによるリズムラインの記録のデジタル化が可能となった。この取り組みについては、これまで国内外の学会等²⁾³⁾⁴⁾で成果発表を行っている。

しかしながら、その過程において、記譜者としてその入力装置を使用する際、新たな課題が明らかになってきた。それは入力装置を用いてリズムラインを描く際の、記譜者の身体感覚の問題である。長年培ってきた、ペンを握り紙に直接リズムラインを手で描く身体感覚と、装置を操作しながらリズムライ

ンを描く身体感覚のずれをどのように受け止め、解消すべきか、この点についての検討はなされていない状況である。

そこで本研究では、従来の方法と入力装置による方法の違いを具体的に提示したうえで、動きを用いる心理療法であるダンス・ムーブメントセラピー (Dance/Movement Therapy、DMT)で活用される身体的共感(Kinesthetic Empathy)の概念⁵⁾を用いて、リズムラインを描く際の身体感覚の違いを具体的に述べ、その解決に向けた課題を検討することを目的とする。

KMP におけるリズムラインの記譜と入力装置の開発の現状

KMP において、リズムラインを記譜する分析カテゴリーは、乳幼児の運動発達に基づく動きのリズムを精神分析的発達段階に当てはめたテンションフローリズム(Tension Flow Rhythm、TFR)⁶⁾である。リズムラインの記譜は、TFR の既定の 10 種のリズムのリズムラインの形状を覚えるところから始まる。動きのリズムを体感しながら、定められたリズムラインを覚え、少しずつ感覚的にそれぞれのリズムラインが滑らかに描けるようになっていく。記譜のトレーニングにおいては、教材となる乳児の動きの映像を無音で何度も繰り返して見る。その際同様にリズムを感じ、記譜者自身の身体感覚にリズムを落とし込むことが求められる。具体的な習得のための練習教材があるわけではなく、これらの流れをひたすら反復し、ペンを握ったまま意識を集中させ、一気にリズムラインを描ききるのが通常の描き方である。リズムラインは既定のラインだけでなく、リズムが組み合わさった複雑なラインも多く、技能習得の壁は厚いのが現状である。このような本来の手描きでリズムラインを描く様子を模擬的に示したものが、次の図 1 である。

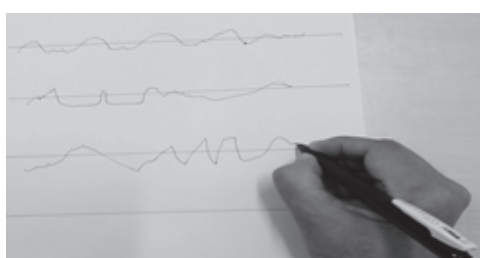


図 1 KMP におけるリズムラインの手描き

このようなオリジナルの手描きの記譜方法は、リズムラインを描いた後の形状毎の分析に多くの時間を要するため、2018 年度より情報工学の専門家との協働で、KMP の自動化にむけた研究を始めた。その際、自動化のためには、まずこのリズムラインのデータをデジタル化する必要があった。そこで、新たに手描きに代わるリズムラインの入力装置が開発されたのである。

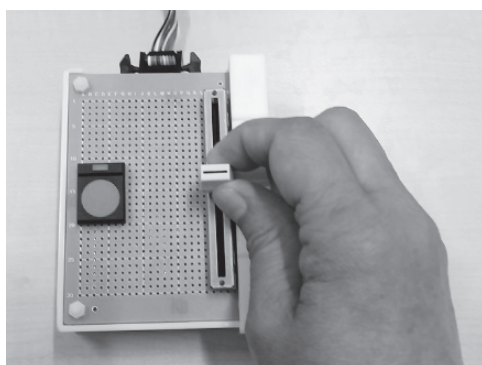


図 2 スライダスイッチ方式



図 3 指曲げセンサー方式

次に、これまで開発された入力装置について概説するとともに、それぞれのリズムラインの「書き味」について述べていくことにする。最初に開発されたのが、スイッチを上下にスライドすることによりラインが描けるスライダースイッチ方式(図 2)である。続いて、センサーのついた手袋をつけてボールを握る強弱でリズムラインを描く指曲げセンサー方式(図 3)が試作された。現在この方式は、その改良に取り組んでいる段階である。これらは、いずれも、装置を独自に開発したいわば手作りの入力装置である。

これら 2 つの入力装置は、映像と同期するリズムライン入力のためのプログラム開発は元より、3D プリンターを用いてボックスを作成しつまみの位置を調整したり、どの指に指曲げセンサーを装着し、どのような素材の手袋を使用するかなど、開発の段階から筆者の意見を反映することができた。しかし、手作りだからこそその微調整のしやすさと同時に難しさもある。特に、指曲げセンサー方式は、センサーがどこまで動きを感知できるかといった機器としての精度について、今後も検討が必要な段階である。

一方、市販のペンタブレットを活用し、ペンの滑り具合の滑らかさを保護フィルムシートで調整したものがペンタブレット方式(図 4)である。この方式では、装置そのものは市販のものを利用しているため、ペンタブレットでリズムラインを描くシステム開発が中心となった。



図 4 ペンタブレット方式

リズムラインの記譜時の身体感覚

ここでは、前述のオリジナルの場合と 3 種の入力装置それぞれの場合のリズムラインを記譜する際の身体感覚について、以下にできる限りの言語化を試みることにする。

まず、オリジナルのリズムラインの記譜は、きわめて感覚的なところがある。実際の KMP の記譜マニュアル⁷⁾においても、こうした具体的な練習方法についての記載はない。訓練生の中には、最後までこの感覚がつかめないまま既定の講習を終える場合もある。筆者自身はこの訓練を積み重ね、いつのまにかリズムラインを描く身体感覚を会得できたように思う。加えて、オリジナルの手描きの場合、まずどのようなペンをを用いるかも問題となる。その微妙な指先に伝わる感覚の違いにより、リズムラインの描きやすさに差が出るからである。筆者の場合、最終的にはいわゆる太書きサイズの油性ボールペン(ボール径 0.8mm 程度)が一番滑らかに描ける感覚であった。

手になじむペンをしっかりと握りしめ、紙の上にそのまま手を乗せて、左から右へとリズムラインを描く。左から右へと流れる横軸の変化により、リズムが刻む時間経過そのものと、上下の縦軸の変化により、リズムの強弱の違いを感じながら、リズムラインが記録されていく。特に、上から下へラインが降りていく場合は、リズムが生み出される動きの強度による「重たさ」を意識した。重力をより強く感じるかのように、からだの重心が下方向へと沈む感覚があった。また、記入用紙に予め記載されているニュートラルライン(中央線)の下側にリズムラインを描くときは、前述の「重たさ」を特に感じるが多かった。さらに、下から上方向へと変化する場合は、「重たさ」は徐々に軽減され、軽い感覚を得ることで、紙に押し当てるペン先の強さもそれに呼応するかのように、柔らかく軽い感じを得るようになった。このような感覚の変化は、記譜者の呼吸とも連動しており、「重たさ」を強く感じながら、ペン先に

も圧を強めるような描き方の場合、思わず息を堪えたまま踏ん張るような感覚もあった。

図2のスライダースイッチ方式の場合、主に親指と人差し指でスイッチを挟み込むように持ち、安定のために中指を横から添えるようにしてスイッチを操作する。操作は、常にスイッチを上下させるだけであり、中央の位置がニュートラルラインに該当する。映像との同期が可能となっているため、記録のスタートとストップは、左側にある青いボタンを押す操作を行う。紙にペンで手描きすることに慣れてきた筆者にとって、この入力装置は、当初違和感ばかりが先行していた。ペンを握らない代わりに、つまみを指先で持ち、ただ上下の動きをシンプルに繰り返すのだが、これまでリズムの時間性を横軸でとらえていたため、縦軸の上下動のシンプルな動きだけで多様なリズムラインが描けること自体が、感覚的になかなかつかめなかった。繰り返しつまみを上下するだけで、次々にラインが描かれていくその現実が、頭では理解できても、感覚的に把握しづらい状況が続いた。しかし、練習を重ねることで、つまみを上げ下げする時間の違いによって、リズムを描くための時間間隔が少しずつつかめるようになっていった。リズムの強弱については、オリジナルと同様の上下の縦軸の動きで描かれるため、これについては思いの外スムーズに対応できたように思う。

しかしながら、この上下のシンプルな動きだからこそ、上下にしか動かないスイッチをつまみながら、ついひねりたくなるような感覚に襲われた。最終的には、何度もトレーニングを重ねたことで、当初の違和感は完全には拭えないものの、微妙なひねりの動き以外は、シンプルに描ける感覚が新たに身についた。この入力装置は、これまでできなかった映像とリズムラインの記録の同期という課題を解決し、この映像との同期で、記譜者として観察する映像の中のクライアントとの呼吸の同期はしやすくなった。しかしその身体感覚は、常に指先だけに集中する感じであった。反復練習により、次第にこの上下の間隔でラインが描けることから、動作と描かれるリズムラインの連動性も感じられるようになり、一部のリズムを除いて、手描きと遜色のない同様のリズムラインを描けるようになった。それでも、身体感覚の違いからくるある種の違和感を、現段階で筆者は埋めることはできていないままである。

こうした経緯から、より身体感覚に根差した入力方法を検討する中で、ボールをしっかり握ることで入力する方法が検討された。それが、図3で示した指曲げセンサー式入力装置である。指曲げセンサーの場合、スクイーズボールと称される握力で形状が変わるボールを手を持つことで、ダイレクトな手の感覚を用いることができた。この工夫のおかげで、ラインを描くのが指先ではなく、手から全身の感覚へと広がっていった。しかしながら、どの程度の握りの強さでどの幅のラインが描けるかは、開発途上であり、まだ会得できていない。さらに握りの強さに加え、ここでも筆者のひねりの動作が発現した。センサーが感知しない無駄な動きと頭でわかっているにもかかわらず、無意識に手首をひねりながらリズムラインを描こうとした。ペンを握って力を含める筋運動としての身体感覚を反映する感覚的なところは、大きな進歩ではあったが、その動きでどのリズムラインが描けるのかといった精度については、まだ改善の余地がある。精度が上がることにより、スライダースイッチと同様、トレーニングによりその感覚を会得できると、クライアントの動きに呼応しながら、リズムラインを描ける可能性がある。

ペンタブレットは、元々ペンを握ってタブレット上に描くことから、いわゆる紙と鉛筆の関係性がデジタル化されたものである。この研究をスタートした2018年度当初より、ペンタブレットを用いるアイデアはあった。しかし、これは記譜者自身の身体感覚の違和感から、入力装置の対象になり得なかった。その理由は、当時の筆者自身のiPadによる筆記体験である。日常生活の中で、クレジットカードの買い物の際、ペーパーレスとなり電子署名が導入されて以降、指での署名を求められたとき、そのあまりの書きにくさに辟易していた。次にタッチペンによる署名でも、書き心地の不確かさが忘れられず、当初から入力装置の候補としては除外してきた。つまり、もともとペンタブレットによるリズムラインの入力は、このような経験から描き味についての抵抗感があったのである。

ところが、新たな研究段階を迎える中で、試行的に提供された図4の市販のタブレット(Wacom One DTC133)と保護シート(サンワサプライ LCD-WO13P)の組み合わせにより、リズムラインを描いた際、その描き味に驚くこととなる。前述のタッチペンの違和感がほぼ解消されており、以前の体験とは格段の違いがあった。身体感覚的には、3種の入力装置の中で唯一ペンを握るという共通点があり、オリジ

ナルの入力形式に最も近く感覚的には一番馴染んだ。より詳細に身体感覚について述べるなら、この入力装置においても、リズムラインの描き方の感覚に慣れる必要があった。というのも、ペンタブレットは元々その機能としてタッチパネルとなっているため、ペン以外の手の部分が触れるとそれに反応する。つまり、ペン先のみを画面にあてながら記録することに慣れていく必要がある。実際の仕様感としては、筆圧のかけ方、リズムを感じてイメージ通りのラインを描くことは、オリジナルのペンと紙の方法に最も近い感覚であった。ペンを動かすことで描けるリズムラインの感覚が一致していることは、大きな進歩である。しかしその一方で、タッチパネルを用いる限界として、ペン以外で手が触れると記録が中断してしまうことがあった。通常、ペンで何かを描くときは、指先で握ったペンを支えるために、掌外沿(手の小指側の横の部分)を紙に接触させ、安定を図っている。ペンタブレット方式では、この点についての感覚が異なるため、記譜者にはその慣れが必要であった。こうした、ペンをを用いた書き味の研究は、筆圧が書字作業における身体的負担の研究⁸⁾や、デジタルペンや鉛筆などの複数の筆記具の使用時の脳への負荷に関する研究⁹⁾などが行われているが、その使用時の身体感覚という、主観的であり曖昧な感性的側面に関する研究は十分とは言えない。

以上の体験をふまえ、オリジナルの身体感覚と比べた違いについて、これら3つの入力装置の身体感覚を通した仕様感を簡単にまとめたものが、次の表1である^{註1)}。いずれの場合も、記譜者自身の今後の訓練や装置の性能の向上によって変わる可能性もある。また、何よりもこれらはすべて、筆者の個人内感覚をまとめたものにすぎないため、今後汎用化のためには複数の記譜者による仕様を確認する必要があることは言うまでもない。

表1 入力装置毎の身体感覚を通した仕様感

仕様時の感覚	入力装置		
	スライド・スイッチ	スクワイズボール	ペンタブレット
指先	×	×	○
手全体	×	×	△
全身	×	△	△
リズムの強弱の調整	△	○	△
リズムの時間の調整	△	×	○
描くラインのイメージ	△	△	○
実際のラインの精度	△	×*	○
新たな身体感覚の獲得	○	△	×
○オリジナルと近い、△オリジナルと少し異なる、×オリジナルと全く異なる			
*現在改良中			

身体的共感をふまえた入力装置操作の身体感覚

これまで試行してきた入力装置の仕様を確認する中で、筆者自身が少しずつその装置に慣れていく過程において、当初の違和感が軽減されていることを体験してきた。この慣れとは、反復練習によってリズムラインをオリジナルの手描きのラインと変わらず正確に描けるようになるという技術の習得と、確かに連動してはいたのだが、必ずしも一致するものではなかった。強いて述べるなら、それはオリジナルの手描きの方法で、呼吸を合わせ映像に集中してリズムラインを描ききるときの身体感覚に、記譜者自身が内省的にどこまで近づけるかという、きわめて個人内の課題であった。

しかしながら、KMPの自動化にはこうした入力装置を用いる新たな記譜の在り方が前提となっている。そもそもこの自動化研究の目的は、KMPの汎用化により、幅広い分野での発達支援を容易にすることでもあり、入力装置による記譜に伴うこの身体感覚の課題について、今一度検討する必要があると考えるに至った。

では、こうした身体感覚を、具体的にどのように考えればいいのかだろう。先行研究のような筆圧測定や脳波ではない測定項目が果たして存在するのかも不透明である。あくまでも筆者はDMTやKMPを

専門としているにすぎず、工学的知識は皆無とも言える。だからこそ、情報工学の専門家との協働に意義を見出し、研究を進めているのだが、この異分野を橋渡しすることにつながるある種のパラダイムのような概念が求められていると、このような経験を通して改めて実感している。

この課題を考える際、未だ定量化には全く至らないものの、DMT 領域で用いられる身体感覚的な概念が、何らかの橋渡しとなるのではないかと考えるようになった。それは、身体的共感と称される、Kinesthetic Empathy である。言語を直訳すると、「筋感覚的共感」となる。身体的共感とは、ダンスセラピストの Berger が 1956 年に初めて論文内で提唱した概念と言われている。「我々の情緒反応は、運動学的認知により決定付けられるだけではなく、運動的反応によっても決められる。我々は、自分たちの運動模倣の形式によって現実の体験を知覚するのである。そして他者の情緒的態度を経験するのだ」(筆者拙訳)¹⁰⁾。DMT では、セラピストとクライアントが共に動く中で、情緒的な交流を生み出しながらセッションが進んでいく。同じ時空間を実際に共有して動くことから、身体を通して直接的に感じるようになる。この概念は、Berger の提唱後、多くのダンスセラピストが、クライアントとの治療関係やグループセッションにおける力動性について述べる中で用いられている。さらには転移の問題を語る¹¹⁾ときにも、論じられる場合もある。

この概念をより具体的に、二者関係における動きの視点から掘り下げたのが、Frankel¹²⁾である。彼女は次の 5 つの動き、同期(Synchrony)、反響(Echoing)、模倣(Mimicry)、反映(Reflection)、鏡映(Mirroring)から、身体的共感について具体的な説明を行った。これらの内容は、クライアントの動きに対して、セラピストがどのように反応するかということを具体的に示している。動きのタイミングをぴったり合わせる同期、動きを受け止めた後そのまま返す反響、動きを真似る模倣、動きを受け止めた後自分なりに応じる反映、そして動きを鏡写しのように真似る鏡映について述べられている。そのすべてに関係する、それらの対応を支えるクライアントへのからだを通した共感が、いわば身体的共感ということになる。Frankel はさらに、この概念に関して講演^{註2)}を行うなど、DMT の学習者たちにわかりやすく伝えることを試みている。

前項で述べてきたリズムラインの入力装置の仕様感やその身体感覚を、身体的共感の概念をふまえて、試行的に上記の 5 つの動きに当てはめたものが次の表 2 である。この概念を用いることで、操作のための身体感覚をどのように位置づけるべきかを、今一度考えるための示唆を得ることができるようになる。なぜなら、「タイミング」、「呼応」、「後追い」、「ずれ」といった表内にある言葉は、すべて時間軸にかかわる表現であり、いわゆる調律(attunement)¹³⁾の問題につながるからである。身体的共感という主観的概念は、調律という時間軸にかかわる具体的行為からもたらされる。この視点を今後いかに掘り下げていくかが、記譜者が入力装置にその身体感覚をなじませる際の身体的共感の獲得につながるものと思われる。

表 2 身体的共感をふまえた対応に基づく入力装置操作時の仕様感および身体感覚

身体的共感を踏まえた対応		映像内のクライアントに対する記譜者のセラピストとしての感覚	入力装置の操作の方法に置き換えた場合
同期	Synchrony	呼吸を含む細かい動きのタイミングを一致させて受け止める	動きに呼吸を合わせ、映像の動きから感じられるリズムに合わせて、映像とのタイミングがずれないように気をつけて操作する
反響	Echoing	受け止めた動きを同じ質で返す	動きを後追いしながら、その動きに呼応して操作する
模倣	Mimicry	動きのニュアンスを含めて真似る	動きを後追いしながら、その動きにぴったり寄り添い揃えるかのように操作する
反映	Reflection	受け止めた動きを自分なりに返す	動きを後追いしながら、記譜者自身の身体感覚を反映させながら操作する
鏡映	Mirroring	動きを同期させ同じ形で返す	動きに呼吸を合わせ、映像の動きから感じられるリズムと動きの形そのものを、タイミングがずれないように気をつけて操作する

おわりにー KMP 自動化の将来構想と身体的共感

身体的共感というきわめて主観的な概念は、attunement、調律という具体的行為からもたらされる。しかし、そもそも共感とは異なり、他者理解のために思いを「共にする」ことであり、「一致」させることではない。KMP の自動化を進める中で、機械操作がとにかく苦手である筆者自身の個人的な問題に端を発し、入力装置が巧みに操れない現実と格闘しながらも、辛抱強く開発を続ける共同研究者に恵まれたことで、この自身の身体感覚の違和感に改めて焦点を当てることができたように思う。

きわめて感性的で、抽象的概念とも思われる身体的共感が、入力装置を使用する際の身体感覚を振り返ることにより、時間軸を起点として進んでいくことが示唆された。さらに、今後時間軸以外の新たな機軸を見い出すことによって、DMT 領域を超えて、この概念が明らかになる「何か」を検討していきたい。当然のことながら、身体的共感とは機械操作などのテクニックの獲得に関するものではなく、対人援助技術の根幹となる概念である。DMT など動きで他者と関わる対人援助の場面では、セラピストの他者理解の力量にも直結している。例えば、仮に身体的共感が概念としてだけではなく、セラピストの他者への対応能力のレベルを明示するように定量化できれば、KMP 自動化の研究は、感性工学の分野などとの新たな協働につながる可能性を秘めている。

今回はあくまでも筆者個人の身体感覚に基づくため、今後複数の記譜者を対象としたさらなる研究が必要である。KMP の自動化には、記譜者側の身体感覚をふまえる必要があることは言うまでもない。これは、単に記譜者が装置に自己の感覚を合わせるのではなく、装置が記譜者の身体感覚に寄り添えるよう更なる工夫と開発が必要となることを意味している。KMP の自動化研究の将来像として、身体的共感の概念をより明確化することで、定量化やセラピストの技能につながる学習システムの構築など、新たなテーマを見い出すことができた。今後も、異分野の研究者同士の協働を図りながら、身体的共感の検討に取り組んでいきたい。

付記

本論文は、科学研究費補助金(基盤研究(C) 21K02426)『保育現場における発達支援のための運動分析技法の自動化に関する継続研究』の(代表 崎山ゆかり)による研究成果の一部である。この研究を支えてくださっている三重大学大学院工学研究科の高瀬治彦先生、川中普晴先生、同大学院地域イノベーション学科博士後期課程の平林義彦氏、同大学客員教授の井上敦司先生に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

註

- 1) 表 1 の英語版は、アメリカダンスセラピー協会第 57 回大会ポスター発表(2022 年 10 月 28 日)の資料の一部として公開済みである。
- 2) アメリカダンスセラピー協会の映像資料で、以下の URL で講演の内容が紹介されている。
<https://www.youtube.com/watch?v=a9uudFLSoP8&t=95s8> (accessed 2022-11-17)

文献

- 1) Kestenbergh-Amighi, J., Loman, S., and Sossin, M. with invited contributors, *The Meaning of Movement Embodied Developmental, Clinical, and Cultural Perspectives of the Kestenbergh Movement Profile*, Routledge, New York, 2018, pp.3-12.
- 2) Sakiyama, Y., Takase, H., Kawanaka, H. and Inoue, A. Kestenbergh Movement Profile and IT Support- Focusing on Input Device for Tension Flow Rhythm Lines and Kinesthetic Empathy, The 54th Annual Conference of American Dance Therapy Association Poster Presentation, 2019

- 3) 崎山ゆかり, ケステンバーグムーブメントプロファイルの汎用化に向けた分析技法の課題, 日本ダンス・セラピー協会第30回学術研究大会, ポスター発表(オンライン), 2021
- 4) 崎山ゆかり, ケステンバーグムーブメントプロファイル(KMP)におけるリズムラインのデジタル入力装置の開発と課題, 日本ダンス・セラピー協会第31回学術研究大会, ポスター発表(オンライン), 2022
- 5) Berger, M.R., Bodily Experience and Expression of Emotion, *A Collection of Early Writings: Toward a Body Knowledge*, American Dance Therapy Association, Maryland, 1989, 170p.
- 6) Kestenberg-Amighi, J.& Loman, S., *The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile*, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, 1999, pp.23-57.
- 7) Loman, S., and The Sand Point Movement Study Group Child Development Research, *TRAINING MANUAL FOR THE KESTENBERG MOVEMENT PROFILE*, Antioch University, 1999, pp.6-20.
- 8) 倉本昭季, 平内和樹, 瀬尾明彦, 筆圧履歴を用いた書字作業の身体的負担評価, 日本機械学会論文集, 86 (887), 2020, pp.1-14.
- 9) 竹野英敏, 藤田和幸, 脳波からみたデジタルペン、タブレット PC 及び紙と鉛筆を用いた記述回答時のストレス比較, 日本科学教育学会研究会研究報告, 30 (8), 2016, pp.53-58.
- 10) 崎山ゆかり, 身体的共感と自己洞察, ダンスセラピーの理論と実践 からだと心へのヒーリングアート, 大沼幸子, 崎山ゆかり, 町田章一, 松原豊編, ジアース教育新社, 2012, pp.169-179.
- 11) Fischman, D., Therapeutic Relationships and Kinesthetic Empathy, ed. Chaiklin, S. and Wengrower, H., *The Art and Science of Dance/Movement Therapy Life is Dance*, New York: Routledge, 2009, pp.33-53.
- 12) Frankel, D.L., The Relationship of Empathy in Movement to Synchrony, Echoing, and Empathy in Verbal Interactions, *American Journal of Dance Therapy*, 6, 1983, pp.31-48.
- 13) Erksine, R.G., Attunement and involvement: therapeutic responses to relational needs. *International Journal of Psychotherapy*, 3 (3), 1998, pp.235-244.

受理日 2022 年 12 月 5 日

“The Rover” 再考 —ブランウェル・ブロンテの作品における海賊—

西山 裕子
(武庫川女子大学教育学部教育学科)

Reevaluating “The Rover” in the Context of the History of Pirates in Branwell Brontë’s Angrian Poems

Hiroko NISHIYAMA

*Department of Education, School of Education
Mukogawa Women’s University*

Abstract

Branwell Brontë’s depiction of Alexander Percy as a pirate plays a significant role in understanding his poetical works in their historical context, for Branwell presents the original aspects of pirates of his time in his poem “The Rover.” Generally acknowledged as “Rougue” or “Rogue,” Branwell’s portrayal of Percy throughout his poetical works and prose narratives foreshadows more than a mere main character and personae, and more than Branwell’s enthusiastic pursuit of the Byronic hero. Even though newly published analyses of Percy by several critics show the romantic elements or aspects already present in Branwell’s earlier poems, we can still argue that, especially in the earlier phase of Branwell’s works, the pirate figure of Percy is quite removed from the romantic figure in Byron’s *The Corsair*. Examining the history of pirates alongside Byron’s famous poem, Branwell outspeaks the originality of his works in “The Rover.” This paper focuses on why Branwell used a pirate as his personae and reexamines the received critical evaluation of his poems.

はじめに

近年、日本におけるブランウェル研究にはめざましく進展がみられる。従来の研究では、例えば、岩上はる子氏は、『ブロンテ初期作品の世界』において、ブランウェル・ブロンテ(Branwell Brontë, 1817-1848)の主人公アレグザンダー・パーシー(Alexander Augustus Percy, Viscount Elrington and Earl of Northangerland)を反逆者とみなし、陰謀、反乱、革命、アシャンティ族(Ashantees)との対戦を次々と演出したアングリア物語の政治的展開を好むブランウェルの趣向を特徴づけると論じる¹⁾。このようなブランウェル研究と作品解釈を経て、最近の研究では「悪漢」パーシーにロマンス的側面を見出そうとする試みもある。菟原美和氏はアングリア戦争詩における自然描写のメタファーを解析し、ドラマチックに描き出されたアングリア国王ザモーナ(Duke of Zamorna, Arthur Augustus Adrian Wellesley, Marquis of Dourno, King of Angria)とパーシーとの関係を精緻に分析するが²⁾、その一方で、瀧川宏樹氏はブランウェルの詩作品全体の特徴のひとつとして自然描写が多用されていることに言及し、海をモチーフにザモーナとパーシーが対照的な位置に置かれていることなどに触れる。また、瀧川氏は海を舞台にパーシーが恋人オーガスタ(Augusta)を想い、「恋人たちの恋愛模様」を提示することなどから、表象としての海は舞台装置として機能し、作品の解釈において重要な役割を担うと論じる³⁾。とはいえ、ブランウェルと

パーシーに関してはダフィネ・デュ・モーリエ(Daphne du Maurier)の指摘にみられるように、シャーロット・ブロンテ(Charlotte Brontë, 1816-55)やエミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-1848)、さらには、アン・ブロンテ(Anne Brontë, 1820-1849)の初期作品の主要な登場人物と比べると十分な解明に至っていない⁴⁾。廣野由美子氏は、エリザベス・ギaskell(Elizabeth Gaskell, 1810-1865)の伝記においても、ブランウェル像はシャーロットの目を通して語られているために、映し出される実体は客観性を欠いていることが危惧されると論じている⁵⁾。

従来、ブロンテの批評史では、ブランウェルの作品はシャーロットの初期作品との関連性において論じられる傾向にある。確かに、シャーロットとブランウェルはともに影響を与えながら、「11年間文学的な共同作業を行なった」⁶⁾ことで恋愛や戦争というテーマを共有しており、詩作において互いの存在は不可欠であったと考えられているが、二人の関係や共同の創作活動の外側で、ブランウェルの作品は再評価に値するのではないだろうか。

本稿では、およそ1832年以降1837頃までに書かれたとされる^{*1}ブランウェルの「アングリア詩」から、散文と密接に関わりのある詩「海賊船ローバー号」(“The Rover,” 1834/1837)を取り上げて、彼の詩作品の再評価を試みることを主眼とする。その方法として、まず、当時の海賊の受容と多様な解釈の可能性を指摘し、ブランウェルが海賊の歴史という史実を踏まえて創作を試みたことに触れたのち、短編「海賊」(“The Pirate: A Tale, by the Author of Letters from an Englishman,” 1833)で彼が描こうとした海賊像の意義を問い、パーシーの出自に纏わる言及がなされた「羊毛は高騰する」(“The Wool is Rising,” 1834)と題する短編に挿入された詩作品“The Rover”を経て、散文と1837年版の詩との相互関係を考察する。その上で、最終的には、“The Rover”において、ノーサンガーランド伯爵になり次第に恋愛へと傾倒するまでの「海賊」ロウグ(“Rogue” or “Rogue”)^{**2}ことアレグザンダー・パーシーに焦点を当て、ブランウェルが自身のペルソナである「ノーサンガーランド伯爵」(Earl of Northangerland)を通じて、ブロンテきょうだいとしてではなく、ひとりの作家として史実を反映させながら物語の再構築を重ねて自らの創作の世界を紡ぎだそうとした姿勢にこそ、彼の独自性がみられることを指摘したい。

1. 「海賊」たちとブランウェル

英文学の歴史において海賊のテーマは、文学作品の解釈と評価において重要な位置を占めていると考えられる。史実を鑑みれば、ブランウェルにとって、アングリア物語(Angrian saga)の「海賊」は、パーシーの舞台を海から戦場へと移行させるためのモチーフとしてのみ描かれているのではない。ブランウェルが海賊を描き出したことは、「複雑なアングリア物語を読み解く鍵となる」という指摘もあるように、「ブランウェルが海賊の話に精通していた」⁷⁾ことは、彼の詩作全体の評価に一石を投じる可能性がある。

では、「海賊」とは何か。海賊には諸説があり、英語表記も様々である。櫻井正一郎氏や竹田いさみ氏はエリザベス女王の治世に海洋覇権をめぐる海賊たちが利用されていたことに着目する。櫻井氏は「エリザベス一世の時代が私掠の時代であった」ことを強調し、私掠は常備海軍の代わりとなり、ヘンリ八世の時代に盛んになっていたこと、衰弱し始めたイギリスの交易の代わりとなっていたこと、スペインのカトリシズム(旧教主義)にイギリスのプロテスタンティズムが戦いを挑む形でイギリスがプロテスタント国家になる道を切り拓く役割をしていたと述べている。同様に櫻井氏は、海賊について二十世紀中頃に新しい見方が生まれたと指摘するが、一方で、旧い見方では「私掠は賛美され」、「私掠が大英帝国を造った」とされていると論じる⁸⁾。竹田氏の論考では、大英帝国の確立は産業革命によってもたらされたが、その資金元は「海賊がもたらした略奪品」であり、海賊は「近代国家の礎を築いた『英雄』」として

^{*1}『ブロンテ初期作品の世界』における岩上氏の論考では、一般的には、初期作品の第二期は1832年から1836年までであると考えられてきたが、1837年にアングリア物語は変質しつつあると指摘されている(141)。

^{**2}ロウグの表記には2種類あると考えられている。コリンズの指摘によれば、創作の初期段階では“Rogue”となっているが、シャーロットが同じキャラクターを用いるときには“Rogue”と表記されている(xv)。

再定義され、海賊行為が合法化され、さらには正当化されていることがわかる。また、海賊船は「ローバー」の別の表現として、「私掠船([p]rivateers = プライヴェティア)」があること、当時の情勢では王室が関与する海賊行為は「合法化」されていたことなどが明らかになっている。このような歴史の流れを踏まえると、海賊という〈英雄〉なしに国家の繁栄はなされないことになる⁹⁾。

ブランウェルの詩において、「海賊」には複数の言い回しがある。そもそも「海賊[船]」についての記述は、複数回にわたって試みがなされているが、その一つ目としてまず 1833 年に書かれた短編「海賊」があり、次に、1834 年に書かれた物語「羊毛は高騰する」のなかに挿入された詩作品で、海賊パーシーの略奪の様子が綴られている。さらに、その詩は、最終的に 1837 年の改稿時に部分的に修正されていることから、この 3 種類の「海賊[船]」にまつわる描写が、海賊パーシー像を具体的に解明する鍵となっていると思われる。

もっとも、「海賊船」という題名だけを鑑みれば、「海賊船ローバー号」は、まず、ノーサンガーランド伯爵が 1834 年 5 月に書いた詩の題名として挙げられるであろうが、この詩は 1837 年 3 月 9 日に修正が加えられ(このとき、P[atrick] B[ranwell] B[rontë] の署名はない)、詩の終わりで PBB による 3 月 10 日付の署名が加えられている¹⁰⁾。1834 年版と 1837 年版とを比較すると、一部の語句で変更がみられる。例えば、“my Rover”¹¹⁾ の表記は、1834 年版(改稿前)では“My pirate ship”¹²⁾ となっているし、さらに遡ると、1833 年の短編「海賊」では、海賊船“a pirate”の表記は“a privateer”とある。まず、こういった言葉の選び方から、ブランウェルが詩作に入念に史実を取り込んでいる可能性が指摘できる¹³⁾。

海賊(“rover”)という言葉には、OED によれば、文字通り「海賊」を意味する“pirate”の他、“a sea-rover”や“a privateer”の意味があるが¹⁴⁾、歴史的コンテクストでこの言葉を捉え直すと、表記には複数あると言われている。櫻井によれば、「海賊」には、掠奪する者“pirate”、掠奪行に出る“corsair”や、海で獲物を探しまわる“rover”がいる¹⁵⁾。加えて、カリブ海で恐れられた海賊には“[b]uccaneers”、バイロン(George Gordon Byron, 1788-1824)が描いた地中海の海賊には“[c]orsairs”が当てはまると指摘されている¹⁶⁾。これらの異なる表現において共通項となるのは、海賊は〈英雄〉とみなされ、実在したイギリス人探検家・海軍提督ドレーク(Francis Drake, 1577-1580)や海賊キャベンディッシュ(Thomas Cavendish, 1560-1592)のような「冒険家」でもあると定義されていることだ。

史実においてブランウェルの海賊を読み解く上で、「掠奪行に出る[コルセア]“corsair”が「海賊」を意味する言葉として挙げられていることは、意味深長である。ブロンテ批評において、バイロンがブロンテ作品に与えた影響は切り離すことができないと考えられているが、アレグザンダー(Christine Alexander)とマーガレット・スミス(Margaret Smith)が編纂した『ブロンテ・コンパニオン』(*The Oxford Companion to the Brontës*)でも、ブロンテ姉妹同様にブランウェルもバイロンに熱狂的であったことから、パーシーはバイロニック・ヒーロー(a Byronic hero)のイメージと重ねられている¹⁷⁾。この点を発展させて考えると、海賊との関連においてバイロンの重要性を説くのは、ロバート・G・コリンズ(Robert G. Collins)である。コリンズは、「海賊は、バイロンに傾倒したブランウェルにとって重要な意味を持つが、『海賊』像もまた、まずはバイロンに、次にブランウェルに影響を与えるほど 18 世紀と 19 世紀はじめには重要な存在であった」と指摘する¹⁸⁾。海賊たちの恋愛というモチーフを踏まえると、バイロンの叙事詩『海賊』(*The Corsair*, 1814)の主人公コンラッド(Conrad)がバイロニック・ヒーローの典型であり、バイロンの詩ではロマンス的な側面が取り沙汰される傾向にあると考えられているため¹⁹⁾、ブランウェルの「海賊」にも同様のテーマが引き継がれている可能性も拭えないが、私掠という当時のイギリスの史実を顧みれば、バイロンの作品の主人公コンラッドに備わった特質とは異なり、ブランウェルの詩では勇ましい〈英雄〉という側面や、“The Rover”と同時期の「トランペットを 高らかに 鳴らせ」(“Sound the Loud Trumpet,” 1834/1837)のテーマにもみられるように、海賊として略奪行為を続けて領土の拡張に野心を抱き勝利することで、アングリア王国の建国に向けて貴族階級という目に見えざる権力を得たいと目論むパーシーの特徴がより顕著に物語に投影されていることがわかる。

このように、ブランウェルは当時の海賊たちの様相を自身の物語に巧みに組み込みながら、バイロンの海賊を模した形で英雄としての海賊を自身のペルソナにみだてて登場させている。短編「海賊」を経て

詩作品においてブランウェルが描き出そうとした海賊像は、自身のペルソナである海賊パーシーを独自の視座で国家の〈英雄〉に見立ててゆこうとするブランウェルの意思表示の表れなのではないだろうか。

2. “The Pirate: A Tale” (1833)におけるパーシー像

では、「海賊」たちとブランウェルの作中人物との関連を踏まえて、短編におけるパーシー像とその役割を確認してみよう。コリンズが指摘するように、ブランウェルの功績は作中人物としてのアレグザンダー・パーシーを創りだしたことにあって過言ではない²⁰⁾。しかしながら、これまでの批評では、パーシーは、悪漢として位置付けられることが多い。例えば、トム・ウィニフリス(Tom Winnifrith)は『ブランウェル・ブロンテ詩集』(*The Poems of Patrick Branwell Brontë*)に附した註において「[1834年にアングリ王国になった]徳の高いザモーナ[公爵]と比べると明らかに悪漢である」と述べ、パーシーが悪漢としての役割を担っていると言及する²¹⁾。

パーシーは、グラスタウン物語とアングリ物語(Glass Town and Angrian saga)では、シャーロット・ブロンテが“a promising youth”と言及するほど「期待を担った」人物として描かれていたが、シャーロットと共同で執筆した初期作品『島人たちの話』(*Tales of the Islanders*, 1829)を経て、ブランウェル単独の著作「イギリス人からの書簡」(“Letters from an Englishman,” 1830-32)では、反逆を企てた首謀者かつ、裏切り者ロウグとして物語中に初めて登場したのち射殺されている。そして、1833年の短編「海賊」で、彼は海賊船の船長として物語で「生き返り」を果たす。その理由は、ひとつに、シャーロットがパーシーの存在意義を認め、自身の物語のプロットに取り入れようとしたためであるが、パーシーの存在の「再生」がはじまる場面を次の引用文で検証してみよう。

I [Bellingham] fell back on the bed breathless for it was Alexander Rouge. when I looked again. he was standing erect at one end of the area with a white handkerchief in his hand The soldiers were ranged opposite. . . . [A]t length Rouge called out in a firm clear but sepulchral tone “Gentlemen FIRE” My head grew dizzy. The soldieirs fired. I saw a bright flash and loud crash. He fell dead.

Alexander ROUGUE

was no more

(*Works* 1: 238; spelling and punctuation in the original)

「イギリス人からの書簡」において、語り手ベリンガム(Bellingham)によって書かれた第14番目の書簡では、部下とともに政府軍に楯突いたロウグことパーシーの最期が、ベリンガムの視点で綴られる。この書簡では、ロウグの内面描写への言及は乏しいものの、文中の“sepulchral”という表現などの陰鬱な声は、読者に墓場を連想させる。パーシーの、“firm [and] clear”とされる声に墓場のイメージが込められているというこの一節から、ロウグとしてのパーシーは、死が迫りくる時ですら物怖じすることない、断固とした性質を備えていることがわかる。

ロウグのこのような特徴については、遡ること第8番目の書簡でも窺い知ることができる。彼は「背の高い青白い」男であり、「懸念や心配事で顔は皺だらけになり、かつてはハンサムだった容貌も苦難のために変化している」と述べられている。しかし、次の場面において勇ましく国民に向かって演説を行うとき、ロウグは「顔の色白さ」(“with a pale countenance”)、「苦境」(“worn into wrinkles with care and anxiety”)や「困難」(“his appearance . . . seemed broken down by anxiety”)から連想されるような軟弱な男ではない(195)。

“Fellow country men! Banished from all places hated by all men Persecuted by my superiors and maligned by my inferiors I have here sought that Refuge and attention which has been refused to me every where before. . . . Yes my friends now Now is the time for action now is the moment of your freedom I behold it

coming over these mountains like the rising Sun . . . I propose to you that we instantly and quickly march up to the western mountains . . . for effectually securing to us the invaluable blessing of Liberty”

(Works 1: 195-96; spelling and punctuation in the original)

「イギリス人の書簡」におけるパーシー像を分析してみると、主としてロウグには三つの性質がある。彼の「雄弁で説得力のある」(“ [h]is great Eloquence and plausible language,” 196)演説は、一つに、ロウグの、己の行いに対する揺るぎ無い自信を示しており、それが彼の饒舌さを導き出している。第二に、彼の行動は自由への希求を意味する。そして最後に、この場面は、自由を得るためには力で相手を捻じ伏せてでも率先して行動しようとする彼の意志の強さを明示している。しかしながら、皮肉にも、彼のこういった性質が、国家にとっては排除すべきものとなる。引用の “[b]anished,” “[p]ersecuted,” “maligned,” “refused” という表現にみられるように、不協和音の火種となりかねない彼の特質そのものが凶器であるとみなされたために、国家権力によって彼は「追放」され、「迫害」され、「悪影響を及ぼすもの」とみなされ、結果的に彼の存在は「否定」されていることがわかる。

では、次の引用で、短編「海賊」において語り手ベリングラムによる、ロウグの生還の場面をみてみたい。

Alexander Rougue has just returned from no one knows where He has bought a fine house in George Street where He lives in the utmost style of Magnificence. But what are his *means*, or from whence he draws his evidently princely income no one can guess This is well known that every acre of his paternal possessions has long long ago bid adieu to him.

(Works 1: 240; spelling and punctuation as well as italics in the original)

ノイフェルト(Victor A. Neufeldt)が編纂した『ブランウェル・ブロンテ全詩集』(全3巻)のうち、僅か10頁にしか満たないこの短編で、ブランウェルのヒーローの実態が読者に初めて解き明かされてゆく。ロウグが生還したのち、再び、ベリングラムの視点でパーシーの性質や、富を築いた方法などが描かれる。舞台は、グラスタウンである。パーシーことロウグの荘厳な大邸宅は、商船が絶えず行き来する広大なグラスタウンの港を一望することができる場所にある(これは、貿易が盛んな街で富を築き、大成した人物の象徴であることを示す)。先の引用文が示すように、パーシーには多くの謎がある。パーシーがどうやって財を成したのかについては冒頭のみでは分らない。ウィニフレッド・ジェラン(Winifred Gérin)はパーシーのこのような側面について、彼が生き返ったことはパーシーがブランウェルの散文および詩で中心的な役割を示すと論じているだけである²²⁾。しかしながら、実は、この冒頭の数行がジェランやこれまでの批評家が論じることがなかったパーシー像を解明する手がかりを読者に示すように思われる。

ロウグが胡散臭い人物であることは、「どこから現れたのかわからない」ことに加えて、“eternal deceiver” (242) , “usual effrontery” (243) といった言葉で繰り返し暗示されている。彼は「今は提督である」(241)と短編「海賊」で主張するが、その風貌には、成功の陰には彼を白髪にし、顔にたくさんの皺をもたらした彼の「過去」が刻み込まれている。

『「イギリス人からの書簡」の作者による物語』というブランウェルの署名をヒントに、短編「海賊」でロウグが再登場した場面を読み進めていくと、彼の変容ぶりには、彼が海賊として“illegal system” (244) や “bloody conflict” (246), “tricks” (247)を経験したことが関係していることが推測される。見通すような「鋭い目」(“his eagle eye,” 241; italics mine)をして、かつては雄弁な演説を行い、聴衆を魅了していたにもかかわらず、彼の変貌させるに至らしめた彼の過去とはどのようなものなのか。

第3節で詳説するが、ブランウェルの短編におけるパーシーに関するくだりをみれば、商人を哀れな存在であると捉えるパーシーの略奪行為は、のちに言及する詩と一貫性があることがわかる。「緋色の旗を掲げた海賊船」(“a Pirate carrying scarlet colours”)——語り手ベリングラムにとっては“suspicious vessel” (244) という表現で示されている——は「武装しておらず、積み荷を積んだ商船を見つけると襲

い掛かり]、「あたかも平和な取引を装うが実際は略奪した商品を売りさばいて」(244)利益を得る驚異的な存在だ。ウェリントン公爵(Duke of Wellington)の監視の目を回避するために「赤い海賊帽子」(“their red pirate handkerchiefs on their heads,” 246; spelling in the original)を商人の衣装に素早く着かえ、偽装することいとわない。積み荷を奪い、人質を惨殺し、相手の船に火をつけて鎮める。商船を爆発させ海に沈め、勝利の声を挙げながら再び赤い旗を掲げて帆を張り、泡立つ波を進んでゆく。このような冷却非道な行為は“bloodless”(241)や“the most violent and wanton [aggressions]”(243)という表現で暗示される。

このように、書簡や短編で暴かれてゆく「海賊」像を手掛かりにパーシーの諸相を再確認していくと、社会のアウトローではあるものの、勇敢なヒーローとして国益に寄与する存在として機能するという役割を、創作の初期段階でブランウェルはパーシーに与えようとしていることがわかる。

3. “The Rover” (1834/1837)における海賊パーシー像

これまで、パーシーことロウグの「海賊」物語におけるパーシーの役割を解釈してきたが、ここからは、海賊について詳細に述べられている詩“The Rover”において、パーシーの役割をさらに精緻に分析していきたい。すでに本稿で説明した内容と重複するものもあるが、ブランウェルの作品はプロットが幾重にも折り重なる複雑な構成となっているため、いくつかの表記と詩の背景を再度、確認しておこう。

まず、詩の題名“The Rover”とは、短編「海賊」で描かれるロウグの「海賊船レッド・ローバー号」(“The Red Rover”)のことである²³⁾。ブランウェルは短編「羊毛は高騰する」で、ノーサンガーランド公爵となり、爵位を得たパーシー(The Right Honourable Alexander Earl of Northangerland and Viscount Elrington)の、アングリアにおける冒険を描いている²⁴⁾。同時期にシャーロットは散文「私のアングリアとアングリアの人々」(“My Angria and Angrians,” 1834)を書いているが、二人が構築した架空の物語では、場所や登場人物の名称が共通する。「羊毛は高騰する」の注釈に、短編「海賊」と1837年に改稿されている詩“The Rover”についての言及があり、「パーシーが海賊船ローバー号に乗って海賊として過ごした日々を回想している」ことが追記されている²⁵⁾。そこで、ブランウェルの散文物語とのこのような関連を踏まえて、初期の「アングリア詩」の一連の物語を基にした1837年版のブランウェルの詩作品“The Rover”で、ごろつきとして社会の周縁へと追いやられているパーシー像の意義を問い直したい。

この詩は大きく分けて4つの部分から構成されている。初めに、荒れ狂う大海原をものともせず、船長パーシー(のちのノーサンガーランド伯爵)の船である海賊船ローバー号が雄々しく航海する様子が描かれる。冒頭の核となるのは、勇敢に進むパーシーの船と、震えるように進む商船といった、二艘の船の対照的な様である。海賊船については“gallant”が使われ、商船については“quiver”や“prey”(“The Rover,” lines 11-12, 以下、行数のみ示す)²⁶⁾といった表現で、二艘の船の関係性と今後の展開が示される。続いて、“timid sheep”(line 14)に準えられた商船に、“Lordly Lion”(line 16)たる海賊船が襲い掛かっていく場面に移る。その様はまるで“slaughter”(line 20)であると説明がなされたのち、船上での残虐な行為が具体的に描かれる。

海賊パーシーのひとつの側面(残忍な性質)を、散文における描写と比較しながら確認すると、部下を奮い立たせて武装させ、餌食に襲いかからんとするパーシーは略奪行為を顧みるところか、好んで、かつ勇敢に、略奪という任務を遂行しているように思われる。固有名詞の“Conner”(line 25)とは、ノーサンガーランド伯率いる革命軍に属する部下アーサー・オコナー(Arthur O’Conner)を、“Gordon”(line 25)とは、パーシーの共犯者であり、バイロン卿の縁者の名前とされている²⁷⁾、キャプテン・ジュリアン・ゴードン(Captain Julian Gordon)を想起させる。また、“home”(line 28)は、商船を襲い戦利品を奪ったことでグラスタウンに戻ることを意味する。散文と詩にみられる双方の描写で共通して用いられている“red”や“scarlet”という海賊船に使われている形容詞には、“blood”をはじめとして、この詩にみられる“blaze”や“fiery”といった血塗られたイメージとパーシーの残忍性が含意されている。「イギリス人からの書簡」を経て、短編「海賊」や「羊毛は高騰する」の記述や詩にみられるパーシー像が相関関係にあるこ

とは言うまでもないが、海賊をモチーフとした詩を解釈する上で気がかりなのは、このような一連のイメージが海をテーマにしたロマン派の詩人たちの作品と共通している点である。

ブランウェルが傾倒していたとされるロマン派詩人バイロンは『海賊』で“red”という表現に殺戮の意味を込めており、その詩において海賊船は「血染めの旗」(“my [Conrad’s] blood-red flag,” Canto III. XV, line 492)を掲げている²⁸⁾。バイロンが描いた海賊行為は、警戒心を抱かれずに相手の船に近づくために旗を入れ替えるというブランウェルが詩で用いたパーシーの戦術と重なるが、ブランウェルが描くこの戦闘の場面にはロマンス的側面はみられない。ユベール・デシャン(Hubert Deschamps)が指摘するように、「敵を欺く」ことは海賊にとって重要な戦闘手段であった²⁹⁾。ブランウェルは当時の海賊の手口や社会情勢を踏まえて海賊パーシーを造形したと考えることも可能なのではないだろうか。

We heed it not and I’m the first upon her shaking deck
While all my band of gallant heart[s] have followed at by back
.....
And Percy’s arm and Percy’s sword bath[e] all that deck with gore
An hour of tempest passes by the Galleon blazes now
And smoke and slaughter crowd her deck and heap her bending prow
Our swords are grown into our hands our eyes glance fiery light
As faint we stagger oer the wrecks of that impetuous fight
Ye have done your work most gallantly that precious merchandise
Convey upon our Rovers deck to be our well earned prize
Then fire the ship and follow me to our own deck again
To chase the coward wanderers across the stormy main (lines 37-54)

(Works 3: 45; spelling in the original)

これまで検証してきたように、パーシーの略奪行為の残忍性は散文でも同様に確認できるが、ブランウェルの詩作品においては、勇敢な英雄としてのパーシーの側面がより強調されている。デシャンによれば、海賊社会で「船長は航海と戦闘を指揮した」と考えられているように³⁰⁾、「わたし」パーシーもまた、果敢に先頭に立ち、相手側の「揺らぐ」(“shaking”)船体に指揮を取るために降り立つ。この場合の「揺らぎ」とは、商船の傾きと、武装集団に襲われた商人の動揺を示すものであり、パーシーの性質を際立たせるための対照的な意味を含みもつ。その場は戦場と化し、殺し合いが行われる。パーシーの勇敢な戦いぶりが固有名詞の繰り返しによって示されたのち、ガリオン船は爆破され、「戦利品」はローバー号に積み込まれる。縦横無尽に進むローバー号にとって商船は、引用にある「迷える子羊」(“the coward wanderers”)に準えられる弱者なのである。

さらにこの詩は、他者より自らを優位な立場に置き、武力を持って相手を屈服させようとするパーシーの特質を謳いあげている。また、この詩は、襲った船団の中で捕えた女性と婚姻するという手法を採ってでも爵位を奪い、ノーサンガーランド伯爵(貴族)となった、パーシーの好戦的な野望の原型となっている。このように、詩と散文とを関連づけてパーシーの造形を解釈すると、創作を重ねながら物語を再構築しようとするブランウェルの手法は、彼が史実やロマン派の詩に慣れ親しみ、自身の創作の世界の内側から「歴史」を見返そうとしているからこそなした術にほかならない。

結び

ブロンテきょうだいは、バイロンの他にもスコット(Sir Walter Scott, 1771-1832)を好んでいたが、スコットの著作にも『海賊』(The Pirate, 1821)があり、彼の海賊物語は1831年から1832年にかけて『ブラックウッド・エジンバラ・マガジン』(Blackwood’s Edinburgh Magazine)の“Tom Cringle’s Log”にシリーズ

ものとして分散して掲載されている³¹⁾。その熱狂的な読者であるブロンテきょうだいが一連の海賊物語に無頓着であったとは言い難い。また、パーシーの爵位に関して言及すれば、バイロンやスコットによって描かれた物語で「海賊たちは上流社会出身者か貴族であった」と指摘されている通り³²⁾、ブランウェルは海賊パーシーに、アウトロー以上の意味を含ませようとしていたことが窺える。

ノイフェルトが指摘するように、ブランウェルの詩は、1841年6月5日から1842年8月25日までの期間に、『ハリファックス・ガーディアン』(*the Halifax Guardian*)、『ブラッドフォード・ヘラルド』(*the Bradford Herald*)、『リーズ・インテリジェンサー』(*the Leeds Intelligencer*)といった地方紙に11編(1847年までにヘラルド紙とガーディアンで重複して掲載された詩6編ともう一編を加えると計18編)掲載されている。現在においても、ブランウェルが遺した一連の作品はブロンテきょうだいの作品と比べて十分な評価を得られていないかもしれないが、1842年10月1日に『ハリファックス・ガーディアン』に寄せられた記事でその独自性が評価されるなど、詩人としての彼の評価は明らかである³³⁾。とりわけ、その大部分は、『ハリファックス・ガーディアン』に掲載されているし、同紙への投稿者には、シェリー(Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)やサウジー(Robert Southey, 1774-1843)、リー・ハント(Leigh Hunt, 1784-1859)などがいる³⁴⁾。ブロンテきょうだいのなかでブランウェルの詩が初めて掲載されたということは^{***3}、彼が時の著名な詩人たちと肩を並べて公に認められたということであり³⁵⁾、これを言い換えると、この点においても再評価の余地が残されていることになる。

コリンズは、「ブランウェルはパーシー像を通じて世に語りかけている」と指摘する³⁶⁾が、これは、ブランウェルは海賊パーシーを自身の代弁者に据えることで、ロマンスの要素に溢れる創作活動から離れて史実を反映させながらアングリア物語を再構築しようとしたことが一因となっているからではないだろうか。確かに、ブランウェルの初期作品において、パーシーはブランウェルの手になる海賊という一解釈にとどまる側面もあるかもしれない。しかしながら、ロマンスを彷彿させる「旧い」海賊像とは対照的な「新しい」海賊像を追い求めようとしたブランウェルの挑戦は、自身のペルソナである〈英雄〉パーシーの視点によって時の詩人たちの傑作を語り直そうとしたブランウェルの、作家としての決意を表しているように思われてならない。

* テクストにはノイフェルト版『ブランウェル・ブロンテ全詩集』(*The Works of Patrick Branwell Brontë*. 3 vols.)を用いている(原文からの引用には括弧付でページ数・行数などを記載した)。

本稿は、日本ブロンテ協会2012年大会(2012年10月30日、於、大東文化大学)におけるシンポジウム「ブランウェル・ブロンテの詩を読むⅡ」で発表した「戦争と恋愛のはざま——アレグサンダー・パーシー考」で扱った海賊パーシーのテーマを発展させたものである。ブランウェル読書会においてブランウェルの詩作品をご指導くださいました内田能嗣先生はじめ、示唆的なご意見を賜りました日本ブロンテ協会の先生方に心から御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 岩上はる子『ブロンテ初期作品の世界』開文社, 1998, p. 83.
- 2) 菟原美和「ブランウェル・ブロンテのアングリア戦争詩——ザモーナの凋落とメタファー」『ブロンテ・スタディーズ』第5巻第5号, 2013, pp. 29-43.
- 3) 瀧川宏樹「ブランウェル・ブロンテの詩作品における海の表象」『ブロンテ・スタディーズ』第6巻第3号2017, pp. 33-40.

^{***3} ノイフェルト版『ブランウェル・ブロンテ全詩集』によれば、初めて掲載された詩はノーサンガーランド伯爵の署名による、1841年6月5日に掲載された「天と地」(“Heaven and Hearth,” 1841)である。掲載された詩のほとんどはペンネームで署名されているが、メルボルン首相(Melbourne)のホイッグ党内閣に言及した詩「メルボルン内閣について」(“On the Melbourne Ministry,” 1841)については本名であるP.B.B.を用いている(*Works* 3: 340)。

- 4) Maurier, du Daphne. *The Infernal World of Branwell Brontë*. 1960. Virago, 2006, p. 3.
- 5) 廣野由美子「ブランウェルの破滅——その実相とブロンテ姉妹への影響——」『ブロンテ・スタディーズ』第4巻 第5号, 2007, pp. 15-21.
- 6) Conover, Robin St John. “Creating Angria: Charlotte and Branwell Brontë’s Collaboration.” *Brontë Studies Transactions*, vol. 24, pt. I, Apr. 1999, p. 16.
- 7) Harty, Joetta. “Playing Pirate: Real and Imaginary Angrians in Branwell Brontë’s Writing.” *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century*, edited by Grace Moore, Ashgate, 2011, pp. 56-57.
- 8) 櫻井正一郎『女王陛下は海賊だった——私掠で戦ったイギリス』ミネルヴァ書房, 2012, pp. 3-7.
- 9) 竹田いさみ『世界史をつくった海賊』筑摩書房, 2011, pp. 7-14.
- 10) Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 3, Garland, 1999, pp. 44-45.
- 11) 同上, p. 44.
- 12) Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 2, Garland, 1999, p. 29.
- 13) Brontë, Patrick Branwell. *The Works of Patrick Branwell Brontë*. Edited by Victor A. Neufeldt, vol. 1, Garland, 1997, p. 244.
- 14) “Rover, N (1).” *Oxford English Dictionary*, Oxford UP, 2022, www.oed.com/view/Entry/168130.
- 15) 前掲 8), p. 13.
- 16) 前掲 9), pp. 12-13.
- 17) Alexander, Christine, and Margaret Smith, editors. *The Oxford Companion to the Brontës*. Oxford UP, 2006, pp. 114-115.
- 18) Collins, Robert. G., editor. Introduction. *The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë*. Clarendon, 1993, p. xxx.
- 19) 山川智恵子「*The Corsair* に見られる Byron の萌芽的自我——Byron と Conrad——」『聖徳大学研究紀要短期大学部』第27号 III, 1994, p. 64.
- 20) 前掲 18), p. xxiv.
- 21) Winniffrith, Tom, editor. Biographical Note. *The Poems of Patrick Branwell Brontë*. New York UP, 1983, p. xix.
- 22) Gérin, Winifred. *Branwell Brontë*. Thomas Nelson and Sons, 1961, pp. 48-51.
- 23) 前掲 17), p. 346.
- 24) 前掲 12), p. 30.
- 25) 同上, p. 29.
- 26) 前掲 10), p. 44.
- 27) 前掲 17), p. 221.
- 28) Lord Byron, George Gordon. *The Corsair. The Complete Works of BYRON*. Edited by Paul. E. More, Houghton Mifflin Company, 1933, p. 362.
- 29) デシャン, ユベール『海賊』田辺貞之助訳, 白水社, 1965, p. 34.
- 30) 同上, p. 99.
- 31) 前掲 7), p. 46.
- 32) Lutz, Deborah. “The Pirate Poet in the Nineteenth Century: Trollope and Byron.” *Pirates and Mutineers of the Nineteenth Century*, edited by Grace Moore, Ashgate, 2011, p. 28.
- 33) Neufeldt, Victor A. “A Newly Discovered Publication by Branwell Brontë.” *Brontë Studies Transactions*, vol. 24, pt. I, Apr. 1999, pp. 11-15.
- 34) 前掲 10), Introduction, p. xix.
- 35) Barker, Juliet. *The Brontës*. Phenix, 1994, p. 371.
- 36) 前掲 18), p. xxxvii.

受理日 2022 年 12 月 5 日

特定外来生物発見・通報を支援する アプリケーションの開発

榎 並 直 子

(武庫川女子大学生生活環境学部情報メディア学科)

小 林 時 嘉

(兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科専門職学位課程緑環境景観マネジメント専攻)

Development of an Application to Support the Detection and Reporting of Specific Invasive Alien Species

Naoko ENAMI

Department of Informatics and Mediology, School of Human Environmental Sciences

Mukogawa Women's University

Tokika KOBAYASHI

Department of Landscape Management, Graduate School of Landscape Design and Management

University of Hyogo

Abstract

Plants and animals designated as invasive alien species are proliferating all over Japan, affecting the environment as well as the agriculture and fishery industries. This study focused on *Alternanthera philoxeroides*, which severely impacts agriculture and is confirmed to breed in Hyogo Prefecture. As *Alternanthera philoxeroides* is a species of perennial aquatic plant, it can be challenging for ordinary people to distinguish it from other plants and eradicate it. Therefore, it is currently being identified and exterminated by experts. However, the number of experts is limited, and although early detection is imperative for complete extermination, it is difficult at present. In this study, we developed an application that automatically identifies *Alternanthera philoxeroides* and supports reporting to experts by building an artificial intelligence (AI) application programming interface (API). WebAPI is a mechanism for using web-based applications, and services such as advanced AI can be used even on smartphones as calculations are not performed at the user side. Using the AI API, we aim to raise awareness about familiar alien species and aid the extermination of *Alternanthera philoxeroides*.

1. 緒言

日本全国で多種多様な外来動植物(以下、外来種とする)が発見されている。外来種とは、人為的に本来の生息地域から、他の地域に持ち込まれ、定着した生物を指す。外来種の全てが生態系に影響を及ぼすものではないが、中には繁殖能力の高さや捕食性の強さによって、農林水産業に対し被害を与え、在来種の生息に悪影響を及ぼす種もある。そのような外来種は特定外来生物として、捜索・駆除が行われている¹⁾。本稿では、特定外来生物の中で、1989年に国内で最初に兵庫県尼崎市で定着が確認されたナガエツルノゲイトウ²⁾の発見・通報を支援し、さらにナガエツルノゲイトウを含む特定外来生物を一

般へ啓蒙するアプリケーションの開発を目的とする。ナガエツルノゲイトウ(図1)は、南米を原産とする多年生の植物である。水草であるが、乾燥に強いので水気のない地面でも生育する。種子に限らず、茎や葉の切片からでも繁殖が盛んで成長が早いので、水路を塞ぐなど農作物の生産に大きな影響を与える可能性がある。駆除には、根ごと刈り取った後、全てを回収し、駆除した場所を遮光シートで覆う必要があるため、知識を持った専門家による一斉駆除が必要である。また、葉や茎の形状は他の在来植物と相似しているため、花の形状による識別が行われるが、開花具合によって大きく見た目が異なるため(図1左、右)、ナガエツルノゲイトウを同定するには、専門的な知識が必要となる。現在は専門機関で



図1 ナガエツルノゲイトウ(左)開花すぐの状態 (右)開花後

ある各都道府県の環境局が発見・駆除を行っている。特に発見は専門機関による巡視と一般からの通報に頼っているが、同定することが困難であることから通報も少なく、生育可能性のある地域は広大であり、見回りも十分ではないため、発見が遅れ、繁殖の抑制につながっていない。また、拡大抑制には他地域に持ち込まないことが原則であるが、ナガエツルノゲイトウは、人体に影響を与える毒もなく、見た目も他の在来種と類似していることから危険性を理解されにくい。そのため、人体に付着し、拡大する可能性が高い。現に兵庫県内の複数の水系で、ナガエツルノゲイトウが確認されている³⁾。よってナガエツルノゲイトウを含む、外来生物の危険性や生態を啓蒙し、人為的な拡大を抑制する必要がある。

ナガエツルノゲイトウの繁殖抑制には、まず早期の発見、さらに人為的な拡大を抑制するために、一般にナガエツルノゲイトウおよび特定外来生物の危険性について認知してもらうことが課題となる。そこで、本稿では、ナガエツルノゲイトウをAIによって認識し、専門機関(各都道府県の環境局)への通報を支援するスマートフォン向けアプリケーションの開発を行った。本アプリケーションの利用により、専門的な知識がなくともナガエツルノゲイトウを認識し、一般人が専門機関への通報を容易にすることで、ナガエツルノゲイトウの早期発見を実現する。さらに、ナガエツルノゲイトウの分布状況を揭示することで、特定外来生物が身近に存在すること、さらにその危険性を示すことで特定外来生物への啓蒙につなげる。画像認識によって植物の名前を教示するアプリケーション⁴⁾はあるが、雑草であるナガエツルノゲイトウを認識可能なアプリケーションはなく、また同じアプリで通報可能なアプリケーションは存在しなかった。本アプリケーションでは兵庫県内で国内最初に定着が確認されたナガエツルノゲイトウに着目しているが、本アプリケーションの枠組みを、他の特定外来生物に適用することは新たな学習データを追加して学習させるだけで可能である。

2. 方法

本アプリケーションは、ナガエツルノゲイトウの撮影・判定機能、発見したナガエツルノゲイトウに関する情報を専門機関へメールで通報する機能、ナガエツルノゲイトウの分布マップ表示の3つで構成される。また、開発環境には Android Studio、開発言語は Kotlin を用いた。下記に、各機能についての詳細を述べる。

2.1 ナガエツルノゲイトウの撮影・判定機能

本アプリケーションでは、はじめにユーザによってナガエツルノゲイトウと疑わしい植物を撮影する。

撮影にはスマートフォンのカメラ機能を利用し、撮影した画像を AI によってナガエツルノゲイトウであるか自動で判定する。ナガエツルノゲイトウの判定には、Microsoft Azure の Microsoft Azure Machine Learning⁵⁾を用いて構築した画像認識 AI を用いる。Microsoft Azure は機械学習や AI などを提供するクラウドサービスである。機械学習手法の 1 つである畳み込みニューラル ネットワーク (CNN)を用いて、画像をナガエツルノゲイトウであることを認識するネットワークモデルを構築する。ネットワークの学習には学習データとして、ナガエツルノゲイトウの画像 125 枚と、ナガエツルノゲイトウと相似したアカバセンニチコウ 42 枚、ツルノゲイトウ 29 枚、ホソバツルノゲイトウ 64 枚の画像に名前のラベルを付与したものを利用した。いずれもつばみを含む、花の画像とした。図 1 は実際の学習データの一部である。先述したとおり、ナガエツルノゲイトウの葉や茎の形状は他の在来植物と相似しているため花による識別が一般的である。さらに、冬期は葉や茎が枯れ根だけの状態になるため、発見自体が困難である。一方で、つばみや花は、葉や茎の存在する期間の大半で存在するため(4 月から 10 月)、同定が容易な花の画像を学習データとした。ナガエツルノゲイトウは、発見次第、駆除されるため学習データは十分ではないが、今後学習データ数を増やすことができれば、葉からの同定も可能であると推測する。

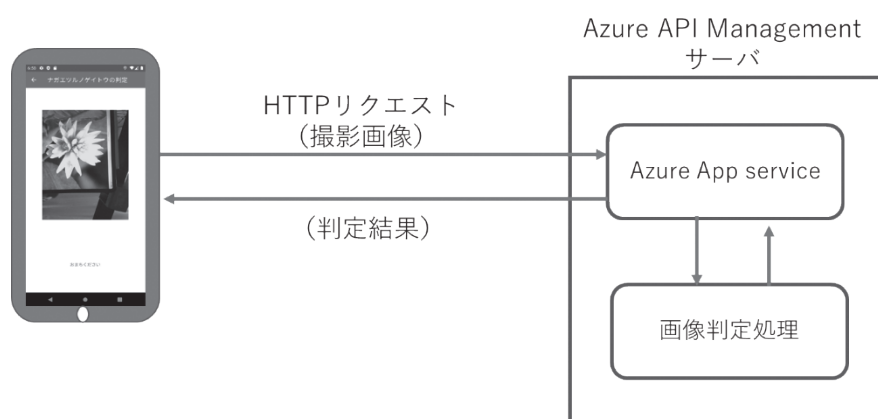


図 2 画像判定機能のシステム構成

構築したネットワークモデルを用いて、撮影した画像がナガエツルノゲイトウであるかを判定するには高い計算コストが必要となる。スマートフォンでこれらの計算を行うと、性能によってはリアルタイムでの処理が困難な場合がある。そこで、Microsoft Azure のサーバと構築したネットワークモデルを利用し、送信された画像がナガエツルノゲイトウであることを判定する Web API を作成した(図 2)。Web API は、HTTP などの Web 技術を介して、外部のアプリケーションやプログラムの機能を利用できる仕組みである。本アプリケーションでは、画像判定の機能を Web API 化して、スマートフォンの外部に置くことで、計算コストの高い画像の判定をスマートフォンの性能によらずリアルタイムで実現する。図 3 はアプリケーションの判定画面である。「判定する」というボタンを押下すると、撮影した画像が HTTP リクエストとしてサーバへ送信され、サーバでは、Azure App service が構築したネットワークを用いて作られた画像判定 API を呼び出し、画像判定を行い、ナガエツルノゲイトウであることを判定する。判定結果はサーバからアプリケーションを送信し、判定結果がナガエツルノゲイトウである場合のみ、「ナガエツルノゲイトウである可能性が高い」と表示される(図 3 右)。



図3 アプリケーション画面 (左)撮影画面 (中)判定中画面 (右)結果表示画面

2.2 専門機関(各都道府県環境局)への通報機能

通報機能は、ナガエツルノゲイトウの可能性が高いと判定された画像とその撮影位置情報を、メールに添付して専門機関に送信できるものである。画像と撮影位置を送付することで、正確な繁殖場所を把握できることが可能であり、またユーザに負担なく容易に通報を行うことができる。

アプリケーションでの通報手順について述べる。ナガエツルノゲイトウである可能性が高いと判定された場合、画面に「通報する」ボタンが表示され、押下するとメールアプリケーションが起動する(図3右)。送信先・撮影した場所の位置情報・撮影画像はアプリケーションによって入力されているので、ユーザが送信を実行すると通報完了となる。

2.3 ナガエツルノゲイトウ分布マップ表示

ナガエツルノゲイトウ分布マップでは、繁殖が確認された場所を Google マップ上に表示し、ユーザがナガエツルノゲイトウの分布状況を確認できる。分布状況を地図上で確認することで、身近にナガエツルノゲイトウなどの特定外来生物が繁殖していることを啓蒙する狙いがある。Google マップへの登録・管理は通報を受けた専門機関が行うことを想定している。マップには繁殖位置にマーカーが表示され、位置情報、撮影画像、駆除済みであるかが確認できる(図4)。



図4 Google マップを利用したナガエツルノゲイトウ分布マップ表示例

3. 結果・考察

ナガエツルノゲイトウの画像判定精度の評価および10代～80代までの男女11人に外来生物に関する認知度調査と本アプリケーションの利用評価に関するアンケート評価を行った。

3.1 ナガエツルノゲイトウの画像判定精度評価

ナガエツルノゲイトウの画像判定精度の評価を行った。学習データのうち、7割を学習データ、3割をテストデータとした。データの選択はランダムとする。学習データをネットワークの学習に利用し、テストデータを判定することで、精度評価を行った。学習データ数は十分な数とはいえないが、過学習の影響を考慮して、Azureで事前学習されたネットワークモデルを利用している。さらに、学習データを追加することができれば、精度の向上が見込まれる。画像判定結果をConfusion Matrixとしてまとめた(図5)。Actual Classが正解のクラスを、Predicted Classがネットワークによって判定されたクラスを示す。図5のNTGflowerは「ナガエツルノゲイトウ」、それ以外はナガエツルノゲイトウに類似した他の植物を示す。交差している場所の数値が正答率を示す。ナガエツルノゲイトウの画像をナガエツルノゲイトウと判定した正解率は100%、ナガエツルノゲイトウではない植物をナガエツルノゲイトウと誤判定率は平均10%となった。この結果から、本アプリケーションの用途はナガエツルノゲイトウの早期発見であるため、画像認識によるナガエツルノゲイトウの自動判定は実用可能であると考えられる。今後さらに学習データを追加することで、さらなる精度向上が見込まれる。また、本アプリケーションは通報を目的としているため、他の植物をナガエツルノゲイトウと誤認識しても、最終的には駆除を行う専門機関が判断するため、まずはナガエツルノゲイトウを見落とさないことが課題となる。

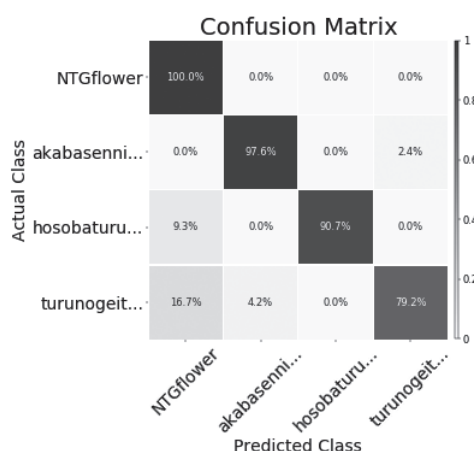


図5 ナガエツルノゲイトウの画像判定精度結果

3.2 外来生物に関する認知度調査結果

兵庫県内に住む10代～80代までの男女11人に外来生物に関する認知度調査を行った。設問は「外来生物の認知度」「どのような媒体がきっかけで外来生物を知ったか」「特定外来生物の認知度」「どのような媒体がきっかけで特定外来生物を知ったか」「ナガエツルノゲイトウの認知度」「どのような媒体がきっかけでナガエツルノゲイトウを知ったか」の6項目である。結果について考察する。「外来生物」や「特定外来生物」については、9割が「知っている」と回答したが、「ナガエツルノゲイトウ」に関しては、8割が「知らない」と回答した。また、これらの情報を知ったきっかけはテレビが大半であった。特定外来生物への認知度が高い一方で、ナガエツルノゲイトウなどの身近な特定外来生物への認知度が低いことがわかる。これは、特定外来生物の駆除を取り扱ったテレビ番組の効果であると考えられる。特定外来生物への関心が高いため、さらに身近な特定外来生物への啓蒙を行うことで、特定外来生物の人為的な拡

大防止につながる可能性が高いと考える。

3.3 本アプリケーションのユーザアンケート評価

同じ評価者 11 名に本アプリケーションを利用してもらい、アプリケーションのユーザアンケート評価を行った。設問はデザイン、レイアウト、使用手順のわかりやすさなどのインターフェイスに関わる評価、ニーズなどの 15 項目である。結果について考察する。デザインやレイアウトに関しては 7 割が「わかりやすい」と回答した。直観的に利用可能なアプリケーションであるといえる。最も「わかりにくい」と回答があったのは、判定機能画面にある「判定」ボタンであった。他の機能のボタンと同じ大きさや色で目立ちにくいこと、「判定」という文字だけでは何をする機能なのかが分かりにくいことが原因であると考えられる。「判定」ボタンの視認性を高めるだけでなく、画面操作を説明するチュートリアルが必要である。また、このアプリケーションを使用することで、特定外来生物への危険意識が高まったと回答したのは 9 割であった。アプリケーションの利用が、ユーザのナガエツルノゲイトウの認知度および特定外来生物への危険意識の向上につながる可能性を確認した。また、メールでの通報に関して個人情報の観点から抵抗を感じるユーザがいた。そのため、個人情報の取り扱いの明示および個人情報を秘匿した通報の仕組みが必要である。

4. 結論

国内で最初に兵庫県で定着が確認され、駆除が必要な特定外来生物であるナガエツルノゲイトウの早期発見・駆除を目的としたアプリケーションの開発を行った。一般ユーザがアプリケーションを利用して、発見・通報を行うことで広範囲の搜索を安価に実現するだけでなく、特定外来生物の啓蒙活動を兼ねる。今後は判定精度の評価向上と共に、判定可能な特定外来生物の種類を増やし、アプリケーションの機能向上を目指す。

5. 参考文献

- 1) 農林水産省, “第 I 章 特定外来生物とは何か?”, https://www.maff.go.jp/j/seisan/tyozyu/higai/manyuaru/old_manual/manual_tokutei_gairai_old/data1.pdf, p.10, (accessed 2021-12-29)
- 2) 地方独立行政法人大阪府立環境農林水産総合研究所, “水草図鑑(外来種)ナガエツルノゲイトウ”, http://www.kannousuiken-osaka.or.jp/zukan/zukan_database/mizukusa_gairai/4350b31dd019ea9/4750bd57e80d555.html, (accessed 2021-12-29)
- 3) いなみ野ため池ミュージアム, “兵庫県東播磨地域における特定外来生物ナガエツルノゲイトウ駆除活動について”, <https://www.hitohaku.jp/publication/book/kyousei16-p043.pdf>, (accessed 2021-12-30)
- 4) Google, “Google Lens”, <https://lens.google/intl/ja/>, (accessed 2021-12-30)
- 5) Microsoft, “Azure Machine Learning”, <https://azure.microsoft.com/ja-jp/services/machine-learning/>, (accessed 2022-7-25)

受理日 2022 年 12 月 12 日

都市と農村交流における域学連携教育モデルの可能性 — 「あやべ大学」の実践的取組事例より —

藤 井 善 仁
(武庫川女子大学経営学部経営学科)

Possibility of Interdisciplinary Education Models in Urban-Rural Exchanges From a Practical Case Study of “Ayabe University”

Yoshito FUJII

*Department of Business Administration, School of Business Administration
Mukogawa Women's University*

Abstract

Although farming villages have been reevaluated amid the trend of returning to the countryside, the proportion of depopulated areas in municipalities nationwide has been on the rise, and the problem of increasing shortages of human resources due to depopulation in rural areas is becoming more serious. During this time, it will be important for the future sustenance of local communities to consider a new exchange model between urban and rural areas focusing on the population of concern that is becoming apparent during the COVID-19 pandemic, as well as to increase the value of the existence of depopulated areas. This study aimed to clarify the significance and issues of collaboration between universities and local communities in exchanges between urban and rural areas based on a case study of interdisciplinary cooperation efforts called “Ayabe University,” which is active mainly in the Shigasato area of Ayabe City, Kyoto Prefecture, and interview surveys conducted there. We will empirically show the possibilities and problems of the interdisciplinary education model based on the perspectives of residents in accordance with the four indicators of the interaction, value discovery, problem-solving practice, and knowledge sharing types discussed in previous studies.

1. はじめに

1-1 研究目的と課題

過疎化・高齢化に直面している中山間地域において、地域住民同士の闊達な交流の希薄化や財政状況の悪影響、ひいては地域自体の持続可能性が困難になるという懸念要因が指摘される中、2022年4月、総務省(2022)¹⁾により、国勢調査(令和2年)の結果を反映した過疎地域の追加が公表された。過疎地域の判定の根拠は、過疎法によって、人口減少率や高齢者比率、若年者比率を指標とする「人口要件」及び、財政力指数を指標とする「財政力要件」に基づき判定される。現行の過疎地域は、令和3年4月に施行された過疎法において、平成27年の国勢調査に基づき判定されたものであり、今回、令和2年の国勢調査の結果に基づく過疎地域の追加分が、65の地方自治体に及んだ結果となっている。具体的には、表1に示したように、追加前の現行における過疎関係市町村数の合計が820になっていたのに対し、追加後のそれは885と全国で65の地方自治体が新たに過疎地域に判定される結果となった。

表 1 令和 2 年国勢調査に基づく過疎地域の追加分

過疎関係市町村数	現行	追加後
全部過疎	650 (37.8%)	713 (41.5%)
一部過疎	149 (8.7%)	158 (9.2%)
みなし過疎	21 (1.2%)	14 (0.8%)
合計	820 (47.7%)	885 (51.5%)

(出所)総務省「令和 2 年国勢調査に基づく過疎地域の追加について」より、筆者作成。

注：() の % は、全国の市町村数 1,718 に占める各項目(全部過疎など)の割合を示す。

事実、全国の市町村数(1,718)に占める過疎地域の割合は全部過疎で 37.8% から 41.5% へと増加し、合計値でも、現行の 47.7% から 51.5% へと増加していることがわかる。過疎地域に認定され、中央政府からの財政支援が受けられることで集落の維持に貢献するという利点もあるだろうが、農村地域における過疎化の進行は将来時点における地域人材の担い手不足が加速するという意味において、決して楽観視できないものである。これまで多くの大学で実施されてきた地域貢献に関する様々な取り組みは、「産学(官)連携」という形で進められてきた背景があり、そこでは行政事業レビューなど、研究成果に対する事後評価が多数なされてはいるが、地域教育効果を目的とした域学連携に関し、地域の声を組み入れた実証的な考察をした既存研究は存外、少ないのが現状である。

そこで本研究は、京都府綾部市の志賀郷地区を中心として活動している実践学習「あやべ大学」という取り組み事例とそこで実施した地域住民 93 人へのインタビューによる実態調査により、都市と農村の交流における大学と地域が連携することの意義と課題を明らかにすることを目的とする。その際、中塚・小田切(2016)²⁾や中塚(2015)³⁾で示されている農山村を支える大学の地域連携活動の形に関し、分類された 4 つのタイプにしたがって、地域と大学の交流、連携活動において、集落住民側が重視する上位 2 項目の検証を行い、その上で地域住民視点に立脚した域学連携の教育モデルを示すこととする。

1-2 事例の位置づけ

本研究において、京都府綾部市を事例研究対象とする意義は以下の三点となる。第一に、先に示した総務省(2022)¹⁾で今回、65 の地方自治体のうち、すでに京都府北部で全部過疎に指定されていた京丹後市、宮津市の 2 市及び、伊根町、与謝野町の 2 町に加え、綾部市も新たに指定されるなど、市全域で過疎化が進行しており、したがって行政中心に危機意識を強くもち、若年層の地方移住を進める施策を積極的に展開しているからである。今回、京都府で追加された全部過疎地域は綾部市のみで、一部過疎を有する市町村として、木津川市を加えると、府全体で追加指定された地域は 2 自治体であった(表 2)。

表 2 京都府の過疎関係市町村数(令和 4 年 4 月 1 日時点)

	京都府	全国	
市町村数計	26	1,718	
過疎関係市町村数	12	885	京都府下の市町村名
過疎市町村	9	713	綾部市、伊根町、笠置町、京丹後市、京丹波町 南山城村、宮津市、与謝野町、和束町
一部過疎を有する市町村	2	158	木津川市、福知山市
みなし過疎市町村	1	14	南丹市

(出所)総務省「令和 2 年国勢調査に基づく過疎地域の追加について」より、筆者作成

第二に、綾部市を調査地とする意義は、綾部市が年々、人口が減少していく地域でありながら、比較的社会的条件(病院や工業団地の存在、高速道路の整備など)に恵まれた都市近郊型の地域として、都市と農村の交流に積極的な自治体であり、今後の都市の課題を写し出す示唆に富んだ農村コミュニティをもつ地域と考えるからである。第三に、中塚・小田切(2016)²⁾が大学と地域の連携活動にともなう「地

域の不満・大学の不安」問題として、大学と地域のコミュニケーション不足を問題点として指摘しているが、綾部市志賀郷地区では、志賀郷地区自治会連合会と密接に連携している志賀郷地域振興協議会という地域自治組織が自治会・連合会と大学を仲介するハブとなる重要な役割を果たしており、農村における危機意識が地域全体で共有されているからである。

2. あやべ大学の取組概要

2-1 研究背景と問題意識

教育、研究、社会貢献という大学に期待される3つの使命があるが、この3者の概念はそれぞれ別個の役割として存在するものではなく、本来、絶えず三位一体の関係性の中で実践が行われることが有効と考える。優れた教育を行うには、研究が必要であり、その研究成果がアカデミックな世界でのみ有用な知見ではなく、幅広く経済社会に寄与する社会貢献として評価されるべきであるが、これまで多くの大学で実施されてきた地域貢献に関する様々な取り組みに対し、研究フィールドを提供する地域の側、いわば現場の声を十分に汲み入れた活動になっていたかどうかの事後評価が十分になされているとは言い難い現状があるだろう。例えば大学がゼミナールの活動として、地域に入り調査を実施し、その研究調査結果を卒業論文のテーマとして分析、発表していくことは大学の教育、研究活動にとって非常に有用かつ不可欠な活動であることは論を待たないであろう。昨今、大学に求められている社会貢献、地域貢献という観点からすると、些かバランスを欠いた関係性であると、当事者として自省の念をもつものである。実際に、フィールドを活用することで得ることができる大学側の便益(メリット)に対し、地域の方々にもたらす諸々の費用(デメリット)の方が過重になっていることも事実であろう。

その結果、当該研究の具体的成果が地域へいかに還元されているのかわからないという不満の声を聞くこともしばしばである。また、橋本・山田・藤田・大西(2011)⁴⁾で指摘されているように、農山漁村におけるプロジェクト推進上の課題として、地域が一体となった受け入れ体制の構築に関し、地域の理解醸成が非常に大きな課題となっている事例もあるだろう。2006年に改正された教育基本法第7条では、教育、研究で得た成果を広く社会に提供し、社会の発展に寄与するべきという「社会貢献」が明文化された。野澤(2016)⁵⁾では、持続可能な大学の地域連携活動として、地域と大学との互酬的関係を指摘した上で、教育基本法改正で新設された大学の第3の使命を「地域貢献」ではなく、「地域連携」と表現することを提案しているが、本論文では地域と大学の互酬性、協働関係を重視する立場で、地域貢献や社会貢献、地域連携の中から、大学の社会貢献という側面をより強調した「域学連携」の視点から教育モデルを検討したい。

2-2 研究対象地区の現状

本稿で分析する研究フィールドは、京都府北部に位置する綾部市の志賀郷地区となる。綾部市は、由良川や里山風景に彩られた田園都市であり、人口は令和2年国勢調査確定値⁶⁾として、31,846人となる。舞鶴港の後背地という地理的条件や工業団地の利点を生かした企業誘致を積極的に進めている。市内全体では12地区があり、今回の調査ではそのうちの限界集落が集まっている志賀郷地区を研究対象としている。志賀郷地区の総人口は2021年3月時点で1,159人(表3参照)となっており、10町区すべてで高齢化率が50%超の限界集落となっている(2021年時点)が、京都縦貫道が整備されたことにより、京阪神地区から自動車でも1時間程度で移動可能かつ、グンゼ(株)や日東精工(株)という東証一部上場企業の本社があるなど、社会的インフラや地域資源に恵まれた地方自治体であることから、移住先進自治体として、有名な地域である(藤井(2021)⁷⁾)。

表 3 綾部市志賀郷地区 10 町区の人口構成

綾部市志賀郷地区										総人口
志賀郷	志賀	向田	篠田	別所	内久井	金河内	坊口	仁和	西方	
240人	70人	143人	120人	92人	34人	68人	73人	96人	223人	1,159人

(出所)綾部市提供資料(行政区別年齢別集計表 R3.3)より、筆者作成

そのため、高齢化と過疎化が進展している農村地域であっても、多くの大学が断続的に調査活動に入り、地域の人々と大学関係者、学生との交流に慣れた人々やそれらを支援する地域自治組織が機能している地域である。とりわけ、志賀郷地区自治会連合会を頂点として、志賀郷地域振興協議会が危機感を保ちながら大学関係者との連携に関心を寄せ、互酬的關係として、大学関係者の活動を積極的に支援している。こうした良好な地域との関係のもと、志賀郷地区を活動拠点として、複数大学の学生が地域で活動する中、本研究では該当地域では初となる 93 人に及ぶインタビュー調査を学生とともにに行った。

2-3 実践学習プログラム「あやべ大学」

武庫川女子大学経営学部(兵庫県西宮市)は 2020 年 4 月に開設された新設学部である。本学は 80 年の歴史をもつ女子総合大学として、様々な人材を時代の要請に合わせ育成してきた歴史があるが、開設当時、女子大学では初の経営学部として誕生した学部である。現在は経営学科の 1 学科編成であるが、企業や地域と協働、連携しつつ活動を展開する「実践学習」を学部の軸に据え、経営に関する実践力を伴った学びが選択できる教育環境を提供しているところに特色があるといえる。正課授業である「実践学習」は、1 年次後期から 4 年次前期の間に、45 時間相当の活動を行い、活動成果を報告発表することで 1 単位となり、卒業までに最低 4 単位が必要となる必修科目となっている。

表 4 実践学習「あやべ大学」スケジュール(期間：2021 年 7 月～2022 年 3 月)

	日程	あやべ大学講師	インタビュー調査：対象町区	実施形態
あやべ大学説明会	7月31日			対面
	7月31日		志賀・金河内	対面
	8月31日	山崎善也市長：特別授業		遠隔
	9月24日	綾部市企画政策課1名		遠隔
第1クール	10月1日～10月3日		志賀郷・向田・内久井・仁和・西方	対面
	10月2日	内久井町代表者2名		対面
	10月3日	仁和町代表者1名		対面
第2クール	10月8日～10月10日		志賀郷・向田・西方	対面
	10月8日	綾部市観光交流課1名		対面
	10月9日	志賀郷町代表者1名		対面
	10月10日	向田町代表者1名		対面
第3クール	10月15日～10月17日		志賀・金河内・坊口	対面
	10月15日	綾部市人権推進課1名		対面
	10月16日	西方町代表者1名		対面
	10月17日	志賀町代表者1名		対面
第4クール	10月22日～10月24日		篠田・別所・内久井・仁和	対面
	10月23日	別所町代表者4名		対面
	10月24日	篠田町代表者1名		対面
最終研究報告会	3月13日			対面
	3月20日			対面
	合計人数	インタビュー人数	93名	
		あやべ大学講師	17名	

(出所)筆者作成

筆者は実践学習の担当教員として、「あやべ大学」というプロジェクトを企画、運営している。本プロジェクトは 2021 年度からスタート(1 年目)し、初年度は、学生 9 名が参加し、2022 年の 8 月から 2 年

目の活動が予定されている。

初年度のあやべ大学は、表4に示したように、住民説明会(あやべ大学説明会)を2021年7月31日に志賀郷公民館で実施したことから実質的にスタートさせ、8月から本格的に調査活動を開始する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響のため、2度の延期を余儀なくされた。その間、自治会、連合会関係者と緊密な調整を経たのち、10月に第1～第4クールに分けて総勢、9名の学生と担当教員(筆者)が調査活動を実施した。各クールは2泊3日で地域に滞在し、自治会関係者の世話人より、空き家を無償で提供していただいた(光熱費等の実費は教員負担とした)。食事については、公会堂(金河内町)の台所を貸していただき、学生自ら料理をした他、焚火会を通じて、屋外での懇親会を開催していただき、農村の現状や特色に関し、地域の方々と歓談しながら学んでいった。

3. 調査結果とロジックモデル

3-1 調査方法、調査対象の属性と調査結果

2021年7月～10月にかけて、同地区に居住する地域住民93人に対し、大学が取り組む地域活性化の取り組みや地域と大学の連携、都市と農村の交流における地域と大学の課題について、質問をした。インタビュー調査対象者の性別、年齢区分は表5の通りである。

表5 インタビュー調査の属性と集計区分

男性：56人(60.2%)			女性：37人(39.8%)		
40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	合計
13人	11人	40人	25人	4人	93人

(出所)筆者作成

まず最初に現状把握のため、「大学などが取り組む地域活性化の取り組み」に関するこれまでの経過を踏まえた感想や課題を包括的に質問した。その結果が図1となる。

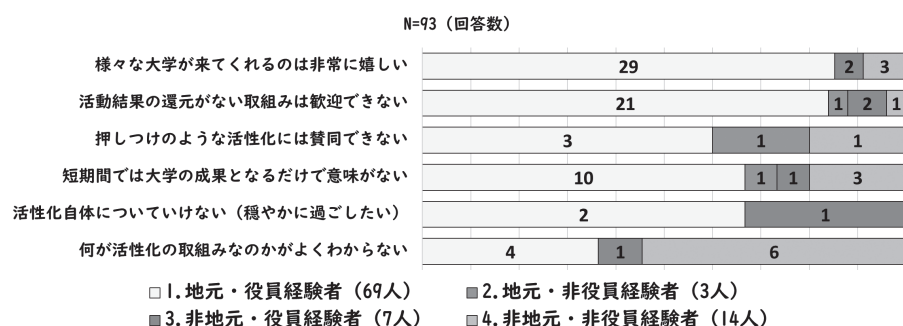


図1 インタビュー調査結果(大学などが取り組む地域活性化の取り組みをどう思うか)

(出所)筆者作成

第一に、「活動結果の還元がない取り組みは歓迎できない」(図1: 26.9%)という回答事実を踏まえ、活動当初段階から、どのような目的でどのような成果を還元していくのかを成果が出る前から説明しておくことが重要である。第二に、「短期間では大学の成果となるだけで意味がない」(図1: 15.1%)との回答結果より、単発の企画で調査に入ることよりも、長期的かつ継続的活動として、地域に寄り添った関係性を構築しなければ、地域社会で受け入れられることは難しいという点がある。第三に、「様々な大学が来てくれるのは非常に嬉しい」(図1: 36.6%)と最も高い割合を示した回答に注目すると、地域と大学の連携に関し、潜在的かつ本質的な課題があると考えられる。この回答と第二で指摘した「短期間では大学の成果となるだけで意味がない」を併せて検討すると、地域側の住民としては、積極的に大学側を受け入れる気持ちの準備をしているにもかかわらず、大学側がそれに十分に答えられていないために、短期の成果に対し、懐疑的な回答をしていると考える。それはこれまでの大学の調査活動が成果の還元として、住民側に意識されていないという意味で、大学教員として自省をするべき調査結果となった。この結果は大学が社会貢献(地域貢献)として、地域で得た新たな知見を教育現場や研究成果としてアカ

デミックな世界でのみ還元していく傾向が強いことの表れではないかと考える。

3-2 調査結果と考察

図1で質問した内容を踏まえ、今回のインタビュー調査の共通質問として、中塚・小田切(2016)²⁾が類型化した4つのキーワード、すなわち「交流型」、「価値発見型」、「課題解決型」、「知識共有型」に関し、都市と農村交流の観点から、集落側の住民として、今後、大学に求める地域連携活動のタイプとして、2つを選択してもらう形で集計した(表6)。1つの選択に対し、1ポイントとし、93名全員が2つを選択したので、合計で186ポイントの集計結果が得られた。中塚・小田切(2016)²⁾の定義によると、交流型は「地域の農家や住民とともに、農作業やイベントをおこなう活動タイプ」、価値発見型は「グループ単位での活動を計画的におこない、地域の新しい価値発見を目指すタイプ」、課題解決実践型は「地域の抱える課題に対して、具体的な実践活動を通して解決を試みるタイプ」、知識共有型は「教員や大学院生が中心となり、専門知識をもって地域課題の解決に貢献しているタイプ」となる。

表6 大学の地域連携活動に関する抽出結果

ID	交流型	価値発見型	課題解決実践型	知識共有型	ID	交流型	価値発見型	課題解決実践型	知識共有型	ID	交流型	価値発見型	課題解決実践型	知識共有型
1	1	0	0	1	32	1	0	0	1	63	0	0	1	1
2	1	0	0	1	33	1	0	0	1	64	0	0	1	1
3	0	0	1	1	34	1	0	1	0	65	1	0	0	1
4	1	0	0	1	35	0	1	1	0	66	1	0	1	0
5	1	0	1	0	36	1	0	1	0	67	1	0	0	1
6	1	0	0	1	37	1	0	0	1	68	0	1	1	0
7	1	0	1	0	38	1	0	0	1	69	1	0	0	1
8	0	1	1	0	39	0	1	1	0	70	1	0	0	1
9	1	0	0	1	40	0	1	0	1	71	0	1	0	1
10	0	1	0	1	41	1	0	0	1	72	1	0	1	0
11	1	0	0	1	42	1	0	1	0	73	1	0	1	0
12	0	1	1	0	43	1	0	1	0	74	1	0	0	1
13	1	0	0	1	44	1	0	0	1	75	1	0	0	1
14	1	1	0	0	45	1	0	0	1	76	1	0	0	1
15	1	0	0	1	46	1	0	0	1	77	1	0	1	0
16	0	0	1	1	47	0	1	1	0	78	0	1	0	1
17	0	1	0	1	48	1	0	0	1	79	1	0	0	1
18	1	0	1	0	49	1	0	0	1	80	1	0	1	0
19	1	1	0	0	50	0	1	0	1	81	0	1	1	0
20	1	0	0	1	51	1	0	0	1	82	0	0	1	1
21	1	0	0	1	52	1	0	0	1	83	1	0	1	0
22	1	0	0	1	53	1	1	0	0	84	1	0	0	1
23	1	0	1	0	54	0	1	1	0	85	1	1	0	0
24	1	0	1	0	55	0	0	1	1	86	0	0	1	1
25	1	0	0	1	56	1	0	1	0	87	0	0	1	1
26	1	0	0	1	57	1	0	0	1	88	1	0	0	1
27	0	0	1	1	58	1	1	0	0	89	1	0	1	0
28	1	0	0	1	59	1	0	0	1	90	0	0	1	1
29	1	0	1	0	60	1	0	0	1	91	1	0	1	0
30	1	1	0	0	61	1	0	1	0	92	0	0	1	1
31	1	0	0	1	62	1	1	0	0	93	0	0	1	1

(出所)筆者作成

表6をもとに4つのキーワードを年齢区分別に集計した分析結果が表7と表8となる。表7は、年代別に各4つのキーワードに対し、調査対象者が上位2つを選択したポイントの集計結果となる。93名が2つのキーワードを選択した結果、合計値が186となっている。交流型に関し、80歳代は、調査対象者が4名と僅少ではあるが、課題解決を通じた地域資源の見直しや専門知による長期的な信頼関係を基礎とする知識共有型を重視し、人を呼び込むイベント中心の交流、活性化は1名のみが希望するという結果が得られた。

表7 集計結果1

	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	合計
交流型	9	9	30	18	1	67
価値発見型	3	3	10	5	0	21
課題解決型	5	4	15	12	4	40
知識共有型	9	6	25	15	3	58
合計	26	22	80	50	8	186

(出所)筆者作成

表8 集計結果2

(%)

	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	合計
交流型	4.8	4.8	16.1	9.7	0.5	36.0
価値発見型	1.6	1.6	5.4	2.7	0.0	11.3
課題解決型	2.7	2.2	8.1	6.5	2.2	21.5
知識共有型	4.8	3.2	13.4	8.1	1.6	31.2
合計	14.0	11.8	43.0	26.9	4.3	100.0

(出所)筆者作成

一方で、40歳から50歳という若手層よりも、60歳から70歳という高齢層の方が交流型を好んでいることがわかった。この結果より、同一地域での連携活動では、世代間の断絶を常に意識することが重要であることが示唆されると考える。同一地域で活動を展開する場合、世代間の多様性を意識した域学連携モデルを構築し、刺激を与えるような活性化のみならず、地域全体で特定の世代を取り残さないような域学連携の教育モデルを構築する必要があると考える。

表8は、表7をもとにし、構成比を示したものとなる。各構成割合は、分母に全回答数の186をとり、各項目が占める割合を算出したものとなる。交流型では、地域で何らかの役員を経験済で比較的時間的余裕がある60歳代が最も、学生との交流に前向きな年代層であることがわかった。過疎地域では60歳は「若手」とみなされる傾向がある中、農作業などの体験を基礎とする交流型が40歳や50歳代よりも、60歳、70歳代の方が積極的である結果となっており、地域における多様性を考える際、年齢や性別を過度に付度することはむしろ担い手を確保するにあたり、逆効果となることが示唆される。

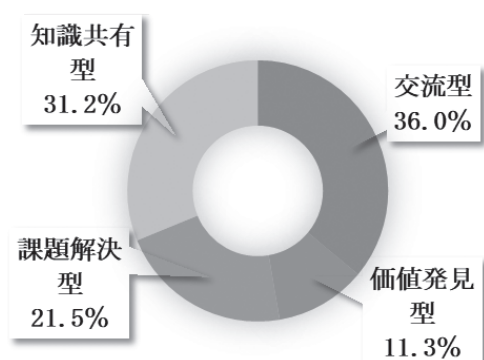


図2 地域連携活動の4類型における構成比
(出所)筆者作成

知識共有型は、中塚・小田切(2016)²⁾で専門知識を教員や大学院生が中心となって貢献するとされているが、「あやべ大学」でのそれは、どちらかというと集落住民側が先生役(あやべ大学講師)となり、学生に地域の実情をレクチャーすることを重要な役割としている。図2は表8をもとに4つのパターンを各年代で集計した合計値の構成比となる。4つのうち、住民側が求める地域連携活動のタイプは交流型→知識共有型→課題解決型→価値発見型の順となった。このうち、1番目と2番目に位置する交流型と知識共有型が上位に位置する理由を図1のインタビュー調査結果から考察する。

すると、現状の都市と農村交流に付随する課題として考えることができる。すなわち、交流型はイベント中心に集落側がおもてなし側で学生側がお客扱いとなる傾向が強く、「様々な大学が来てくれるのは非常に嬉しい(36.6%)」ものの、「短期間では大学の成果となるだけで意味がない(15.1%)」という反応があったと思われる。つまり、地域教育という観点より、集落住民側が該当地域の実情や課題を提供する立場となり、主体的に知識を共有する中長期の関係性を意識した交流型が求められている可能性がある。都市と農村の連携における集落側の課題として、宮地(2019)⁸⁾では学生の集落住民との向き合い方を第一に大学側の課題とした上で、同時に集落側の課題でもあると重要な指摘をしている。こうした実態に関し、大学側が活動の目的や住民の期待を学生に理解させ、集落側も学生に対する積極性や主体的に関わる姿勢が必要であろう。

3-3 域学連携教育モデル(ロジックモデル)

以上、インタビュー調査結果及びその考察から高齢者世代を取り残さない世代間の多様性を織り込んだ域学連携の教育モデルを示す。図3は、input → activity → output → outcomeの4段階の流れを図示したロジックモデルとなる。特に第1段階でのインプットが交流と知識共有の観点から重要となる。企画段階から学生も含め、地域関係者と議論し、対象地域の実情を他ならぬ集落に居住する当事者からご教授いただき、実態に即したインプットを入れるということが最大の特徴となる。地域の現状に関する正しいインプットがあつてはじめて議論の方向付けが可能となり、主体的な学生と高齢者間の相互交流が可能とする。なお、初年度はあやべ大学講師として、首長や行政担当者にも授業を担当していただいた。

(藤井)

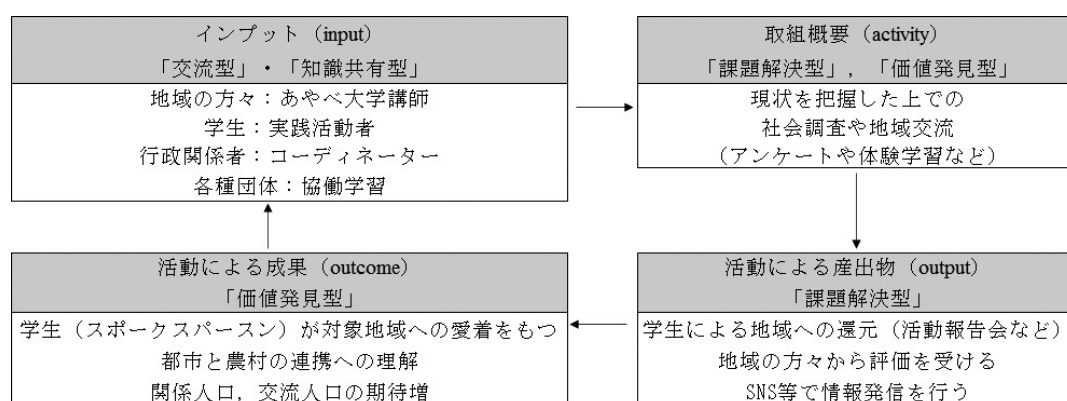


図3 域学連携教育モデル(ロジックモデル)

(出所)筆者作成

活動による成果(outcome)として、林(2019)⁹⁾が指摘するフィールドワーク教育の成果の1つとして愛着効果が挙げられているが、実際に初年度に参加した9人の学生から、今後も個人的に綾部市に関わりたいという感想が多々あった。教育的観点から、我々大学教員の立場ではなく、暮らしに根差した生活者として、教師役の集落住民から直面している課題や懸念に関し、経験談として授業を受けた上での activity, output が可能となったことが貴重な経験であろう。output を得るための input が特段、重要であることの意味は、実際に地域が直面している課題を双方、共有することで集落住民側も授業を通じて、自分の地域への整理ができたとの感想をいただくなど、イベント中心ではない「交流型」がこの域学連携教育モデルの重要な要素となる。結果、林(2019)⁹⁾がいう地域に愛着をもった人材を育成・輩出することで、スポークスパースンとなる期待、さらには関係人口の拡大に期待が高まる可能性をもつと考える。

4. 総括—域学連携教育モデルの構築へ向けて—

図1で示した大学などが取り組む地域活性化の取組みに関し、全体93名のうち、34名(36.6%)の回答が肯定的であったが、無回答の1件を除くそれ以外の回答である58名(62.4%)の回答内容は否定的なものであった。この結果は、決して否定的なものとして評価するものではなく、むしろ地域の存続をかけた限界集落において、大学に対する期待の裏返しであると考え、地域の活性化につながる域学連携教育モデルにとって、最大の懸念要因は、地域側も収穫体験や農作業体験などに代表される農村の良い面だけを見せても単発の活動で終わる可能性があるということである。受け入れ側の地域が学生や大学関係者をお客さんとして、おもてなしの対象としている関係性では学生への教育効果はあっても、中長期的な関係として地域と大学の連携活動が継続されないだろう。

また、図1の結果では「活動結果の還元がない取組みは歓迎できない(26.9%)」との回答を得たが、output から outcome へいたる際に必須となる地域への還元が不可欠である。地域が大学に期待を寄せ、積極的な受け入れ体制が整備されているにもかかわらず、大学側の地域へのフィードバックがなければ、地域関係者からすると手間だけがとられ、互酬的關係にはいたらず、不信感がもたれるであろう。そうではなく、このモデルでは、output に際し、地域の積極的かつ主体的な受け入れ体制と大学側の成果還元との組み合わせが重要となる。

さらに、他のインタビュー調査結果では集落住民の以下のような懸念が述べられていた。すなわち、「高齢者が6割強程度に増えてきて地域との関わりも減り、話し合いや交流が少なくなっている」や「高齢化がとても進んでいて高齢者の方をこれからどう元気にしていくかという視点が少ないと思う」、「若者中心の活性化や次世代、次の世代と言われると高齢者として置き去りにされているような感じがする」、「故郷を守る身としては、高齢の方をどのように元気にしていくかも活性化に入れなければ、若い人と断絶ができてしまう」などのように、高齢化が進んだ過疎地域特有の懸念があることは事実である。

それゆえ、イベント中心の従来型の活性化のみならず、大学として地域と関わるならば、大学生という若者と地域の高齢者が地域教育の観点から交流するモデルが今後の人口減少時代に求められる域学連携の姿であると考え、一般にIターンで来た住民と地元の高齢者の間で何らかの軋轢が伴うことが指摘されるが、若者が高齢者と融合できるような取組みをしなければ活性化とはいえないと考える。活性化というと、得てして人を増やすことに視点がいきがちであるが、人が入ってくることだけが活性化ではなく、「知識共有」を伴った「交流」による高齢の集落住民の充実感も、活性化の要因として重要であろう。

本論文では「あやべ大学」プロジェクトが初年度に関しては、成果があり、2022年度も2年目の継続活動が予定されているものの、結果としてまだ短期的な活動しか展開されていないという根本的な課題がある。また、93人のインタビュー調査を実施したものの、年齢区分が20歳代～30歳代の子育て層からの聞き取り調査ができていないなど、限定的な調査結果となっていることが本研究の限界部分である。こうした課題を踏まえ、今後も都市と農村の交流を互酬的関係のもと、域学連携の教育モデルをさらに改善させることが課題となる。

引用文献

- 1) 総務省. 「令和2年国勢調査に基づく過疎地域の追加について」. 資料1, 2022.
https://www.soumu.go.jp/main_content/000803256.pdf, (accessed 2022-08-10).
- 2) 中塚雅也・小田切徳美. 大学地域連携の実態と課題. 農業計画学会誌. 2016, 35巻1号, pp.6-11.
- 3) 中塚雅也. 大学との連携による農山村の再生, JC総研レポート, 2015, VOL33, pp.2-7.
- 4) 橋本卓爾・山田良治・藤田武弘・大西敏夫編. “都市と農村 交流から協働へ”. 日本評論社, 2011, 第11章, pp.180-198.
- 5) 野澤一博. 大学の地域連携の活動領域と課題. 産学連携学. 2016, 13巻1号, pp.1-8.
- 6) 綾部市企画総務部総務課. 令和2年国勢調査の確定値. 2021.
<http://www.city.ayabe.lg.jp/somu/shise/toke/kokuse/r02kokucyokakutei.html>, (accessed 2022-08-10).
- 7) 藤井善仁. 綾部市への人口移動における移住, 定住政策の評価. 武庫川女子大学紀要. 2021, 68巻, pp.89-97.
- 8) 宮地忠幸. 大学生と農村住民との農業体験を通じた交流活動の意義と課題—国土舘大学西谷学校を事例として—. 経済地理学年報. 2019, 第65巻1号, pp.61-81.
- 9) 林琢也. 地域づくりの現場で学ぶフィールドワーク教育の成果と課題—郡上市和良町を事例に—. 経済地理学年報. 2019, 第65巻1号, pp.45-60.

受理日 2022年12月5日

高校「校則」の「見直し」と地域性に関する一考察 —北海道内公立高校に着目して—

大 津 尚 志
(武庫川女子大学学校教育センター)

Current School Rules in High Schools: Specific Characteristics in Public High Schools in Hokkaido

Takashi OTSU

*Research Center for School Education and Childcare
Mukogawa Women's University*

Abstract

In Japanese schools, school rules are not created based on laws and orders of Ministry of Education, but the contents of the rules are to be determined by principals of each school. School rules have a great influence on the everyday lives of high school students. Recently, the content of school rules has come to be seen as a problem. Rules on hairstyles and clothing remain particularly problematic. It is often pointed out that there may be many unnecessary provisions. A nationwide review of school rules is taking place. This paper analyzes the trend of “review of school rules” in Hokkaido prefecture. And this paper also analyzes the contents of the school rules. I will divide public high schools in Hokkaido into three categories: urban areas, intermediate areas, and depopulated areas, and analyze the regional characteristics of each. We learned that depopulated areas are not always “conservative” and that school rules in Hokkaido have many provisions regarding life outside the school. It must be said that the 2019 Hokkaido Board of Education’s “review” instructions were incomplete.

はじめに

中学・高校において各学校で制定される校則は法令上の根拠に基づいて制定されるものではない。しかし、日本社会においては、中学生・高校生の生活に大きく影響を及ぼすものとして校則は存在する。一方で校則の内容が問題視されるに至って発生した「校則の見直し」はこれまでに、1988年ごろから、2017年ごろからの2度にわたって全国的に行われている¹⁾。

本稿では高校における校則の見直し動向及び内容を分析するが、北海道立高校(中等教育学校を含む)に注目する。北海道に注目する理由は、北海道教育委員会(以下「道教委」)による2度の「見直し」の指示が行われていて、かつ校則の地域性を研究するための第一歩として有用と考えるからである²⁾。都道府県内に、政令指定都市(札幌市)・中核市(函館市・旭川市)がある一方で、離島・へき地にある高校が多く存在するゆえに、研究対象として適切と考えるからである。本研究では情報公開・提供をうけた212校の北海道立高校の校則(同一校に全日制、定時制の双方がある場合それぞれ一校とカウントする。通信制高校は校則がない場合が多く除外した。)を研究対象とする。

北海道内の公立高校は19区の学区に分かれている。そのうち石狩学区「札幌市、江別市、千歳市、恵庭市、北広島市、石狩市、当別町、新篠津村」、および人口密度が高い室蘭市、小樽市、旭川市、函館

市に所在する高校を加えて(合計 68 校)、①「都心部」とする。総務省より 2021 年に過疎関係市町村として「全部過疎」に指定されている地域にある高校(合計 85 校)を③「過疎部」とする(ただし、人口減少率は高いが人口密度の高い小樽市は除く)。①③に該当しない高校(合計 59 校)を②「中間部」とする。上記の分類にも従って分析をすすめることとする。

以下、①北海道内の「校則見直し」動向を分析すること、および②都市部、中間部、過疎部という地域性を含めて校則の現状を明らかにすることを本稿の研究目的とする。

近年の高校の校則に関する分析研究としては、既に、大阪府内・埼玉県内公立高校の校則について先行研究が存在する³⁾。それはあくまでほぼ都市部のみに着目するといえる。

1 「校則見直し」の北海道内における動向

「校則の見直し」に注目が集まったのは 1988 年に文部省が指示をだした以降の時期(「第一期」とよぶ)がある。1988 年の時点では、33 の都道府県で校則の実態調査の実施や実施予定があったといわれている。その後、2017 年に大阪府内の公立高校で「生まれつき茶髪の生徒が黒染を強要された。」と主張する生徒から訴訟が提起されたこともあり、再び「校則の見直し」が注目されるようになった。見直しの「第二期」と呼ぶ。2021 年に文部科学省は事務通知を出すに至っている。

第一期において、道教委は 1988 年 7 月に「校則(生徒心得)の見直しの指針」⁴⁾を出している。道教委は資料を作成し、全国的に問題となっていることとして、「細かい部分まで規制し、項目が多岐にわたり、羅列的である」と述べ、具体的には「頭髪は二分刈り以下とする。」「下着は白一色とする」「消しゴムの形状は直方体であること」⁵⁾という「極端な例」を挙げている。なお、道教委の通知前に校則の見直しにとりくんでいた学校も多数あり、その例も紹介されている。

以下のように校則の見直しの指針を述べている⁶⁾。

- 1 校則は…全教職員の共通理解が不可欠であること。したがって、平素から共通理解を深めるための体制についても配慮が必要であること。
- 2 見直しに当たっては家庭や地域からの批判や意見に謙虚に耳を傾け、児童や父母等の意見を聞く機会をもつとともに、学校の役割や家庭、地域の役割について理解を求める必要があること。
また、社会常識に照らした検討も必要であること。
- 3 見直しにあたっては、具体的に次の観点からの検討が必要と考えられる。

(1)校則(生徒心得)の内容

- ア 絶対守るべきもの
- イ 努力目標というべきもの
- ウ 児童の自主性に任せるもの

(2)校則(生徒心得)の制定手続き

- ア 学校の教育計画に基づき定めるもの
- イ 家庭や地域の意見を聞き、その要望を踏まえた行動様式の定着を目指して定めるもの
- ウ 発達段階に応じ、児童生徒が自主的に目標として掲げるものとして定めるもの

(3)校則(生徒心得)の指導、運用

- ア 法的効果を伴う懲戒をもって指導しなければならないもの
- イ 法的効果を伴わない事実行為としての懲戒をもって指導しなければならないもの
- ウ 教育相談的教育指導を行い指導するもの
- エ 児童会、生徒会あるいは学級、ホームルームでの話し合いを中心に自主的に守るよう進めていくもの。

(1)に関しては、明らかに文部省の指示をうけてである⁷⁾。しかし、校則の内容をそこでいう「アイウ」にわたった校則は、今回調査した高校にも一つもなかった。それは、全国的動向ともいえる。道内のある中学で校則における「生徒規定」「生徒心得」の混在を問題にしたケース⁸⁾が実践記録としてあるが、少

数にとどまった実践である。今日にいたるまで「規則」と「心得」の混在は続いている。そうなった理由としては、「規則」と「心得」の分離は必ずしも明確にできることではないことが考えられる。

(2)(3)に関しては、これもそのような「分類」をした高校は現在にいたってもみられない。そもそも、校則の改正手続きを校則でさだめている学校は1校にすぎなかった⁹⁾。懲戒、懲戒処分と校則のむすびつきが希薄なのは全国的傾向である。いわば「罪刑法定主義」の観点から問題があるといえる。

その後、この通知がでた時期において校則にどのように変化したかは今のところ明らかにできる資料を見ることができていない。一例としては、札幌市立柏丘中学校のように校則問題がとりだたされる前から、「生徒一人一人の自己教育力を育てる」ことを目指して校則改訂活動を数年にわたって行い、教師、父母、生徒ともに改訂を議論して、新聞でも報道もされたという例もある¹⁰⁾。しかし、すべての中学にわたってこのような取組が行われたわけではない。一方で、他県の動向をみると「細かすぎる校則」が改善する方向には若干動いているとは推測できる¹¹⁾。

「校則の見直し」の第二期においては、2019年12月に道教委より、各市町村教育長、市町村立学校長宛に「校則の積極的な見直しについて(通知)」¹²⁾が出された。そこでは、「これまでも、校則については、学校が教育目的の実現に向けて必要な生徒の行動指針として制定し、適切な運用及び見直しなどの取組を進めているところですが、令和4年度(2022年度)から成年年齢が18歳に引き下げられることを踏まえ、…令和2年度(2020年度)を目途に、法令との関連を踏まえて、校則や校内規定の見直しを図ることが必要」と述べている。そして、「基本的な考え方」としては「校則は、学校が教育目的を達成するために、必要かつ合理的な範囲内において、児童生徒が遵守すべき学習上、生活上の規律として定められるものであること。」と述べている。内容に関しては「校則の内容については、社会通念上合理的と認められる範囲において、学校の専門的、技術的な判断が尊重され、幅広い裁量が認められるとされていること。」と述べたうえで、下記【表1】の①～⑥までの内容の項目を示している。見直しの基準としては具体的なものとはいえず¹³⁾、学校の広範な裁量権を強調しているとも受け取れる。運用に関しては、以下の5点を述べている。

(1) 校則に基づき指導を行う場合は、一人一人の児童生徒に応じて適切な指導を行うとともに、児童生徒の内面的な自覚を促し、校則を自分のものとしてとらえ、自主的に守るように指導を行うことが重要であること。

(2) 教員が形式的に規則にとらわれて、規則を守らせることのみの指導になっていないか注意を払う必要があること。

(3) 校則の指導が真に効果を上げるためには、年齢からは法律上可能であっても、学校で生活するに当たり必要なルールがあることなど、その内容や必要性について児童生徒・保護者の間に共通理解をもつことが重要であること。

(4) 入学時等までに、あらかじめ児童生徒・保護者に周知しておく必要があること。その際、校則に反する行為があった場合の対応について、その基準と併せて周知することも重要であること。

(5) 就職が内定した進路決定者が、就職する時期までに必要な運転免許を取得できるようにするなど、円滑に職業生活に入れるよう配慮することが必要であること。

(1)(2)(4)に関しては、文部科学省『生徒指導提要』(2010年版)を念頭においていることは明らかである¹⁴⁾。(5)に関して、北海道内においてはその地域性ゆえか、校則が自動車運転免許に関する言及をしているところが多い。自動車免許取得可能となるのは法律上満18歳からであるが、高校独自のルールで制限してよいのかという問題がある。仮にできるとしても全面禁止の是非は問われる¹⁵⁾。上記(3)は「必要なルール」である場合は制限してよいとの解釈を述べている。その実態については後述する。

その後2021年9月には全224校(全日制、定時制、中等教育学校の調査結果が公表されている(道教委が調査を行ったのは同年6月14日～7月21日)。

【表 1】 令和元年(2019 年) 12 月 5 日付通知に基づき校則を見直した学校¹⁶⁾

内容	高校数
①通学に関するもの(登下校の時間、自転車・オートバイの使用等)	20
②校内生活に関するもの(授業時間、給食、環境美化、あいさつ等)	21
③服装、髪型に関するもの(制服や体操着の着用、パーマ・脱色、化粧等)	117
④所持品に関するもの(不要物、スマートフォン・携帯電話、金銭等)	30
⑤欠席や早退等の手続き、欠席・欠課の扱い、考査に関するもの	24
⑥校外生活に関するもの(交通安全(運転免許取得を含む。)、校外での遊び、アルバイト等)	39
⑦その他	0

問題となりやすい「服装、髪型」については、およそ半分の高校が対応している。同報告書で見直しの事例として「『地毛証明』の届出を廃止した、ツーブロック禁止を見直した、男女制服を廃止し、制服 A・B と選択できるようにした、Y シャツの学校指定をなくした。」が挙げられている。

2021 年 4 月時点で道教委が把握している状況としては、「ツーブロックの禁止など、頭髮に係る具体的な規定がある学校が 33 校あり、「見直した学校」が 5 校、「見直す予定のある学校」が 4 校、「見直しを検討している学校」が 1 校である。「『地毛証明』の提出を求めている学校」は 42 校あり、「入学時などに学年全ての生徒に届出用紙を配付している学校」が 12 校、「申し出た生徒のみに届出用紙を配付している学校」が 30 校ある。12 校のうち「見直す予定がある学校」が 3 校、30 校のうち「見直す予定がある学校」が 2 校、「見直しを検討している学校」が 1 校である。「ツーブロック」「地毛証明書」とともに各学校が積極的に検討しているという状況とはいえない。

以下、2021 年 5 月の時点で情報公開請求(提供)によって入手できた「校則」を分析対象とする。通知が出された後に「見直し」がなされた後のものとほぼ判断できるであろう。

2 北海道内公立高校の校則の内容分析(地域性を含めて)

内容の分析にはいるが、注目すべき論点として、上記の通知でも最も見直しが行われた「服装・髪型」について中心に分析軸を定めてみる。対象とした高校の数は、①都心部 68、②中間部 59、③過疎部 85 である。なお、定時制で校則が入手できたのは、①都市部 9、②中間部 9、③過疎部 2 であった。

(1) 服装について

①制服について

制服の規定のない学校は① 15 校② 13 校③ 3 校であった。合計 31 校のうち、20 校は定時制である。定時制の高校はいずれも制服がない。全日制で制服の定めのない学校はわずかにある程度であり、なかには「本校には…昭和 48 年から制服が自由化された経緯がある」(旭川市)と述べるところもある¹⁷⁾。

②スカート丈記述について

制服を定める学校ではスカート丈に関しては多くの学校で「膝が隠れる程度」などの記述があるが、① 43 校(81%)、② 38 校(82%)、③ 64 校(78%)といずれも高い比率で規定が存在した。キュロットスカートを認めているところもわずかながらあった。なお、男子ズボンに関しては「ボンタン」「ラッパ」などの規制がいまだに校則に残っているところも存在した程度である。

③セーター、カーデガン、ニットベストについて

制服を指定している学校のうち、学生服の下に防寒用などに着用するセーター、カーデガン、ニットベストについては①学校で指定のもの、②黒、茶、白、グレーなどの色の指定があるところ、③規定なしのところ、が存在した。なお、校則に「規定なし」とある場合は、自由に着用してもよい場合、指定のベストはあるがセーターなどを自由に着用してよい場合、着用が許されていない場合、校則以外にルールがある場合などが考えられる。都心部のほうに規定が多いという結果にはなった。

【表2】 校則とセーター、カーデガン、ベスト(ニットベスト)

	①都心部	②中間部	③過疎部	合計
学校が指定のものを着用	30 (56%)	19 (41%)	38 (46%)	86 (48%)
指定の色のものを着用	11 (20%)	15 (33%)	14 (17%)	40 (22%)
規定なし	13 (24%)	12 (36%)	30 (37%)	55 (30%)

(筆者作成)

④女子スラックスについて

制服を定めている学校で女子にスカートのほかスラックスを着用可能としている学校は① 19 校(36%)② 24 校(52%)③ 35 校(43%)であった。都市部より中間部・過疎部のほうが比率が高いのは通学距離が長く、寒冷対策が必要であるからと考えられる。なお、女子もスラックスが制服であり 5 月～11 月はスカート着用も可としている高校もある(浦河町)。

⑤靴下について

制服を定めている学校で靴下の色の規定のある学校は① 40 校(75%)、② 30 校(65%)、③ 56 校(68%)といずれも比率が高い。なお、上記には女子のみ色指定(女子は紺色ハイソックスなど)という場合も含む。スラックスを着用していると靴下の色は第三者からすぐには通常判別できない。男女で色の指定が異なるところもあった。靴下の形状については「ルーズソックス禁止」が数校ある程度であった。古い規定が残存していると考えられる。

(2) 頭髪・髪型について

頭髪規定に関しては、定時制高校を中心に全く規定していないところもある。「染髪・パーマのみ禁止」としていることが多い。「染髪・パーマ」に関しては過疎地のほうが規定がある場合が多い。染色の規定があるところは脱色も同時に禁止している。「茶髪の禁止」が書かれているところは数校ある。「生まれつき茶髪」の生徒への配慮に欠けるとも受け取れる。校則で「地毛証明書」の提出を求めるところはある。パーマについても多くの学校が禁止しているが、他にパーマに加えてはウェーブ、カールの禁止やエクステの禁止について書かれているところもある。染髪・パーマとも過疎部のほうが禁止規定をおいている学校が多い。

「眉・耳・肩にかかる」頭髪を禁止するなど、「長さ」(男子のみ長髪禁止の場合を含む)、および「女子のヘアピン・リボンなどは華美なものは避ける」(北広島市)などの「リボン・ゴム・髪飾り」に関する規定(華美でないもの、あるいは黒、紺、茶など色指定といった規定が多い)などのいわゆる「細かすぎる規定」は、むしろ都心部に多いことがわかる。「受験・面接を受ける際に、ふさわしくないと判断される頭髪」とするところも散見される。他に、「髭を伸ばしたりしない」「眉毛に手を加えない」は、散見される。茶髪・パーマの禁止は当然であり、さらなる禁止規定をおいていると考えられる。都市部のほうが学校選択の余地が高いゆえに、「生徒指導」を大切にしているかのように標榜する高校があるということとも考えられる。

「特定の髪型」を禁止することに言及するものは全体の 2 割程度、そのうち報告書でも言及されている「ツブロック」は 1 割程度であるが規定が残っている。他に、「モヒカン」「左右非対称」「リーゼント」などが散見された。「周囲に威圧感や不快感をあたえる」可能性があるものが禁止されていると思われるが、ツブロックは必ずしもそうでないという見方がある。なお、「ポニーテール」禁止は皆無であった。

頭髪は「高校生らしい」ものという言い方をしているところは 2 割程度である。概括的にそう言っているだけならともかく、「なにが高校生らしいのか」という解釈をめぐるトラブルになる可能性はある。教師が「高校生らしくない」といえば、それで校則違反とみなされるとすれば、生徒が納得できるとは限らない。他に概括的規定としては、「清潔」「端正」「品位を保つ」などが見られた。

【表 3】 校則と頭髪・髪型

	①都市部	②中間部	③過疎部	合計
染髪・規定あり	49 (72%)	45 (76%)	77 (91%)	171 (81%)
パーマ・規定あり	47 (69%)	43 (73%)	76 (89%)	166 (78%)
頭髪の長さに関する文言あり	25 (37%)	14 (24%)	20 (24%)	59 (28%)
リボン・ゴム・髪飾りなどに関する文言あり	14 (21%)	10 (17%)	14 (16%)	38 (18%)
特定の髪型禁止	14 (21%)	10 (17%)	23 (27%)	47 (22%)
ツーブロック禁止に言及	5 (7%)	6 (10%)	11 (13%)	22 (10%)
校則に「高校生らしい」の文言	14 (21%)	13 (22%)	21 (25%)	49 (23%)

(筆者作成)

(3) 校内生活について

学校内における化粧の禁止規定、装飾品(ネックレス、ピアス、指輪など)の禁止規定については多くの学校でおかれている。

不要物に関しては、「校内生活に不必要なものは持参しないこと」(北広島市)などと定められる場合、および「ライター・ゲーム機など」(江別市)、「学習にふさわしくない物 例トランプ・花札・雑誌・マンガ・飴・ガム・お菓子など」(中標津町)など、具体化までされている場合がある。なにが「不必要」であるのかが必ずしも明らかでないという問題はある。

金銭に関しても、「多額の金銭」は持参しないこと、などとある。携帯・スマホに関しては、「校内では電源はきること」「授業中は電源をきること」という場合のほか、「本人の同意なく他人の顔や身体の画像、動画の撮影をしてはいけない。」「他人の画像や個人情報をネット上…に書き込むことは重大な犯罪であること」(新十津川町)と詳細な規定がある場合もある。

携帯・スマホに関しては、教室内持ち込み、電源をいれる場所などの規定などがある。化粧・装飾品に関しては過疎部の学校に規定がある割合が高い。不要物、金銭、携帯(スマホ)に関しては、いずれも都市部より中間部・過疎部のほうが規定のある比率が高い。

【表 4】 校則と校内生活

	①都市部	②中間部	③過疎部	合計
化粧・規定あり	46 (68%)	37 (63%)	71 (84%)	154 (73%)
装飾品・規定あり	45 (66%)	37 (63%)	77 (91%)	189 (89%)
不要物持ち込みに関する規定あり	22 (32%)	20 (34%)	34 (40%)	76 (36%)
金銭持ち込みに関する規定あり	15 (22%)	17 (29%)	24 (28%)	56 (26%)
携帯・スマホに関する規定あり	21 (31%)	23 (39%)	35 (41%)	79 (37%)

(筆者作成)

(4) 校外生活について

①夜間外出

多くの学校で「21 時まで」あるいは「22 時までに帰宅すること」という時間制限を設けている。「盆・正月・祭りのとき以外は 21 時まで」という場合もある。規定の有無に関して、地域差はほとんどない。

②禁止場所(バー・スナック)

「パチンコ店、ゲームセンター、居酒屋、スナック、ダンスホール、雀荘」など禁止場所が指定されている場合がある。「高校生としてのぞましくないところには立ち入らないこと」(札幌市)など、どこが「のぞましくないところ」なのかが曖昧とおもわれることがある。地域差は中間部がすこし低いかのように

思われる。

③旅行届

旅行時には届出を出すという規定がおかれているところがあるほか、外泊(知人宅などを含む)の禁止規定がおかれる場合がある。別に「登山、キャンプ」などに届け出を求める場合もある。「1泊以上の旅行は、保護者または、それに準ずる引率者を必要とし、計画については、事前に届けでて、指導を受ける」(江別市)まで要求しているところもある。「保護者の同意」のみを求めるところはある。校外のことにまで学校の許可は必要なのかという問題があるが都市部のほうがむしろ多く、3分の1程度の学校に規定がある。都市部の生徒のほうが生徒で旅行を企画することが多い、とも考えられる。

他に「外出時は本校生徒としての自覚を持ち」などと、所属意識をうながしているところもある。「身分証明書の携帯」を求めているところもある。「北海道青少年[健全]育成条例により青少年の出入りを禁じている場所」¹⁸⁾(枝幸町)と書かれている場合もある。同条例は「知事は、興行の内容が著しく粗暴性を助長し、性的感情を刺激し、又は道義心を傷つけるもの等であって、青少年の健全な育成を害するおそれがあると認めるときは、その興行内容の全部又は一部を指定し、興行者に対し、これを青少年に観覧させることを禁止することができる。」「深夜における興行場等への立入りの禁止」などを定めている。

④アルバイト

アルバイトに関して、「届出または許可制」「禁止」「規定なし」の場合がある。禁止規定をおいているのは都市部の学校にわずかにあるのみであった。多くの学校で高校生および保護者の経済状況を反映して全面禁止はできないとの判断かと思われる。規定なしは、定時制高校に多かった。現在も就業しながら通学する生徒が比較的多い以上、規定をおく必要はないという判断であろう。全日制の場合は、校則以外のルールで許可または届出が求められている可能性がある。

時期に関しては、「夜9時までに帰宅できること」あるいは、「土日、長期休業期間のみ」「長期休暇中は週3日以内」などという時間制限がなされている場合がある。「定期考査前1週間から終了までは禁止。ただし新聞配達はこの限りではない。」となる場合もある。「1年生の1学期の間は禁止」と学校に慣れるまでの規定をおいているところもある。

内容制限に関しては、「酒類を主として取り扱う飲食店」「車両(荷台)に乗る業務など、危険を伴う業務」などの規定がある。「評定に『1』及び欠席時数が2割を超える教科がないこと」など成績等の要件が付く場合がある。「服装・頭髪で校則違反し、学校生活に問題があること」(長万部町)が要件になることもある。服装・頭髪規制違反の罰則として「アルバイト禁止」があるのだとすれば「筋違い」ではないだろうか。アルバイトの時間・内容制限ともに、過疎地のほうが多い。「経済的事情」があるときのみアルバイトを許可するところも少数ながらある。その規制は都市部に多い。

⑤自動車免許

校則に自動車免許に関する規定が多くみられることは、日常生活に自動車の必要性の高い北海道内の事情を示しているといえる。

期間制限としては、「入校は3年生の10月1日以降」「3年次の前期期末考査終了日以降」「家庭学習期にはいつてから」「試験1週間前から試験終了までをのぞく」などとある。「卒業年度終了まで運転しないこと」「取得した免許は保護者が預かること」という条件を守ることが課せられる場合もある。

成績等要件としては、「進路が決定していること」、「評定「1」の科目がないこと」「欠課時数がすべて15パーセント以下」という条件がつく場合がある。「学業不振でない者」「出席状況が良好なもの」など判断基準が必ずしも明確でない場合がある。「企業が採用にあたって、免許取得を要求している場合」という場合や、「保護者の同意」を求める高校もある。

期間制限、成績等要件ともに過疎部のほうが、規定がある比率が高い。

なお、原付については、原付通学を認めているところもある。自動車免許の取得は認めるが、原付、二輪免許取得は一切禁止というところが多い。原付、二輪車のほうが法律上は16歳から免許取得が可能であり、運転に必要な判断能力が身に着く年齢は低いとされているはずである。

【表 5】 校則と校外生活

	①都市部	②中間部	③過疎部	合計
夜間外出・規定あり	54 (79%)	41 (69%)	69 (81%)	164 (77%)
外出禁止場所・規定あり	52 (76%)	44 (75%)	62 (73%)	158 (75%)
旅行届・規定あり	22 (32%)	14 (24%)	20 (24%)	56 (26%)
アルバイトの届出・許可規定あり	55 (81%)	48 (81%)	78 (92%)	181 (85%)
アルバイトの禁止規定あり	3 (4%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (1%)
アルバイトの規定なし	10 (15%)	11 (19%)	7 (8%)	28 (13%)
アルバイトの時間制限あり	36 (53%)	38 (64%)	67 (79%)	141 (67%)
アルバイトの内容制限あり	36 (53%)	39 (66%)	63 (74%)	138 (65%)
アルバイトの成績などによる制限あり	22 (32%)	24 (41%)	38 (45%)	84 (40%)
許可に関して「経済的理由」への言及あり	17 (25%)	8 (14%)	13 (15%)	38 (18%)
自動車免許取得の届出・許可規定あり	55 (81%)	52 (88%)	82 (96%)	189 (89%)
自動車免許取得禁止規定あり	4 (6%)	0 (0%)	0 (0%)	4 (2%)
自動車免許の規定なし	9 (13%)	7 (12%)	3 (4%)	19 (9%)
自動車免許・期間制限あり	39 (57%)	45 (76%)	69 (81%)	153 (72%)
自動車免許・成績等制限あり	20 (29%)	35 (59%)	52 (61%)	107 (50%)

(筆者作成)

むすびにかえて

北海道教委により、2019 年から見直しを求める通知がだされ、一定の「見直し」が行われている。通知はあくまで「強制的」なものではなく、校則の内容をどう決定するかは校長の判断となる。最も問題となりやすい「服装・髪型」について一定の「見直し」動向が存在することはあるが、「地毛証明書」の提出を求めるところもあり、服装に関する細かな規制も依然として存在する。2019 年に道教委が見直すべきと指示した「規則を守らせることのみの指導」となりかねない。また、「校則に反する行為があった場合の対応について、その基準と併せて周知することも重要であること」という指示には、校則の文面を見る限りほぼ対応がされていない。校則違反と懲戒、懲戒処分を明確でないままであり、それでは恣意的な対応が発生する可能性がある。現在のところ、2019 年の通知に基づいた「見直し」は未だ不十分な段階にあり問題は残っていると評価せざるをえないであろう。教育現場の多忙化のなか、「見直し」以外に優先させなければいけない事項が多く致し方ないとも考えられる。

校則の動向について、地域性を含めて検討してきた。都市部と過疎部では、過疎部のほうが「保守的」ではないかと筆者は当初仮説をたてていた。確かに、染髪やパーマの禁止、化粧や装飾品の持ち込みに関する規定は、過疎部の数値が高いことをデータは示している。一方で、女子生徒にスラックス着用を認めるところは中間部、過疎部のほうが多かった。中間部・過疎部のほうが通学距離が長くなるゆえに冬季の寒冷対策を考えてかとも思われる。

しかし、「頭髮の長さ」「リボン・ゴム・髪飾り(の色や形状の指定)」といったいわゆる「細かすぎる校則」は都市部のほうが多く存在する。都市部のほうが、生徒にとって高校受験時に選択肢が多い。過疎部では事実上の小学区制となっていることもありうる。都市部の学校のほうが他校との比較にさらされやすく「学校の評判を気にする」「保護者からの支持をうけられるか」を気にするために、ということが考えられる。

校外生活に関する校則について、「アルバイトの届出、時間制限、内容制限」「自動車免許の規定、期間制限、成績等制限」はいずれも過疎部のほうが規定がある比率が高くなる。「旅行届」だけは都市部のほうが企画する生徒が多いせいか、頻出する。北海道の校則は、大阪府と比べて校外生活の規定がかな

り多い¹⁹⁾。自動車免許の必要性が北海道のほうが高いことは容易に推測できるが、それ以外の面でも校外生活への介入が多いということがいえる。

本研究において北海道の校則の地域性の検討を一部行っただが、さらなる分析や他県の動向など未開拓の領域は多く存在することはいうまでもなく、今後の課題とさせていただきたい。

(付記)本稿執筆の資料収集あたって、神谷航平さん(群馬県内在住、高校生)の協力を得ました。記して感謝します。(2022年8月記)

注

- 1) 山本宏樹. “校則をめぐる闘争のゆくえ”. 内田良・山本宏樹編. だれが校則を決めるのか. 岩波書店. 2022, pp.180-220.
- 2) なお、約30年前の時点でのものであるが、校則の地域性について研究した先行研究としては、坂本秀夫. 生徒規則マニュアル. りょうせい, 1987、がある。坂本の研究は県別による特徴に言及している。現時点ではまた異なる状況があることは言うまでもない。
- 3) 大津尚志. “大阪府内公立高校の校則”. 校則を考える. 晃洋書房, 2021, pp.67-86. 田中祐児, 岡田有真, 荒木真歩, 本田由紀 “埼玉県立高等学校における校則のテキスト分析”. 東京大学大学院教育学研究科紀要. 2022, 61, pp.419-436.
- 4) 北海道教育委員会編. 自律する心を育てるために. 北海道教育委員会, 1989.
- 5) 前掲、p.3.
- 6) 前掲、pp.45-46.
- 7) “初等中等局長あいさつ要旨”(1988年4月25日)文部科学省初等中等局児童生徒課. 生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について, 2002, pp.317-318.
- 8) 北海道教育委員会編、前掲、pp.22-28.
- 9) 校則の改訂規定があるのは、今回の調査では「学校、生徒いずれか双方が、この心得・校則の改正の必要を認めた場合(生徒の場合は50名以上の署名を必要とする)には、生徒会執行部及び生徒指導部に署名用紙を提出し、すみやかに改正に関する話し合いを行わなければならない。」(滝川市)とある1校のみであった。
- 10) 柏丘中学校憲章の定着をめざして(昭和63年度版、平成元年度版)、札幌市立柏丘中学校, 1989, 1990、憲章萌ゆ(平成2年度)、札幌市立柏丘中学校, 1991.
- 11) 大津尚志 “校則に関する調査”. 校則を考える. 晃洋書房, 2021, pp.39-49.
- 12) 北海道教育長通知 http://www.s-shido.hokkaido-c.ed.jp/R01tuuchi_01/R11205-no752-2.pdf (accessed 2022-08-29)
- 13) 例えば、神戸市教育委員会の「校則見直し」のガイドライン(2021年6月、https://www.city.kobe.lg.jp/documents/44320/030616_kousoku_guidelines.pdf (accessed 2022-08-29))では、①さまざまな文化や性の多様性への配慮がないもの、②健康上の配慮がないもの、③その他合理的な説明が難しいと思われるもの、と基準を示している。
- 14) 文部科学省. 生徒指導提要. 教育図書, 2010, pp.192-193.
- 15) 公立高校においてバイク免許取得が問題となったケースは高知バイク事件がある。参照、大津尚志、前掲、注2、pp.57-60.
- 16) 北海道教委「道立学校における校則の見直し等の取組状況について」
<https://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/ssa/77932.html> (accessed 2022-08-29)
- 17) 高校紛争の影響と考えられる。大津尚志 “校則の歴史 戦後”. 校則を考える. 晃洋書房, 2021, pp.25-38.
- 18) 原文ママ。[]内は筆者による。
- 19) 参照、大津尚志、前掲、注2、pp.77-79.

受理日 2022年12月22日

「武庫川女子大学紀要」投稿細則

令和4年3月8日 改正

I 総 則

1. 投稿資格 本紀要に投稿できるものは、委嘱を含む本学専任の教授、准教授、講師、助教、助手、助手補とする。上記以外からの寄稿掲載は本委員会の審査の結果による。ただし、本学専任講師以上との共同研究者を含むことはさしつかえない。
2. 原稿内容 学術的研究領域における原著論文とする。ただし、価値ある調査報告及び研究資料はこの限りではない。
3. 著作権 掲載された論文の著作権は武庫川女子大学に帰属する。なお、本紀要に掲載された論文は、武庫川女子大学リポジトリに搭載し、インターネットを通して公開する。
4. 用 語 日本語または英語とする。
5. 書 式 一段組みの横書きを原則とし、紀要編集委員会が必要と認める場合には、縦書きも可とする。
6. 投 稿 原稿はこの細則に従って、作成しなければならない。これに従っていない原稿は作成のし直しを著者に求めることがある。原稿は、一編につき、刷り上がり9頁以内とする。投稿にあたっては、原稿正本1部、副本2部にUSBメモリーまたはCDを添え、必要事項を記入した投稿申込書とともに提出する。
7. 審 査 紀要編集委員会は1投稿論文につき、原則2名の査読者に審査を依頼する。査読者は論文の総合評価について、掲載の可否の判断、及び審査意見を付する。論文の採否は査読者の評価を参考に紀要編集委員会が決定する。
8. そ の 他
 - a) 提出期限を過ぎた原稿は、その理由を問わず、これを受理しない。
 - b) 著者の校正は原則として2校までとする。校正に際しては、印刷上の誤り以外の字句の訂正、挿入、及び削除は、原則として認めない。
 - c) その他の必要事項は、紀要編集委員会が定める。
 - d) 紀要編集委員会の開催は、紀要編集委員長が発議する。

II 原 稿

1. 原 稿
 - 1) 原稿の1枚がそのまま刷り上がりの1頁となるよう、図や表、写真なども、著者自身がアレンジして、原稿の中に組み込みいれておく。ただし、必要に応じて図、表を別に添付して提出してもよい。
 - 2) 提出原稿はA4判で作成する。
 - 3) 原稿の第1頁は次の順に従って作成する。
 - i) まず、表題(表題は正確、かつ簡潔に論文内容を表すものであること。また、副題は行を改めて書くこと)、著者名(さらに行を改めて中央に書くこと)、所属(学部、学科を、さらに行を改めて中央に書く)の順に書く。
 - ii) 和文原稿の場合、原則として、表題、著者名、所属は欧文を添える。
 - iii) 次に欧文要旨(200語前後)を置き、以下本文を続ける。欧文要旨及び欧文本文についてはネイティブチェックを受けたことを証明する書類を提出すること。
 - 4) 緒言、方法、結果、考察、謝辞及び参考文献などの大見出しは2行取りとする。

5)原稿は以下の要領で書く。

i)和文原稿では、1 頁 46 字× 45 行 1 段

ただし、縦書きが認められた場合、1 頁 32 字× 31 行 2 段

ii)欧文原稿では、1 頁 96 字前後× 45 行 1 段

6)和文原稿の場合、文章は原則として簡潔にし、常用漢字、ひらがな、新かなづかいを用いること。
外国語音訳、生物の和名などはカタカナを用い、外国人名、生物学名などは原綴りを用いる。

7)脚注は、関係する本文中の語の右肩に＊、＊＊などを付け、その頁の下に横線を引き、その下側に挿入すること。行間は1 スペースとする。

8)活字書体の指定は別添資料に従うこと。

2. 図・表・写真

1)同じデータを図と表の両者で示すことは許されない。

2)写真は図として取り扱い、図、表にはそれぞれ番号と見出しを記入すること。

3)図の番号及び見出しは図の下に、表の番号及び見出しは表の上に記入すること。

4)原則として、図・表・写真はモノクロ印刷とする。

3. 参考文献・引用文献

1)本文中の各引用箇所には、語句の右肩に 1), 2) …の引用番号を付けること。

2)文献はこの引用番号の順に、論文末尾に一括すること。

3)参考文献・引用文献の記入は、原則として「科学技術情報流通技術基準(SIST02)」に従うこと。

i)雑誌の場合

1. 著者名. 2. 論文名. 3. 誌名(欧文誌名はイタリック). 4. 出版年, 5. 巻数, 6. 号数, 7. 始めのページ-終わりのページ.

[例 1]岡本かおり. 心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について. 心理臨床学研究. 2007, Vol.25, No.5, pp.516-527.

[例 2]Oberman,R.P. Fused voices: Narrated monologue in Jane Austen's Emma.
Nineteenth-century literature. 2009, 64(1), pp.1-15.

ii)図書の場合

1. 著者名. 2. “章の見出し”. 3. 書名(欧文書名はイタリック). 4. 版表示(初版の場合は不要), 5. 出版社, 6. 出版年, 7. 始めのページ-終わりのページ.

[例 1]図書の 1 章または一部

湯浅幸代. “物語を切り開く磁場”. 源氏物語の生成と再構築. 竹林舎, 2014, pp.190-208.

[例 2]図書全体

Peters,Pam. *The Cambridge guide to English usage*. Cambridge University Press, 2004, 608p.

iii)ウェブサイトの場合

1. 著者名. 2. “ウェブページの題名”. 3. ウェブサイトの名称. 4. URL, (参照年月日).

[例 1]内閣府. “第 1 章 少子化をめぐる現状”. 令和元年版 少子化社会対策白書. https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measures/w-2019/r01webgaiyoh/html/gb1_s1.html, (accessed 2020-02-10).

4. その他

1)本文原稿の各頁の下、中央部に頁数を書き入れること。

2)本文の最後に、紀要編集委員会にて原稿受理日を入れる。

活字指定一覧表

	和 文 論 文	欧 文 論 文
主 題	16 P 並体(明朝)	16 P Cent. (頭のみ Cap.)
副 題	14 P 並体	14 P Cent. (頭のみ Cap.)
著 者 名	12 P 並体	12 P Cent. (頭のみ Cap.)
大 見 出(緒言など)	12 P 太字体(ゴシック)	12 P Gothic
小 見 出	10.5 P 太字体	
本文	10 P 並体	10 P Cent.
本文中の欧語, 数字	10 P Century	---
本文右肩へ添付の引用番号 本文 ^{1, 3-5)}	06 P 並体	06 P Cent.
受理年月日脚注題見出	08 P 並体	08 P Cent.
文 献 欄	09 P 並体	09 P Cent.
欧 文 項	(欧文)	(和文)
主 題	16 P Cent. 頭のみ Cap.	16 P 並体(明朝)
副 題	14 P Cent. 頭のみ Cap.	14 P 並体
著者名	12 P Cent. 頭のみ Cap.	12 P 並体
本文(要約文)	10.5 P Cent. Boldface	10.5 P 並体
図表の表題	09 P 並体	09 P Cent. Boldface

欧文人名	頭のみ Cap. 後は小文字 Cent. (Rayan.R=Cap.)
学名その他ラテン語	Italic
文献欄	
欧文雑誌および書名	Italic
雑誌の巻数(和欧とも)	Gothic

活字書体の指定(原稿に朱書きでアンダーライン)

Capital	=====	Italic Capital	=====
Small Capital	=====	Gothic Italic	=====
Italic	=====	Gothic Capital	=====
Gothic	=====		

本文は句読点にする.

「武庫川女子大学紀要」第 卷 投稿申込書

紀要編集委員会 殿

下記のとおり、紀要に投稿したいので申し込みます。

投稿者氏名

所属

内線

メールアドレス

@mukogawa-u.ac.jp

1 表題

和文：

欧文：

2 著者名(共同執筆の場合は、次頁に投稿者を含め全員記入)

3 用語(該当語に○印)

和文

・

欧文

4 原稿枚数

本文 枚

本文以外の添付資料 (図 枚 / 写真 枚 / 表 枚)

5 提出メディア

USB / CD / その他

(この他、附属図書館事務室 tosyk@mukogawa-u.ac.jp 宛に Word 形式の原稿データを送付すること)

----- 切り取り線 -----

投稿論文受付票

殿

受付日 年 月 日

紀要編集委員会 事務局
武庫川女子大学附属図書館

紀要論文共同執筆者一覧

氏 名	所 属	資格または身分
(代表)		

令和5年3月8日 発行

編集者

武庫川女子大学
紀要編集委員会

発行者

武庫川女子大学
西宮市池開町6番46号

制作

大和出版印刷株式会社
神戸市東灘区向洋町東2-7-2